



TITLE:

# チャクリー改革と王権強化：閣僚の変遷を手がかりとして

AUTHOR(S):

玉田, 芳史

---

CITATION:

玉田, 芳史. チャクリー改革と王権強化：閣僚の変遷を手がかりとして. 重点領域研究総合的地域研究成果報告書シリーズ：総合的地域研究の手法確立：世界と地域の共存のパラダイムを求めて 1996, 11: 34-111

ISSUE DATE:

1996-01-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/187523>

RIGHT:

# チャクリー改革と王権強化： 閣僚の変遷を手がかりとして

玉田 芳史

1. はじめに
  - 1-1. 本稿の目的と構成
  - 1-2. 基本的用語の説明
2. 閣僚の変遷: 1892年の前と後の比較
  - 2-1. 1782～1892年の閣僚
  - 2-2. 1892年以後の中央省庁組織の変遷
  - 2-3. 1892～1932年の閣僚
3. モンクット・ファミリー
  - 3-1. モンクット・ファミリーによる閣僚ポスト独占
  - 3-2. 4世王の親王
  - 3-3. 5世王の親王
  - 3-4. それ以外のモンクット・ファミリー閣僚
4. 王族以外の閣僚
5. 閣僚登用の理由
  - 5-1. 能力重視か?
  - 5-2. モンクット・ファミリー重視
6. 親王支配体制と近代国家形成

## 1. はじめに

### 1-1. 本稿の目的と構成

タイにおける近代国家の形成はチャクリー改革によって果たされた。それゆえ、タイの近代国家形成を理解するには、チャクリー改革がいかなる性格を備えていたのかが明らかにされなければならないであろう<sup>1</sup>。チャクリー改革の重要な成果としてもっとも耳目を引いてきたのは中央省庁の再編と領域支配の確立であった。しかしながら、中央省庁が何でも屋から

---

<sup>1</sup> 永井[1995]は欧米におけるチャクリー改革研究の動向を手際よくまとめており参考になる。

専門屋へと再編成され特定の職務を専門的にこなすようになることや、中央政府の支配が全国に一元的に及ぶようになることは、早晚いずこでも生じたことであり、タイに特徴的な現象とはいえない。これに対して、チャクリー改革のもう1つの大きな特色である王権の強化は19世紀後半以後の世界ではどちらかといえば異例なことであった。しかもタイの歴史においてもそれは稀有なことであったようである。本稿がチャクリー改革を捉える視角として王権強化を取り上げる理由はここにある。

この時期の王権強化は大臣の顔ぶれがラーマ4世王時代(1851～1868年)以前と5世王時代(1868～1910年)以後、とりわけ1880年代後半を境目として大きく変化することによってはっきりと確認しうる。貴族によって独占されていた大臣ポストの大半が親王によって占められるようになるのである。これは、1782年のラッタナコーシン朝創設以来貴族の間に埋没しがちであった弱体な王権を、5世王が強化したことを意味している。そこで成立した絶対王政あるいは親王支配体制は、6世王(1910～25年)や7世王(1925～35年)へと継承された。

こうした王権の強化が1890年代以後の改革のための手段であったのか、あるいはそれ自体が目的となっていたのかについては議論の余地のあるところである。しかしながら、王権の強化というのは動かしがたい事実であり、タイ研究の常識である。常識であるせいか、5世王時代から立憲革命までの時期の閣僚の具体的な顔ぶれとなると、意外なことに、その全体像をまとめた資料集や研究成果は、タイにおいてさえ、存在しない。存在するのは、特定の省の歴代大臣リスト、あるいは特定の時点(たとえば1892年、1910年、1925年、1932年といった政治の節目になる時点)の閣僚リストのみである[たとえばChamvit 1976]。つまり親王支配体制とは、タイの内外において、従来印象論的に語られ、常識と見なされてきたにすぎないのである。

本稿は親王支配体制の成立と維持というこの常識の虚実を検証することにより、タイの近代国家形成の特色を考察することを目的としている。全体の構成は、まず1892年から1932年にかけての閣僚全員の氏名と就任・退任年月日を『官報』などに掲載される布告に依拠して調べ、次に親王と非親王に分けて全員の経歴を主として各自の葬式本に基づいて整理する。本稿は紙幅の大半をこの2つの作業に費やすことになり、その意味で資料集的色彩合いを濃く持っている。それ続いて、そうしたデータを基礎としながら、大臣の登用がいかなる基準に基づいて行われていたのかを考察する。閣僚の登用が能力に基づいて行われていたとすれば、親王支配体制は改革や近代化という目的を達成するための手段であった可能性が高い。逆に、閣僚への登用や抜擢が能力以外の理由に基づいていたとすれば、そうした可能性は低くなる。

言い換えるならば、親王の登用の理由がいずれにあったかによって、親王支配体制の確立・維持が手段であったのか、あるいは自己目的化していたのかがある程度は確認できるであろう。最後に親王体制がタイの近代国家形成にいかなる影響を及ぼしていたのかについて若干の考察を行う。

## 1-2. 基本的用語の説明

本稿には王族や官僚が多数登場する。タイの王族には独自の位階序列があり、また官僚についても対象とする1932年以前の時期には独自の位階勲等制度があった。以下の叙述の理解を助けるために、そうした位階序列や位階勲等をあらかじめ簡単に説明しておきたい。

官僚の位階勲等(yot bandasak)には、下級から順にクン(khun)、ルワン(luang)、プラ(phra)、プラヤー(phraya)、チャオプラヤー(caophraya)、ソムデットチャオプラヤー(somdetcaophraya)といったものがあつた。この位階勲等は、独自の名称が用いられた国王の近習(mahatlek)<sup>2</sup>を唯一の例外として、行政官と軍人に共通して用いられた。個別の官僚は出世にしたがって次第に位階勲等が上昇する。ソムデットチャオプラヤーは例外的に3名だけに授与されたものであり、通常はチャオプラヤーが最高位であり、それは大臣クラスの位階勲等である。この位階勲等とセットにして用いられたものに欽賜名がある。具体例を見た方が分かりやすいであろう。ポーン・チャールチンダーの事例を見てみよう。彼はまず1885年10月27日に5世王の近習となってナーイローンチャン(nairongchan)(参考までに異動時の給与の金額をあげおくと、当初は年給60バーツ)、翌年10月14日にはチャーハーオユッタカーン(年給120バーツ)の官位を授与された。1887/8年(1940年までタイの新年は4月1日から始まっていた。タイ語原文に暦年のみが記載され、月日が抜けている場合には、西暦年を特定できない。それゆえ本稿では、前後の文脈などから特定しうる場合を除いて、見苦しいことを承知の上でこの仏暦2430年=西暦1887/8年のごとく、2年度にまたがった表記をしている)大蔵省に移り(月給60バーツ)、1891年11月1日プラ・シリアイヤサワン(月給240バーツ)の欽賜名を授与された。彼の場合にはルワンの位階勲等を飛び越えて最初からプラを与えられたことになる<sup>3</sup>。1894/5年内務省に移り(月給

<sup>2</sup> 一般に、官僚は実務に就く前の若い時期に国王の近習を経験し、それによって宮廷の風習に親しみ、同時に国王の知己を得た。国王の側からすれば、青年たちを選別する機会であつた。この他にもう1つのタイプとして、生涯国王に近習として仕えるものもいた。6世王時代は近習組織が異常に肥大したことと有名である。

<sup>3</sup> 将校や、いわゆる上級職の官僚の位階勲等はルワンから始まるのが普通であつた。

160パーツ)、1898年1月2日プラー・ウタイモントリー(月給240パーツ)の欽賜名を授与された。1912年7月15日には位階勲等はプラーのままで新たにプラー・スラボーディン(月給900パーツ)の欽賜名を授与された。そしてついに1925年11月11日にはチャオプラー・スラボーディントーンスリントーンルーチャイ(1700パーツ)の欽賜名を授与された[Phunphitsamai 1955: c-n]。

他方、王族は世代ごとに位が異なっている。まず国王の子である親王・内親王(phraongcao)については、正室あるいは高位の王族を母親とする場合にはチャオフアー(caofa)という称号を与えられる。親王は、通常、執務可能な年齢に達すると、クロム(krom)を与えられる<sup>4</sup>。それは一人前と認められたに等しい。このクロムはムーン(mun)、クン(khun)、ルワン(luang)、プラ(phra)、プラー(phraya)といった序列とセットにして与えられる[Sinlapakon 1983: 100]。これらの序列は一般の官僚に授与される位階勲等と同種のものであり、年齢と功績(+生母の身分)に応じて次第に上昇してゆく。5世王時代の内務大臣として有名なダムロン親王の例をあげておこう。彼は4世王の第57子であり、母親はプラー位の官僚の娘であり王族ではないので、チャオフアー位の親王ではない。幼名(本名)はディッサウオーラクマーンといい、1886年24歳でクロムムーン・ダムロンラーチャーヌパーブというムーン位のクロムを授与され、その後ダムロンラーチャーヌパーブの名前は変わることなく、位階だけが1909年にはクロマルワン、1911年にクロムプラ、1929年にクロムプラーへと上昇した。

次に親王の子ども、つまり国王の孫はモムチャーオ(momcao、略号M.C.)である。その子どもつまり国王の曾孫はモムラーチャウオン(momratchawong、M.R.W.)である。さらにその子どもの世代はモムルワン(momluang、M.L.)である。M.L.の子どもはもはや特別な称号をもたず、ただ単に苗字の末尾にナ・アユッタヤーを付して、王族の末裔であることが示されるにとどまる。この苗字は原則として各親王ごとに与えられるものである(子孫がいる場合に限ることは当然である)。例外的に、チャオフアー位の親王の子どもの中には生まれながらに親王・内親王の位を与えられるものがいた。この場合その子孫の序列は国王の子孫と同様となり、子どもが親王・内親王、孫がM.C.といったことになる。以上の王族の序列は男女に差がなく、女性の場合結婚しても序列・称号を維持する。ただし、一般的には女性は自らよりも身分の低いものと結婚することは少ない。とりわけ内親王の場合には、後述のように、同等以上の

---

<sup>4</sup>ただし、少数ながら内親王でもクロムを与えられる事例がある。

身分の伴侶を得ることがほぼ不可能であった<sup>5</sup>。

なお、王族は、たとえばM.C.から親王へというように、特別に序列の上昇を認められることがある。本稿で対象とする時期に閣僚に就任したM.C.は全員が親王に格上げされており、さらにクロム位を授与されたものもいる。逆に、M.C.以上の王族は官僚や軍人になってもブラヤブラーなどといった位階勲等は授与されない。また、同様に本来は生まれながらに決まっているチャオファー位についても、事後的に授与されることがある。通常の用法では王族の範囲は国王からM.C.までとなり、特に広義に用いるならば名字にナ・アユッタヤーを付記するものも含まれる。

## 2. 閣僚の変遷：1892年の前後の比較

### 2-1. 1782～1892年の閣僚

伝統的なタイの官庁はいずれもクロム(krom)と呼ばれていた。クロムには様々なレベルのものがああり、上は省から下は課あるいは係に至るまで、すべてがクロムと総称されていた。組織図でいえば、クロムの下にクロムがあり、その下にさらにクロムがあるといったことになっていた。そして一般的に各クロムの長はチャオ・クロム(cao krom)と呼ばれていた。

これらのクロムの中で省に相当するものは6つあった。マハータイ(mahatthai、北部省)とカラーホーム(kalahom、南部省)の2大省、そしてプラ克蘭(phrakhlang、大蔵・通商・外務省)、ワン(wang、宮内省)、ナー(na、農業省)、ムアン(muang、首都省)の4省である。それぞれの大蔵はチャオブラヤーという官僚としては最高の位階勲等を付与された。さらに各省の長にはおおむね一律の官職名が与えられていた。ムアン大臣ならチャオブラヤー・ヨムマラート、ワン大臣ならチャオブラヤー・タムマーティコーン、ナー大臣ならチャオブラヤー・ボンラテープ、プラ克蘭大臣ならチャオブラヤー・プラ克蘭といった具合である。

これらの6省の大臣については、1782年のラッタナコーシン王朝創設から1892年の中央省庁改革までの時期に関する一覧表がワイヤットによって完成されている[Wyatt 1994 128-30]。この一覧表には訂正の余地が多少あるようであるが、本稿の焦点は1892年以後にあるので、ここでは訂正を加えず、彼の研究成果をそのまま紹介することにより、当時の閣僚の顔ぶれを確認しておきたい(表A-1～6参照)。

---

<sup>5</sup> 生まれながらの内親王で、国王以外のものと結婚したのは、現国王9世王(在位1946年～)の内親王が最初と思われる。

表A-1 マハータイ大臣、1782-1892年

1782-1805	チャオブラヤー・ラッタナピパット (ソン・ソンティラット)
1809-	チャオブラヤー・ラッタナティベート (クン・ラッタナクン)
-1827	チャオブラヤー・アパイブートーン (ノーイ・ブンヤラッタパン)
1827-1849	チャオブラヤー・ボーディンデーチャー (シン・シンハセーニー)
1849-1863	チャオブラヤー・ニコーンボーディン (トー・カンラヤーナミット)
1863-1878	チャオブラヤー・プータラーパイ (ヌット・ブンヤラッタパン)
1878-1886	マハーマーラー親王
1886-1892	チャオブラヤー・ラッタナボーディン (ブンロート・カンラヤーナミット)
1892-1915	ダムロンラーチャーヌパーブ親王

表A-2 カラーホーム大臣、1782-1892年

1782-1787	チャオブラヤー・マハーセーナー (ブリー)
1787-1805	チャオブラヤー・マハセーナー (ブンナーク)
1805-1809	チャオブラヤー・マハーセーナー (ピン・シンハセーニー)
1809-(1811?)	チャオブラヤー・マハーセーナー (ブンマー)
(1811)-1822	チャオブラヤー・ウォンサーヌラサック (セーン・ウォンサーロート・ナ・バーンチャー)
1822-1824	チャオブラヤー・マハーセーナー (ブンサーン・ナ・バーンチャー)
1824-1830	チャオブラヤー・マハーセーナー (ノーイ・シースリヤパン)
1830-1851	チャオブラヤー・ブラ克蘭 (ディット・ブンナーク)
1851-1869	チャオブラヤー・シースリヤウォン (チュワン・ブンナーク)
1869-1888	チャオブラヤー・スラウォンワイヤーヌワット (ウォーン・ブンナーク)
1888-1894	チャオブラヤー・ラッタナティベート (プム・シーチャイヤン)

表A-3 ムアン大臣、1782-1892年

1782-1785	チャオブラヤー・ヨムマラート (トーンイン)
1785-1787	チャオブラヤー・ヨムマラート (ブンナーク)
1787-1809	チャオブラヤー・ヨムマラート (ブンマー)
1809-	チャオブラヤー・ヨムマラート (ノーイ・ブンヤラッタパン)
	チャオブラヤー・ヨムマラート (ノーイ・シースリヤパーハ)
-1825	チャオブラヤー・ヨムマラート (チム)
1825-	チャオブラヤー・ヨムマラート (トーンブーン)
	チャオブラヤー・ヨムマラート (セーン)
-(1838)	チャオブラヤー・ヨムマラート (ブンナーク・タケータップ・ヨムナーク)
-(1851)	ブラヤー・ピチャイチャニット (クンネーン)
(1851)-	チャオブラヤー・ヨムマラート (トーンスック・シンスック)
-1863	チャオブラヤー・ヨムマラート (ヌット・ブンヤラッタパン)
1863-1865	チャオブラヤー・ヨムマラート (クルット)
1865-1871	チャオブラヤー・ヨムマラート (ケーオ・シンハセーニー)
1871-1876	チャオブラヤー・ヨムマラート (チューイ・ヤマーパイ)
1876-1886	プータレートダムロンサック親王

1886-1889	委員会:ナレート親王、サワット親王、ブラヤー・テープブラチュン (プム・シーチャイヤン)、ブラヤー・タムマサーンニティ (タート・アマータヤクン)
1889-	ナレートウォーラリット親王

表A-4 ワン大臣、1782-1892年

1782-1785	チャオブラヤー・タムマーティコーン (ブンロート・ブンヤラッタパン)
1785-	チャオブラヤー・タムマーティコーン (トーンディー)
-1809	チャオブラヤー・タムマーティコーン (ソット)
1809-1824	チャオブラヤー・タムマーティコーン (テート・ナ・バーンチャー)
(1824-1851)	チャオブラヤー・タムマーティコーン (ソムブン・バントウック)
1851-1861	チャオブラヤー・タムマーティコーン (スア・ソンティラット)
1861-1869	チャオブラヤー・タムマーティコーン (ブンシー・ブンシリ)
1869-1882	チャオブラヤー・タムマーティコーン (マン・ソンティラット)
1882-1887	ブラチャックシンラパーコム親王
1887-1896	マヒットラーチャハリタイ親王

表A-5 プラクラン大臣、1782-1892年

1782-178x	チャオブラヤー・プラ克蘭 (ソン)
-1805	チャオブラヤー・プラ克蘭 (ホン)
1805-1809	チャオブラヤー・プラ克蘭 (クン・ラッタナクン)
1809-	チャオブラヤー・プラ克蘭 (コーン)
-1822	チャオブラヤー・プラ克蘭 (ブンサーン・ナ・バーンチャー)
1822-1851	チャオブラヤー・プラ克蘭 (ディット・ブンナーク)
1851-1865	チャオブラヤー・ティッパコーラウォン (カム・ブンナーク)
1865-1869	ウォーラチャックタラーヌパーズ親王
1869-1885	チャオブラヤー・パーヌウォンマハーコーサーティボーディー (トゥアム・ブンナーク)
1885-1923	テーワウォンワローパカーン親王

表A-6 ナー大臣、1782-1892年

1782-1805	チャオブラヤー・ポンラテープ (ピン・シンハセーニー)
1805-1810	チャオブラヤー・ポンラテープ (ブンナーク・バーンメーラー)
1810-	チャオブラヤー・ポンラテープ (サコン)
181x-182x	チャオブラヤー・ポンラテープ (トーンイン)
182x-c1850	チャオブラヤー・ポンラテープ (チム)
c1850-1851	ブラヤー・シーハテープ (トーンペン)
1851	チャオブラヤー・ポンラテープ (イアム・チュートー・ナ・バーンチャー)
1851-1869	チャオブラヤー・ポンラテープ (ロン・ブンロン)
1869-1874	ブラヤー・アーハーンボーリラック (ヌット・ブンロン)
1874-1886	チャオブラヤー・ポンラテープ (ブンロート・カンラヤーナミット)
1886-1888	チャオブラヤー・ポンラテープ (プム・シーチャイヤン)
1888-1892	ブラヤー・パーサコーラウォン (ポーン・ブンナーク)



出典: ワイヤット作成の一覧表を転載した[Wyatt 1994: 128-130]<sup>6</sup>

これらの表で、欽賜名の後に括弧の中に表記されているのは各大臣の本名である。たとえば初代マハータイ大臣のソン・ソンティラットはソンが名、ソンティラットが苗字である。一瞥してただちに気づかれるのは、ブンナーク、シンハセーニー、カンラヤーナミット、ナ・バーンチャー、ソンティラット、ラッタナクン、ブンヤラッタパンといった苗字をもつものたちが複数登場することであろう。これらは官職貴族である。とりわけブンナーク一族が多く、ワイヤットの研究によって、このブンナークを筆頭とする貴族たちは王族を交えて複雑な姻戚関係を形成していたことが明らかにされている[Wyatt 1994]。

これに対して、5世王治世が始まる1868年以前には、大臣に、親王どころかそもそも王族がほぼ皆無であることも注目すべき事実である。貴族の中でもナ・バーンチャーは1世王の王妃の実家の家系であり、ブンナークなどの貴族も娘を国王に嫁がせている。しかし、すべての省を見回しても最初に登場する王族は1865年という4世王治世末期にプラ克蘭大臣に就任したウォーラチャック親王<sup>7</sup>であることは留意されるべきである。それに対して、5世王時代に入ると親王が徐々に増えてくるとも注目される。

もっとも4世王時代以前にも、2世王時代には親王が各省を管轄(kamkap)するという事例があった。それが実権を伴ったポストであったという解釈が成り立たないわけではないが<sup>8</sup>、ダムロン親王はその役割を大臣の相談役と判断しており[Damrongrachanuphap 1983: 80-2]、さらに当時の王家の権力が相対的に弱かったことを考慮すると、おそらく象徴的なポストにすぎなかったと考えるべきであろう。本当に実権を望むならば、大臣でなければならなかったからである。このように王族が大臣に少なかったことについては、国王が意図的に王族の登用を避けていた、あるいは王族は行政実務には携わらなかったといった解釈も成り立つであろう。

<sup>6</sup> 『大蔵省100年史』によれば、大蔵省(Krom Phraklangmahasombat)の設置は1875年4月14日であり[Suket 1978: 75]、1892年までの大臣は1876～86年チャオファア・マハーマラー親王(4世王異母弟)、1886～92年チャオファア・チャートウロンラッサミー親王(5世王実弟)、それに続いて1893年3月21日からナリット親王(5世王異母弟)と記されている[ibid.: 44]。それゆえ、ワイヤットの一覧表は旧プラ克蘭省の外務省部分の大臣を記載していることになる。

<sup>7</sup> 2世王の親王で、4世王の異母弟にあたる。ブラーモート家の始祖。

<sup>8</sup> これはタイ経済史家ソムポップ・マーナランサン氏が、本公募研究研究会の席上で述べた見解である。しかし、ニティの実証的な研究が明らかにしているように、トンブリー時代から4世王期までは、アユッタヤー時代以来の貴族グループが共同支配を行っていたのであり、チャクリー王家は同輩者中の筆頭者にすぎなかったことを見逃すことはできない[Nithi 1982; 1986]。ニティはアユッタヤー時代でも、17世紀後半のナーラーイ王時代を事例として、国王の権力が絶対的ではなかったという説得力あふれる議論を展開している[Nithi 1984]。

しかし、後で述べるように、5世王時代には親王が増えるのはなぜかという疑問に答えなければならぬ。もっとも素直な解釈は、大臣就任を希望する貴族の頭ごなしに親王を大臣に任命しうるだけの実権が国王にはなく、それゆえ貴族が有力な官職を握っていたというものであろう。

## 2-2. 1892年以後の中央省庁組織の変遷

マハータイ省とカラーホーム省を中心とする6省は決して機能別に分かれていたわけではなく、徴税、司法、地方行政などの機能は複数の省が担当していた。これが5世王時代には機能別に分かれた西洋風の近代的な体制へと変革されて行くことになる。それが中央省庁におけるチャクリー改革であった。

大蔵省と外務省がプラ克蘭省から独立し、文部省や戦略省などが新規に設立された後、1892年に一挙に正式に12省体制へと移行した。名称もクロムからクラスワン(krasuang)に改められ、大臣の名称もセーナーボーディー(senabodi)へと変更された<sup>9</sup>。それと同時にクロムは部局レベルでも再編成され、今日的な意味での局の長はアティボーディー(athibodi)と呼ばれるようになり、チャオ・クロム(caokrom)やパラット・クロム(palatkrom)が長を務める部や課とは区別されるようになる。具体的にはアティボーディー・クラスのクロム(krom chan athibodi)、チャオ・クロム・クラスのクロム(krom chan caokrom)という名称が使われるようになる。

さて、1892年に発足した12省とは、マハータイ省(krasuang mahatthai)、首都省(当初は krasuang muang、後に krasuang nakhonban)、文部省(krasuang thammakan)、外務省(krasuang kantangprathet)、建設省(krasuang yothathikan)、大蔵省(krasuang phraklangmahasombat)、農商務省(krasuagn kaset phanit)、御璽省(krasuang murathathon)、宮内省(krasuang wang)、法務省(krasuang yutitham)、カラーホーム省(krasuang kalahom)、戦略局(=陸軍省)(krom yutthanathikan)であった。加えて、国王官房長官(ratchalekhanukan、後に ratchalekhathikan)も大臣待遇で閣議への出席を認められていたので彼も含めて13名の大臣が存在していたと考えるのが正確であろう。マハータイ省は1894年には地方行政機能を一元的に担当するようになって内務省の実体を備えるようになり、同時にカラーホーム省は海軍を管轄する国防省となった(陸軍との関係は後述)。

<sup>9</sup> セーナーボーディーが大臣、アティボーディーが局長の意味で使われるようになったのは5世王治世以後である。たとえば1873年発行のブラッドレー編纂のタイ語辞典は、セーナーボーディーは「軍隊の高級指揮官」[Bradley 1873: 691]、アティボーディーは「超大物」[Ibid.: 794]と説明している。ただし、この新しい用法は1892年以前に始まっていたようである。

その後これらの省は以下のような変遷を辿ることになる。

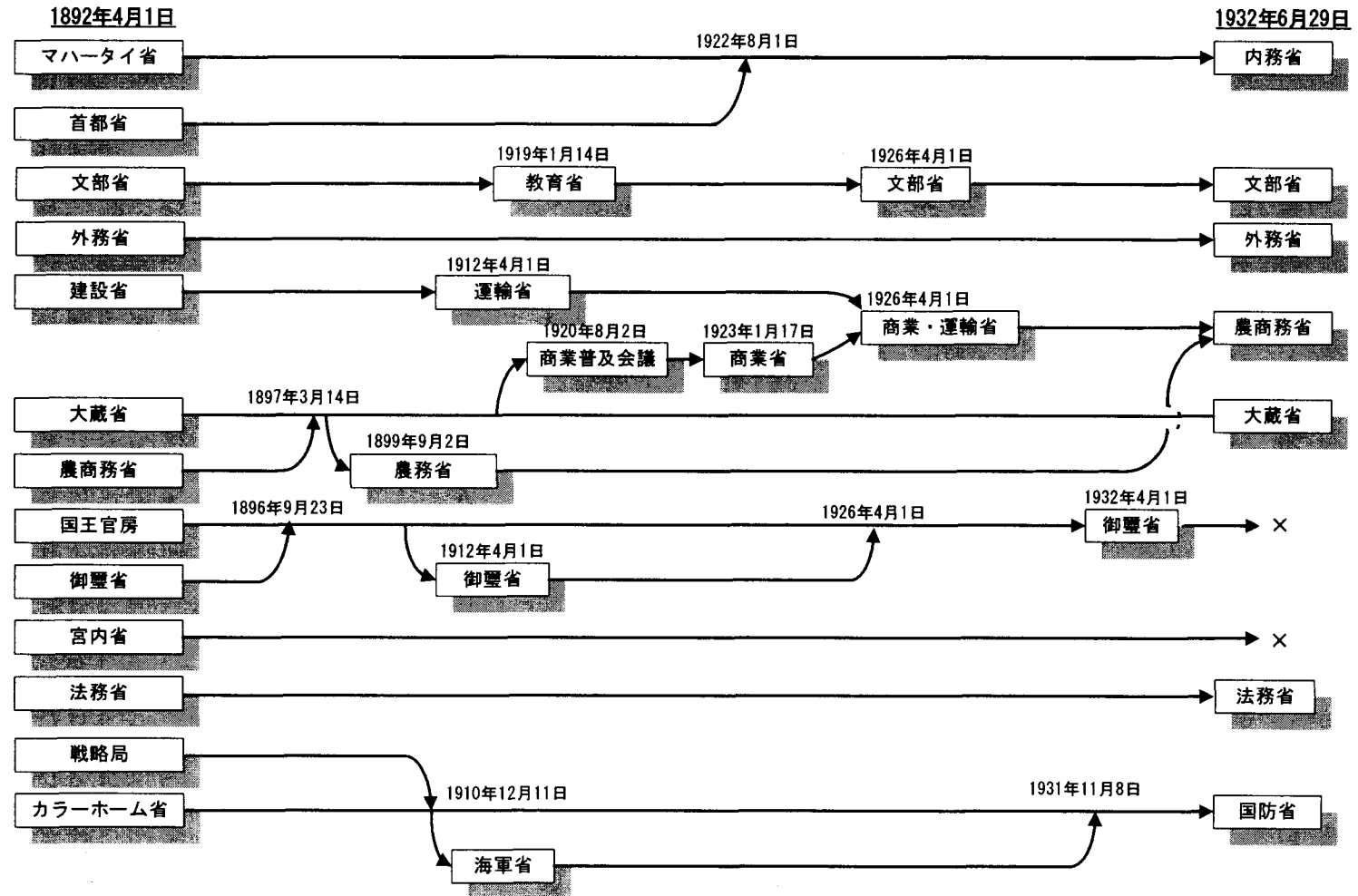
1932年に至るまで省のレベルで改廃を経験しなかったのは外務省、宮内省、法務省の3省である。首都省は1922年8月1日に内務省に統合された。文部省は1919年1月14日に宗教関係の業務を切り離して教育省(krasuang suksathikan)となり、26年4月1日に再び宗教も管轄するようになって名称を文部省に復した。建設省は1912年4月1日に運輸省(krasuang khammanakhom)と名称を改め、26年4月1日には商業省と合併して商業・運輸省(krasuang phanit lae khammanakhom)となる。農商務省は早くも1897年3月14日には大臣の辞任に伴って大蔵省に統合され、1899年9月2日に農務省(krasuang kasetrathikan)と名称を改めて独立した。運輸省と合併することになる商業省は1920年8月2日に大蔵省から省相当の組織として独立した商業普及会議(sapha phoephaphanit)が前身であり、1923年1月17日に正式に商業省(krasuang phanit)となっていた。その商業省が1926年に運輸省と合併したのである。御璽省は1896年9月23日に国王官房に吸収され、1912年4月1日に再び御璽省として独立する。しかし、1926年4月1日に再び国王官房に統合される。その国王官房は立憲革命直前の1932年4月7日に名称を御璽省へと変更する。

1887年4月8日陸軍と海軍の両方を管轄する部局として戦略局(krom yutthanathikan)が設置された[Kalahom 1953: 178-80]。総裁は名目上は幼少の皇太子であったが、実際には5世王の実弟クロムプラ・パーヌパンウォンウォーラデート親王が総裁を務めた(本稿では王族や官僚の位階名称は、原則として、就任当時のものを用いる)<sup>10</sup>。90年4月1日には戦略局(krom)を戦略省(krasuang)へ格上げした<sup>11</sup>。92年4月1日にはこれを改組して、海軍をカラーホーム省所轄に移し、陸軍のみを戦略局所轄とした。同時に、戦略局は行政的にはカラーホーム省所轄の局ながら、その長である総裁=陸軍総司令官は大臣相当のポストとされ、閣議への出席を認められることになった。陸軍省は1910年12月11日にカラーホーム省に統合され、逆に海軍省(krasuang thahan rua)がカラーホーム省から独立する。言い換えると、カラーホーム省はこの時点で海軍省から陸軍省に転換したということになる。この改組に伴って、陸軍海軍とも総司令官のポストは廃止され、大臣と次官を除くいわゆる「制服組」では参謀長が最高のポスト

<sup>10</sup> 前述のように、王族や官僚の位階や欽賜名は栄達に応じて次第に変化してゆく。軍人の階級と同様である。当人の最終的な位階よりも、ある官職への就任・在任当時の位階を記載した方が、官職と位階の関係が明確になるので、本稿では原則として当時の位階を記載することにした。

<sup>11</sup> 初代大臣はクロムプラ・パーヌパンウォンウォーラデート親王、陸軍総司令官はチャオブラヤー・スラサックモンتری、海軍司令官はクロムムーン・プラープポーラパック親王という布陣であった[Ibid.: 181]。

図1 省の変遷、1892～1933年



となった<sup>12</sup>。しかし、1931年11月8日に海軍省はカラーホーム省に統合され、名実ともに初めて国防省となったカラーホーム省が陸軍・海軍の両方を管轄することになる<sup>13</sup>(図1参照)。

## 2-3. 1892~1932年の閣僚

次に以上の新しい省あるいは省相当の組織の長である大臣の顔ぶれの変遷を調べてみる。

### 2-3-1. 首都省(旧ムアン省)

首都省は旧6省のうちの1つであり、1886年には大臣に代えて委員会が設置されていた。1892年4月1日をもってこの委員会は廃止され、5世王の弟で委員の一人であったクロマムーン・ナレートウォーラリット親王が大臣に就任した[RKA 9: 25-8]。親王は1907年12月5日大臣ポストを交換する形で建設大臣に転出し、建設大臣であったプレイヤー・スクムナイヤウィニット(パン・スクム、1908年11月29日チャオプレイヤー・ヨムマラートの欽賜名)が入れ替わりで首都大臣に就任した[RKA 24: 888-9]。彼は1922年8月1日に首都省と内務省が合併するまで首都大臣の地位にあり、両省が合併した後には内務大臣に就任した。

表B-1 首都大臣、1892-1922年

1892/04/01-1907/12/05	クロマムーン・ナレートウォーラリット親王
1907/12/02-1922/08/01	プレイヤー・スクムナイヤウィニット(パン・スクム)

### 2-3-2. 内務省(マハータイ省)

内務省は旧来の6省のうちの1つであり、名称をそのまま引き継いでいる。北部(といっても狭い意味での北部ではなく、チャオプレイヤー流域の旧デルタ地域以北)の司法、徴税、治安維持、軍事、地方行政など総合的な地方行政を担当してきた省が全国の地方行政を担当するようになったのである。旧来のマハータイ大臣はサムハナーヨックと呼ばれ、1892年4月1日の時点ではまだチャオプレイヤー・ラッタナボーディン(ブンロート)が健在であった<sup>14</sup>。このため新省発足にあたって彼を無任所高級大臣(senabodi yai mai pracam krasuang)に棚上げし、教育局長であった5世王の弟クロマムーン・ダムロンラーチャーヌパーブ親王が大臣に任命された[RKA 9: 25-8]。1913年4月12日プレイヤー・マハーアムマータヤーティボーディー(セン・ウィラヤシリ)が内務副大臣に任命され[KR6 B.E.2456: 26-7]、ダムロン親王が1915年8月7日病気を理由に辞職すると、プレイヤー・マハーアムマータヤーティボーディーが大臣代理(phu raksakan

<sup>12</sup> ただし大臣や次官も現役の将校なので、「制服組」という表現は厳密には正しくない。

<sup>13</sup> これ以後今日に至るまでカラーホーム省は陸軍・海軍(後には空軍も)を管轄する国防省となっている。

<sup>14</sup> このサムハナーヨックは1898年4月23日に高齢のため死亡する[RKA 15: 47]。

thaen)に就任した[RKA(K) 32: 143-4]。しかし、翌年1月にはパーヤップ管区長官チャオプラヤー・スラシーウィシッタサック(チューイ・カンラヤーナミット)が正式に内務大臣に就任する[Mahatthai 1992: 109]。

1922年8月1日に内務省が首都省と合併すると、彼は辞職し、首都大臣チャオプラヤー・ヨムマラート(パン・スクム)が内務大臣に就任した。彼は6世王の逝去を受けて26年3月11日辞職し、代わって5世王の王子で南部管区長官の地位にあったチャオファー・クロマルワン・ロップブリーラーメート親王が内務大臣代理に就任した。親王は同年5月15日には正式に内務大臣に就任する[RKA 42: 364-5; RKA(K) 43: 188-9]。親王が病気を理由に28年4月1日辞職すると、同じく5世王の王子でカラーホーム大臣の任にあったチャオファー・クロムブラ・ナコーンサワン親王が内務大臣に就任した[RKA(K) 44: 346-8]。

表B-2 内務大臣、1892-1932年

1892/04/01-1915/08/07	クロマムーン・ダムロンラーチャーヌパーブ親王
1915/08/07-1916/01	プラヤー・マハーアムマータヤーティボーディー(セン・ウィリヤシリ)
1916/01 -1922/08/01	チャオプラヤー・スラシーウィシッタサック(チューイ・カンラヤーナミット)
1922/08/01-1926/03/11	チャオプラヤー・ヨムマラート(パン・スクム)
1926/03/11-1928/04/01	クロマルワン・ロップブリーラーメート親王
1928/04/01-1932/06/29	クロムブラ・ナコーンサワン親王

### 2-3-3. 外務省

5世王の弟で、しかも5世王の3名の皇后の兄でもあり、すでに1885年以来外務大臣の地位にあったクロマルワン・テーワウォンワローパカーン親王が1892年4月1日以後も引き続き外務大臣を務め、1923年6月28日に死亡するまでこの地位にとどまった。後任にはテーワウォン親王の息子で外務事務次官となっていたトライトッサブラパン親王(本来はM.C.であるが、親王の地位を授与されていた)が同日付けで外務大臣代行(phu thamkan thaen)となり、翌年4月1日には正式に外務大臣に就任した[RKA(K) 40: 41-2; 41: 1-2]。

表B-3 外務大臣、1892-1932年

1892/04/01-1923/06/28	クロマルワン・テーワウォンワローパカーン親王
1923/06/28-1932/06/29	トライトッサブラパン親王

### 2-3-4. 宮内省(ワン省)

1887年以来ワン(宮内)大臣代理の地位にあった5世王の弟チャイヤンモンコン(1895年にクロマムーン・マヒッソーンラーチャハルタイ)親王が1892年4月1日以後も引き続き宮内大臣代理にとどまった。親王は97年8月26日大蔵大臣に転出する[RKA 13: 280]ものの、直後の9月1日には再び宮内大臣代理を兼任することになり、同時にその補佐役として5世王の王子プラウィッ

トワッタノードム(後のクロマムーン・ブラーチンキッティボーディー)親王が宮内副大臣に就任する[RKA 13: 239-40]。正式な宮内大臣不在のまま2年がすぎ、99年9月19日に建設大臣であった5世王の弟クロマクン・ピッタヤーラープブルッティターダー親王が宮内大臣に横滑りする[RKA 15: 271]。親王が1907年6月10日に辞職すると、事務次官のプラヤー・バムルーパックが一時大臣代行を務めた後、6月13日には同じく5世王の弟チャオファーク・クロマクン・ナリッサラーヌワット親王が建設大臣から宮内大臣に横滑りすることになった[RKA 22: 228]。1910年には、ラーオ・カーオ州総督を務めていた5世王の弟クロマクン・サップシットブラソン親王[Caonathimonthonthahanbok thi 6 1980: 3]が宮内大臣に就任した。親王は1913年4月15日国王の顧問格大臣に格上げされ、代わって1911年2月3日以来宮内事務次官の職にあった[RKA 27: 2755]プラヤー・アヌラックラーチャモンティエン(M.R.W.プム・マーラークン、1913年9月16日にチャオプラヤー・タムマーティコーラナーティボーディーの欽賜名)が宮内大臣に就任した[KR6 B.E.2456: 28]。彼は1926年7月24日に辞職し、代わって近習局総裁プラヤー・ウォーラボンピパット(M.R.W.イェン・イッサラセナー、1926年にはチャオプラヤー・ウォーラボンピパットの欽賜名[Noi 1931: 182-6])が宮内大臣代理に就任した[RKA(K) 43: 240-1]。彼は翌年4月1日には正式に宮内大臣となった。

表B-4 宮内大臣、1892-1932年

1892/04/01-1897/08/26	チャイヤンモンコン親王
1897/08/26-1899/09/19	(プラウィットワッタノードム親王)
1899/09/19-1907/06/10	クロマクン・ピッタヤーラープブルッティターダー親王
1907/06/13-1910	クロマクン・ナリッサラーヌワット親王
1910/??/??-1913/04/15	クロマクン・サップシットブラソン親王
1913/04/15-1926/07/24	プラヤー・アヌラックラーチャモンティエン(M.R.W.プム・マーラークン)
1926/07/24-1932/06/29	プラヤー・ウォーラボンピパット(M.R.W.イェン・イッサラセナー)

## 2-3-5. 御璽省

1892年4月1日に御璽大臣に任命されたのは5世王の弟クロマムーン・ピッタヤーラープブルッティターダー親王であった[RKA 9: 25-8]。親王が1896年8月26日建設大臣に転出すると、後任にはやはり5世王の弟クロマムーン・シリタットサンカート親王が就任した[RKA 13: 221-2]。御璽省は同年9月23日にいったん廃止される。1912年4月1日に御璽省が復活すると、5世王の弟で建設大臣のクロムプラ・ナレートウォーラリット親王が御璽大臣に横滑りした[KR6 R.S.130: 511-2]。23年6月29日に、体調不良の親王に代わって、前内務大臣クロムプラ・ダムロンラーチャーヌパーブ親王が御璽大臣に就任した[PKPS B.E.2466: 41-2]。しかし、24年3月31日をもって御璽省は再び廃止される[KR7 B.E.2468: 144-5]。そして、32年4月7日にいって、国

王官房が御璽省と名称を改め、国王官房長官であったチャオブラヤー・マヒトーン(ラオー・クライルーク)がそのまま御璽大臣となった[KR7 B.E.2475: 11-2]。

表B-5 御璽大臣、1892-1896、1912-1924、1932年

1892/04/01-1896/08/26	クロマムーン・ピッターラーププルッティターダー親王
1896/08/26-1896/09/23	クロマムーン・シリタットサンカート親王
	廃止
1912/04/01-1923/06/29	クロムブラ・ナレートウォーラリット親王
1923/06/29-1924/03/31	クロムブラ・ダムロンラーチャーヌバーブ親王
	廃止
1932/04/07-1932/06/29	チャオブラヤー・マヒトーン(ラオー・クライルーク)

## 2-3-6. 国王官房

国王官房長官は大臣待遇のポストであり、閣議への出席を認められていた。1880年以来国王官房長官の地位にあった[Ratchalekhathikan : 18]5世王の弟クロマムーン・ソムモットアモーンパン親王は1892年4月1日以後も引き続き20年間ほど国王官房長官を務め、1911年6月24日に病気を理由に辞職した[KR6 R.S.130: 126-7]。後任には5世王の王子で1896年9月1日以来宮内副大臣の地位にあった[RKA 13: 239-40]クロマムーン・プラーチンキッティボーディー親王が就任した。親王は1919年12月9日に亡くなり[RKA 36: 2647]、同年12月11日後任の官房長官には最高裁長官ブラヤー・チャックパーニーシーシーンウィスット(ラオー・クライルーク、後にチャオブラヤー・マヒトーン)が官房長官となった[RKA(K) 36: 188-9]。彼は国王官房が32年4月7日に御璽省と名称を改めた[KR7 B.E.2475: 153-154]後も引き続き大臣にとどまった。

表B-6 国王官房長官、1892-1932年

1880	-1911/06/24	クロマムーン・ソムモットアモーンパン親王
1911/06/24-1919/12/09		クロマムーン・プラーチンキッティボーディー親王
1919/12/09-1932/06/29		ブラヤー・チャックパーニーシーシーンウィスット(ラオー・クライルーク)

## 2-3-7. 大蔵省(旧プラ克蘭省)

大蔵省はプラ克蘭省を前身としており、近代的な省の中ではもっとも早く1875年に設置されている。その際に旧来の省とは区別してプラ克蘭マハーソムバット省という名称に改められて財政担当の省であることが明示された。1892年4月1日の時点では、5世王の実弟チャオファー・チャートウロンラッサミー親王が大蔵大臣に名誉職的な意味で在職し、実務は5世王の弟クロマムーン・ナラーティッププラパンボン親王があたっていた<sup>15</sup>。ナラーティップ親王が93年3月21日に辞職すると、代わって5世王の弟で建設大臣であったチャオファー・ク

<sup>15</sup> ブレイリーはナラーティップ親王が正式に大蔵大臣に就任するのは1892年であると述べている[Brailey 1989: 134, note 62]。また、親王は不正の容疑で翌年大蔵大臣を解任される[Wyatt 1969: 97]。



ロマクン・ナリッサラヌワット(ナリット)親王が大蔵大臣に就任した[RKA 9: 455-6]。94年12月23日ナリット親王が国防大臣へ転出すると、5世王の弟クロマムーン・シリタッタサンカート親王が大蔵大臣に就任した[RAK 11: 305]。96年8月26日親王が御璽大臣に転出すると、宮内大臣代理で5世王の弟のクロマムーン・マヒッソーンラーチャハルタイ(マヒット)親王が大蔵大臣と宮内大臣代理を兼任することになった[RKA 13: 221-2, 239-40]。97年4月3日親王が5世王に随行してヨーロッパへ出かけると、ナリット親王が大蔵大臣代理に就任した[RKA 14: 7-8]。帰国して再び大蔵大臣の任にあったマヒット親王が1906年6月1日に病気のために辞職すると、建設大臣プラヤー・スリヤーヌワット(クート・ブンナーク)が大蔵大臣に就任した[RKA 23: 174]。彼は1908年2月17日には辞職し、代わって5世王の王子で主計局長のクロマムーン・チャンタブリーナルナート親王が大蔵大臣代理に就任した[RKA 24: 1239-44]。親王は同年4月1日には正式に大蔵大臣に就任する[RKA 24: 1388]。親王が23年1月17日初代の商業大臣に転出したのを受けて、5世王の甥スッパヨークカセーム親王(M.C.ネーン・カセームシー)が大蔵大臣代理となり、同年4月1日には正式に大蔵大臣に就任した[RKA(K) 39: 550-1; RKA(K) 40: 3]。29年10月26日親王は病気のために辞職し、プラヤー・コーマーラクンモンتری(チューン・コーマーラクン・ナ・ナコーン)が大蔵大臣代理となり、翌年4月1日正式に大蔵大臣となった[PKPS 42: 127-8; PKPS 43: 4]。32年4月9日には彼に代わって、再びスッパヨークカセーム親王が病身をおして大蔵大臣に復帰した[PKPS 45: 8]。

表B-7 大蔵大臣、1892-1932年

1892/04/01-1893/03/21	クロマムーン・ナラーティップブラパンボン親王
1893/03/21-1894/12/23	ロマクン・ナリッサラヌワット親王
1894/12/23-1896/08/26	クロマムーン・シリタッタサンカート親王
1896/08/26-1906/06/01	クロマムーン・マヒッソーンラーチャハルタイ親王
1906/06/01-1908/02/17	プラヤー・スリヤーヌワット(クート・ブンナーク)
1908/02/17-1923/01/07	クロマムーン・チャンタブリーナルナート親王
1923/01/07-1929/10/26	スッパヨークカセーム親王(M.C.ネーン・カセームシー)
1929/10/26-1932/04/09	プラヤー・コーマーラクンモンتری(チューン・コーマーラクン・ナ・ナコーン)
1932/04/09-1932/06/29	スッパヨークカセーム親王(M.C.ネーン・カセームシー)

## 2-3-8. 農商務省、農務省(旧ナー省)

農商務省は1892年4月1日に設置され、チャオプラヤー・タムマサックモンتری(チューム・セーンチュートー)が初代大臣に就任した。しかし彼が1897年3月14日大臣を辞職すると、農商務省は廃止され大蔵省へ統合された[RKA 13: 607-8]。そして、1899年9月2日に新たに農務省が設置され、建設大臣であったプラヤー・テーウェートウォンウィワット(M.R.W.ラーン・

クンチョーン、後にチャオプラヤー)が大臣に横滑りする[PKPS 17: 80-1]。彼が1909年に体調を崩すと、モム・チャートデートウドム中将(M.R.W.サターン・サニットウォン)が5月13日に副大臣に就任し[RKA 26: 191]、12月26日には正式に大臣となった[KR5 R.S.128: 247-8]。彼は1911年11月11日にはチャオプラヤー・ウォンサーヌプラパットの欽賜名を授与され[Ibid.: 551-2]、翌12年4月1日には建設大臣へ転出した。後任の農務大臣には、5世王の王子クロムムーン・ラートブリーディレク親王が就任した[KR6 R.S.130: 511-2]。親王は19年9月15日病気を理由に休職し、代わって同じく5世王の王子で大蔵大臣のクロムプラ・チャンタブリーナルナート親王が農務大臣を兼務することになる[RKA(K) 36: 143-4]。チャンタブリー親王を補佐するために、20年8月20日プラヤー・チャイヤヨットソムバット(チャルム・コーマーラクン・ナ・ナコーン、21年11月11日にチャオプラヤー・ポンラテープの欽賜名)が農務副大臣に任命され、1921年4月1日は正式に農務大臣に就任する。彼が1931年3月16日に辞職すると、代わってチャオプラヤー・ピチャイヤート(ダン・ブンナーク)が農務大臣に就任した[PKPS 43: 358]。

表B-8 農商務大臣、農務大臣、1892-1932年

1892/04/01-1897/03/14	チャオプラヤー・タムマサックモントリー(チューム・セーンチュートー)
1899/09/02-1909/12/26	プラヤー・デーウェートウォンウィワット(M.R.W.ラーン・クンチョーン)
1909/12/26-1912/04/01	チャオプラヤー・ウォンサーヌプラパット(M.R.W.サターン・サニットウォン)
1912/04/01-1919/09/15	クロムムーン・ラートブリーディレク親王
1919/09/15-1921/04/01	クロムプラ・チャンタブリーナルナート親王
1921/04/01-1931/03/16	プラヤー・チャイヤヨットソムバット(チャルム・コーマーラクン・ナ・ナコーン)
1931/03/16-1932/06/29	チャオプラヤー・ピチャイヤート(ダン・ブンナーク)

## 2-3-9. 商業省

商業省は1920年8月20日に設置された商業普及会議を前身としている。この会議の議長は大臣相当とされ、初代の議長には5世王の王子で大蔵大臣であったクロムプラ・チャンタブリーナルナート親王が大蔵大臣と兼任で就任した[KR6 B.E.2463: 144-5]。この会議は23年1月17日に商業省へと改組され、チャンタブリー親王が大蔵大臣を退いて、初代の商業大臣に就任した[RKA(K) 39: 550-1]。親王が1926年11月28日に最高顧問会議のメンバーに任命されて[PKPS 38: 231-3]用務多忙となり、さらに同年4月1日から商業省と運輸省が合併して新しく商業・運輸省として発足することになったため、それに先だって同年3月23日に5世王の親王クロマルワン・カムペーンペットアッカラヨーティンが新しい省の大臣代理に任命され[KR7 B.E.2468: 180]、親王は同年5月15日には正式に商業・運輸大臣に就任した[KR7 B.E.2469: 180-1]。

表B-9 商業大臣、1920-1926年

1920/08/20-1923/03/23	クロムブラ・チャンタブリーナルナート親王
1923/03/23-1926/04/01	クロマルワン・カムペンベッタッカラヨーティン親王

## 2-3-10. 建設省、運輸省、商業・運輸省

建設省は1892年4月1日に局から格上げされて省となり、局長を務めていた5世王の弟チャオファー・クロマクン・ナリッサラーヌワット親王が初代大臣に就任した[RKA 9: 25-8]。親王は1年とたたない1893年3月21日には大蔵大臣に転出し、代わって同じく5世王の弟クロマムーン・サップシットプラソン親王が建設大臣に就任した[RKA 9: 455-6]。しかし、親王は同年6月10日から地方勤務となり<sup>16</sup>、同じく5世王の弟で御璽大臣の任にあったクロマムーン・ピッターラープブルッティターダー親王が代理として建設大臣を兼務することになった[RKA 10: 127-8]。親王は96年8月26日には御璽大臣の任を離れて、正式に建設大臣に就任した[RKA 13: 221-2]。98年9月19日親王が宮内大臣に転出すると、スカーピバーン(衛生)局総裁の地位にあったプラヤー・テーウェートウォンウィワット(M.R.W.ラーン・クンチョーン、後にチャオプラヤー)が建設大臣に就任した[RKA 15: 271]。彼が1899年9月2日に農務大臣へ転出すると、カラーホーム大臣ナリット親王が建設大臣に復帰した[PKPS 17: 80-1]。フランス公使の任を終えて帰国したプラヤー・スリヤーヌワット(クート・ブンナーク)が1905年6月13日建設大臣代理に就任し、同年11月9日には正式に大臣になった[RKA 22: 228, 697]。彼が翌年6月1日大蔵大臣に転出すると、事務次官のプラヤー・サティエンターパナキット(チョム・チョムタワット)が一時期大臣代行を務めた後[RKA 23: 174]、ナコーンシータムマラート州総督プラヤー・スクムナイヤウィニット(パン・スクム、後にチャオプラヤー・ヨムマラートの欽賜名)が6月29日に建設大臣代理となり、同年11月25日に正式に大臣に就任した[Ibid.: 253]。彼は1907年12月5日には首都大臣へ転出し、入れ替わりに首都大臣で5世王弟のクロマルワン・ナレートウォーラリット親王が建設大臣に横滑りした[RKA 24: 888-9]。

建設省は1913年4月1日運輸省と名称を改め、農務大臣チャオプラヤー・ウォンサーヌプラバット(M.R.W.サターン・サニットウォン)が運輸大臣に就任した[KR6: 511-2, 569-71]。運輸省は1925年4月1日から商業省と合併して商業・運輸省となることが決まり、それに先だって同年3月23日には建設省鉄道局総裁で5世王の王子クロマルワン・カムペンベッタッカラヨーティン親王が新省の大臣代理となり、同年5月15日には正式に商業・運輸大臣に就任した[KR7 B.E.2469: 146-7, 180; RKA(K) 43: 188-9]。

<sup>16</sup> 前述のように、1910年に宮内大臣に就任するまで地方に勤務した。

表B-10a 建設大臣(1892-1913)、運輸大臣(1913-1925)

1892/04/01-1893/03/21	クロマクン・ナリッサラーヌワット親王
1893/03/21-1893/06/10	クロマムーン・サップシットブラソン親王
1893/06/10-1898/09/19	クロマムーン・ピッターヤーラープブルッティターダー親王
1898/09/19-1899/09/02	ブラヤー・デーウェートウォンウィワット(M.R.W.ラーン・クンチョーン)
1899/09/02-1905/11/09	クロマクン・ナリッサラーヌワット親王
1905/11/09-1906/06/01	ブラヤー・スリヤーヌワット(クート・ブンナーク)
1906/06/29-1907/12/05	ブラヤー・スクムナイヤウィニット(パン・スクム)
1907/12/05-1913/04/01	クロマルワン・ナレートウォーラリット親王
1913/04/01-1925/04/01	チャオブラヤー・ウォンサーヌプラパット(M.R.W.サターン・サニットウォン)

表B-10b 商業・運輸大臣、1925-1932年

1925/03/23-1932/06/29	クロマルワン・カムペーンペットアッカラヨーティン親王
-----------------------	----------------------------

## 2-3-11. 文部省、教育省

1892年4月1日に文部大臣になったのは農業大臣ブラヤー・パーサコーラウォン(ポーン・ブンナーク、1896年3月27日にチャオブラヤー・パーサコーラウォンの欽賜名[RKA 13: 16-24])であった[RKA 9: 25-8]。彼が1902年4月19日に辞職すると[RKA 19: 49-50]、1892年以来事務次官であったブラヤー・ウッティカーンボーディー(M.R.W.クリー・スタット、1904年11月10日にチャオブラヤー・ウィチットウォンウッティクライの欽賜名[RKA 21: 608-9])が大臣代理に任命され、同年10月7日に正式に文部大臣に就任した[RKA 19: 565]。彼が高齢で病がちになると、1911年6月4日、事務次官のブラヤー・ウィスットスリヤサック(M.R.W.ピア・マーラークン、後にチャオブラヤー・プラサデットスレーンタラーティボーディーの欽賜名)が補佐役として副大臣に就任した[KR6 R.S.130: 102-3]。同年11月23日に大臣が辞職すると、ブラヤー・ウィスットが大臣代理となり[KR6 R.S.130: 318]、翌年4月6日正式に大臣になった[KR6 R.S.131: 21-2]。彼が16年3月28日に病気を理由に辞職すると、代わって事務次官のブラヤー・タムマサックモントリー(サナン・テープハッサディン・ナ・アユッタヤー、後にチャオブラヤー)が大臣代理となり、同年6月19日には正式に文部大臣に任命された[PKPS B.E.2458: 509-10; PKPS B.E.2459: 89-90]。彼が26年8月3日辞職すると、4世王の孫で国王官房長官補佐兼外務担当国王秘書官のターニーニワット親王(元来はM.C.)が大臣代理に任命され、翌27年4月1日に正式に大臣に就任した[RKA(K) 43: 269-70, 722; KR7 B.E.2469: 686]。

表B-11 文部大臣、教育大臣、1892-1932年

1892/04/01-1902/04/19	ブラヤー・パーサコーラウォン(ポーン・ブンナーク)
1902/04/19-1911/11/23	ブラヤー・ウッティカーンボーディー(M.R.W.クリー・スタット)
1911/11/23-1916/03/28	ブラヤー・ウィスットスリヤサック(M.R.W.ピア・マーラークン)
1916/03/28-1926/08/03	ブラヤー・タムマサックモントリー(サナン・テープハッサディン・

	ナ・アユッタヤー)
1926/08/03-1932/06/29	ターニーニワット親王

## 2-3-1 2. 法務省

1892年4月1日に初代法務大臣に就任したのは5世王の弟サワットソーポン親王であった[RKA 9: 25-8]。その後同じく5世王の弟クロマムーン・プロムワラーヌラック親王が大臣代行を務めた後、94年10月22日には5世王の別の弟クロマルワン・ピチットプリーチャーコーン親王が法務大臣に就任した[RKA 11: 235-6]。親王が97年3月3日病気を理由に辞職すると、5世王の王子ラピーパッタナサック(ラートブリー)親王が弱冠22歳で法務大臣に任命された[RKA 13: 576]<sup>17</sup>。親王が病気を理由に執務しなくなると、1909年7月12日4世王の孫でフランス公使であったM.C.チャルーンサッククリッサダーコーン(チャルーンサックカルダーコーン・カルダーコーン、後に親王)<sup>18</sup>(ナレート親王の長男)が法務副大臣になり[RKA 26: 687-8]、1910年6月27日には法務大臣代理に任命される[Wisut: 78]。そして翌年1月26日に正式に法務大臣に任命された[Ibid.: 79]。12年6月25日には、ブラヤー・インタラーティボーディーシーハラートムアン(M.R.W. ロップ・スタット)が代わって法務大臣に就任し[KR6 R.S.131: 141-2]、同年11月チャオブラヤー・アパイラーチャーの欽賜名を授与された[PKPS R.S.131: 227-9]。彼は高齢を理由に1926年5月6日に更迭され、代わって最高裁長官チャオブラヤー・ピチャイヤー(ダン・ブンナーク)が大臣代理となり[RKA(K) 43: 134]、27年4月1日には正式に法務大臣になった[RKA(K) 43: 722]。翌年6月1日彼が病気を理由に辞職すると、最高裁長官ブラヤー・チンダー

<sup>17</sup> チャオブラヤー・マヒトーン(マヒトーン)の葬式本ではこう説明されている[Wisut 1956: 49-50]。ラピーパット親王はオックスフォード大学で法律学の学士号を取得し、1896年に帰国した。法律学を学んだとはいえ、幼い頃からイギリスにあってタイの法律には疎かったため、5世王は親王に国王官房でタイの法律を勉強させることにした。そんなときに、ピチットプリーチャーコーン親王が法務大臣を辞職し、ダムロン親王は後任にラピー親王を推挙した。5世王は弱冠22歳のラピー親王の大臣就任は時期尚早として任命をためらったものの、ベルギー人の法律顧問チャオブラヤー・アパイラーチャーが全面的な支援を約束したため、親王を法務大臣に任命した。

<sup>18</sup> M.C.チャルーンサックは、その葬式本にはチャルーンサックカルダーコーン親王と記されている。カルダーコーンはナレート親王の子孫が用いる苗字である。しかし、たとえばこの法務副大臣任命書では、M.C.チャルーンサッククリッサダーコーンと記されている。このクリッサダーコーンというのは父親ナレート親王の本名クリッサダーピニハーンに由来しており、苗字ではない。筆者はこの相違の理由を次のように想像している。親王たちが苗字を用いるようになるのは6世王時代である。それ以前にはM.C.も苗字を用いず、何某親王のM.C.何某(たとえばナレート親王のM.C.チャルーンサック)と表記して系譜を示すのが普通であった。チャルーンサックの場合には、苗字が使用される以前から父親がナレート親王であることを示すために、チャルーンサッククリッサダーコーンと命名された。しかし、後に一族がカルダーコーンという苗字を用いるようになると、クリッサダーコーンの部分をカルダーコーンに改めた。従って、彼の氏名は厳密には、チャルーンサッククリッサダーコーン・カルダーコーンあるいはチャルーンサックカルダーコーン・カルダーコーンとなるはずである。

ピロム(チット・ナ・ソンクラ)が法務大臣代理を兼務し[RKA(K) 45: 96-7]、同年12月15日には正式に法務大臣兼最高裁長官となった[RKA(K) 45: 231-2]。彼は1931年11月チャオプラヤー・シータムマティベートの欽賜名を授与された[PKPS 44: 319-22]。

表B-12 法務大臣、1892-1932年

1892/04/01-1894/10/22	サワットソーボン親王
1894/10/22-1897/03/03	クロマルワン・ピチットプリーチャーコーン親王
1897/03/03-1909/07/12	ラピーパッタナサック親王
1909/07/12-1912/06/25	M.C.チャルーンサッククリッサダーコーン
1912/06/25-1926/05/06	プレーヤー・インタラーティボーディーシーハラートムアン (M.R.W. ロップ・スタット)
1926/05/06-1928/06/01	チャオプラヤー・ピチャイヤート(ダン・ブンナーク)
1928/06/01-1932/06/29	プレーヤー・チンダーピロム(チット・ナ・ソンクラ)

### 2-3-13. 国防省(カラーホーム省)

1892年4月1日の時点で、戦略省は戦略局に格下げされ、行政的にはカラーホーム省に所属させられることになった。それにより海軍はカラーホーム省、陸軍は戦略局の管轄となった。しかし、戦略局総裁は大臣相当のポストとされ、閣議への出席を認められたので、戦略局とは事実上は陸軍省に等しかった。この戦略局総裁(陸軍総司令官であり、陸軍大臣に相当)に就任したのは1887年以来戦略大臣の地位にあった5世王の実弟チャオファー・クロムブラ・パーヌパンウォンウォーラデート親王であった<sup>19</sup>。他方、旧来の省であるカラーホーム省では、旧来の大臣(サムハブラカラーホームと呼ばれた)チャオプラヤー・ポンラテープ(プム・シーチャイヤン、1895年にチャオプラヤー・ラッタナーティベートの欽賜名[Noi 1931: 91])が引き続き留任していた[RKA 9: 25-8]。94年12月23日に彼が高齢を理由に辞職すると、大蔵大臣であった5世王の弟チャオファー・クロマクン・ナリッサラーヌワット親王がカラーホーム大臣に就任した[RKA 11: 305]。

1897年3月16日戦略局総裁パーヌパン親王が体調不良を理由に辞職すると、後任にはカラーホーム大臣ナリット親王が就任し、代わってプレーヤー・モントリースリヤウォン(チューン・ブンナーク)がカラーホーム大臣代理になった[RKA 13: 607]<sup>20</sup>。1899年4月1日にはパーヌパン

<sup>19</sup> 陸軍総司令官については、ワチルンヒット皇太子が1887年4月8日から死亡する95年1月5日までその地位にあった。ただし、皇太子は幼少であったので、実際にはパーヌパン親王が代行した。また、90年4月1日に戦略省が設置され、パーヌパン親王が大臣に就任すると、陸軍では参謀長が最高指揮官のポストとなり、同年4月15日から92年3月27日までチャオプラヤー・スラサックモントリー(チューム・チュートー)がその地位にあった。92年4月1日に戦略省が戦略局となり、陸軍のみを管轄するようになった時点で、パーヌパン親王がその総裁に就任した[Suratphan 1974: 47-8]。

<sup>20</sup> 戦略大臣が戦略局総裁に就任し(パーヌパン親王)、さらにまたカラーホーム大臣が戦略局総裁に就任

親王が戦略局総裁に、ナリット親王がカラーホーム大臣にそれぞれ復帰し、プレイヤー・モントリースリヤウォンは引き続きカラーホーム大臣代理の地位にとどまった[RKA 15: 505-6]。同年9月2日ナリット親王が建設大臣に転出すると<sup>21</sup>、北部州総督で5世王の弟のクロマムーン・プラチャックシンラパーコム親王がカラーホーム大臣に就任し[PKPS 17: 80-1]、プレイヤー・モントリースリヤウォンは同年10月24日カラーホーム副大臣となった[PKPS 17: 246]。1901年8月8日クロマルワン・プラチャックシンラパーコム親王が辞職すると、戦略局総裁パーヌパン親王がカラーホーム大臣に横滑りし、後任の戦略局総裁には5世王の王子クロマムーン・ナコーンチャイシー斯拉デート親王が就任した[PKPS 18: 63]。

6世王は即位から1カ月余り後の1910年12月11日、軍組織を一新し、陸軍をカラーホーム省の所轄とし、従来カラーホーム省のもとにあった海軍を海軍省として独立させた。カラーホーム大臣(陸軍大臣に相当)には戦略局総裁のクロマムーン・ナコーンチャイシー斯拉デート親王、海軍大臣には海軍総司令官のクロマクン・ナコーンサワンウォーラピニット親王が任命された。他方、従来のカラーホーム大臣パーヌパン親王は新設ポストの陸軍総監に任命された[RKA 27: 47-50]。1910年12月13日にはプレイヤー・シーハラートデーチョーチャイ(M.R.W.アルン・チャトラクン)がカラーホーム副大臣に任命された[RKA 27: 2183]。1911年4月14日には海軍副大臣兼海軍教育局長であった5世王の王子クロマムーン・チュムポーンケートウドムサック親王が辞職した[RKA 28: 91-92]<sup>22</sup>。14年2月4日カラーホーム大臣のクロマルワ

---

した(ナリット親王)という事実は、軍事行政において戦略局すなわち陸軍がカラーホーム省よりも重視されていたことを明示している。大臣よりも陸軍総司令官が重視されるという点では、1932年以後の状況と似通っている。

<sup>21</sup> 国防省の『66年史』では、ナリット親王がカラーホーム大臣から建設大臣に転出したのに伴って、プラチャックシンラパーコム親王が後任のカラーホーム大臣に就任したとき、戦略局総裁(陸軍総司令官)人事をめぐる、ナコーンチャイシー親王を推す声が強かったものの、5世王が年齢が若すぎることを理由に拒否し、実弟のパーヌパンに復帰を依頼し、ナコーンチャイシー親王にはその下で陸軍次官、陸軍参謀長兼国王警護連隊長として修練にあたらせたと説明されている[Kalahom 1953: 191]。しかし、本文で説明したように、『官報』の記事では、ナリット親王の転出と、パーヌパン親王の陸軍総司令官復帰は時期がずれている。

<sup>22</sup> 海軍大臣ナコーンサワン親王の回想録によると、チュムポーン親王が辞職した経緯は次の通りであった。1911年4月に6世王が海軍の船で航海に出かけた折、海軍兵士の1人が船酔いして銃を紛失する事件が勃発した。6世王は激怒して、その兵士を免職処分とし、さらにその教師であるチュムポーン親王も「教師も生徒も船酔いした」という理由で辞職させられることになった[Sirirattanabutsabong 1981: 25]。なお、親王の娘(内親王)が編纂したこの回想録によると、6世王治世の初期にナコーンサワン親王は大臣の辞職を2回を考えたという。一度はチュムポーン親王罷免の折であった。両親王は非常に仲が良かった上に、当時チュムポーン親王が反乱を起こしてナコーンサワン親王を新国王として即位させようとたくらんでいるとの噂が流れており、国王から信頼されていないと考えたためであった。もう一度は海軍大臣に就任したばかりの頃、海軍参謀長のクロマルワン・シンハウィクロムクリエンクライ親王が海軍用

ン・ナコーンチャイシー斯拉デート親王が37歳の若さで死亡すると[RKA 30: 2607]、副大臣のチャオプラヤー・ボーディントーンデーチャーヌチット(M.R.W.アルン・チャトラクン)が大  
臣代理となり[KR6 B.E.2456: 357-8]、同年4月1日には正式にカラーホーム大臣となった  
[RKA(K) 31: 45]。また、同年8月8日には4世王の孫M.C.ボーウォーラデートがカラーホーム副  
大臣兼陸軍砲兵総監に就任した[RKA 31: 1850-2]。21年8月25日チャオプラヤー・ボーディン  
トーンデーチャーヌチット(M.R.W.アルン・チャトラクン)が死亡すると、カラーホーム次官  
であったプラヤー・シーハラートデーチャーチャイ(イエーム・ナ・ナコーン)が大臣代理に  
任命され[RKA(K) 38: 202]、22年4月1日には正式に大臣に就任した[RKA(K) 39: 1]。彼は同年11  
月19日にはチャオプラヤー・ボーディントーンデーチャーヌチットの欽賜名を授与された  
[RKA(K) 39: 320-4]。

他方、海軍省では1922年10月13日クロマルワン・チュムポン親王が大臣代理に就任し  
[RKA(K) 39: 284]、翌23年4月1日には正式に海軍大臣になった[RKA(K) 40: 1]ものの、翌月19日  
には44歳で死亡する。このため、23年6月15日に、6世王の実弟で第1歩兵師団長であったチャ  
オファー・クロマルワン・ナコーンラーチャシーマー親王が海軍省担当(phu kamkap ratchakan)  
に任命され[PKPS 40: 38]、翌月1日には海軍大臣代行(phu thamkanthaen)[RKA(K) 40: 37]、24年4  
月1日には海軍省総帥(phu samret ratchakan)に任命されるが[RKA(K) 41: 1-2]、25年2月9日には死  
亡した。これを受けて同年2月13日には5世王の王子クロマクン・シンハウィクロムクリエン  
クライ親王が海軍大臣に任命された[RKA(K) 41: 312]。

1926年8月3日カラーホーム大臣チャオプラヤー・ボーディントーンデーチャーヌチット  
(イエーム・ナ・ナコーン)が辞職すると、後任には5世王の王子で陸軍参謀長のクロムブラ・  
ナコーンサワンウォーラピニット親王(元海軍大臣)が任命された[RKA(K) 43: 267-8]。28年4月1  
日には、クロマルワン・ロップブリー親王が病気で内務大臣を辞任したため、ナコーンサワ  
ン親王が後任の内務大臣へ転出し、代わって5世王の甥で陸軍参謀長のM.C.ボーウォーラデー  
ト・カルダーコーン(後に親王の位を授与される)がカラーホーム大臣代理に任命された  
[RKA(K) 44: 346-8]。同年10月25日には彼は正式にカラーホーム大臣に就任する[RKA(K) 45:  
163]。彼が31年4月1日辞職すると、代わって5世王の甥で陸軍参謀長のアロンコット親王(元来  
はM.C.)がカラーホーム大臣代理に就任し[Nitisai B.E.2474: 39]、同年6月16日正式にカラーホー

---

の暗号を密かに考案していて、事情を知らない国王の不信を招いて、国王がナコーンサワン親王にシン  
ハウィクロムクリエンクライ親王を解任したいとの意向を伝えた折であった[ibid. 24-25]。6世王が猜疑  
心の強い人物であったことをうかがわせるエピソードである。



ム大臣となった。同年11月8日海軍省がカラーホーム省に吸収合併されると、海軍大臣クロマクン・シンハウィクロムクリエンクライ親王がカラーホーム大臣となり、カラーホーム大臣であったアロンコット親王は閣議への出席権をもつ副大臣となった[Ibid.: 148]。

表B-13a カラーホーム大臣、1892-1932年

1892/04/01-1894/12/23	チャオブラヤー・ポンラテープ(ブム)
1894/12/23-1897/03/16	クロマクン・ナリッサラーヌワット親王
1897/03/16-1899/04/01	ブラヤー・モントリースリヤウォン(チューン・ブンナーク)
1899/04/01-1899/09/02	クロマクン・ナリッサラーヌワット親王
1899/09/02-1901/08/08	クロマムーン・プラチャックシンラパーコム親王
1901/08/08-1910/12/11	クロムブラ・パーヌパンウォンウォーラデート親王
1910/12/11-1914/02/04	クロマムーン・ナコーンチャイシースラデート親王
1914/02/04-1921/08/25	チャオブラヤー・ボーディントーンデーチャーヌチット(M.R.W.アルン・チャトラクン)
1921/08/25-1926/08/01	ブラヤー・シーハラートデーチャーチャイ(イエーム・ナ・ナコーン)
1926/08/01-1928/04/01	クロムブラ・ナコーンサワンウォーラピニット親王
1928/04/01-1931/04/01	M.C.ボーウォーラデート・カルダーコーン
1931/06/16-1931/11/08	アロンコット親王
1931/11/08-1932/06/29	クロマクン・シンハウィクロムクリエンクライ親王

表B-13b 陸軍総司令官、1892-1910年

1892/04/01-1897/03/16	クロムブラ・パーヌパンウォンウォーラデート親王
1897/03/16-1899/04/01	クロマクン・ナリッサラーヌワット親王
1899/04/01-1901/08/08	クロムブラ・パーヌパンウォンウォーラデート親王
1901/08/08-1910/12/11	クロマムーン・ナコーンチャイシースラデート親王

表B-13c 海軍大臣、1910-1931年

1910/12/11-1922/10/13	クロマクン・ナコーンサワンウォーラピニット親王
1922/10/13-1923/05/19	クロマルワン・チュムポーンケートウドムサック親王
1923/06/15-1925/02/09	クロマルワン・ナコーンラーチャーシーマー親王
1925/02/13-1931/11/08	クロマルワン・シンハウィクロムクリエンクライ親王

## 2-3-1 4. 最高顧問会議

6世王の逝去からわずか3日後の1926年11月28日に、7世王は最高顧問会議(aphirathamontri sapha)を設置した。バトソンがこの会議を「超閣議super-cabinet」と呼ぶように[Batson 1984: 34]、最高顧問たちは大臣よりも大きな権力を付与されていた。最初に任命されたのは、5世王の実弟チャオファー・クロムブラヤー・パーヌパンウォーラデート親王、5世王の弟チャオファー・クロムブラ・ナリッサラーヌワット親王とクロムブラ・ダムロンラーチャーヌパー親王、5世王の王子チャオファー・クロマルワン・ナコーンサワンウォーラピニット親王とクロムブラ・チャンタブリーナルナート親王の計5名であった[PKPS 38: 231-3]。いずれも5世

王の弟や王子で、王族の中でも有力な人物ばかりであった。彼らのうち、28年にはパーヌパン親王が死亡した。その後任として30年3月ロップブリー親王がメンバーに加わる。さらに、31年にはチャンタブリー親王が死亡する。その補充として、同年10月21日には新たに5世王の王子クロムプラ・カムペーンペットアッカラヨーティン親王と5世王の甥クロマムーン・テークウォンウォーラタイ親王(M.C.トライトッサプラパン)がメンバーに加わって[PKPS 44: 288-9]総勢6名となる。ただし、32年4月にはロップブリー親王が死亡し、メンバーは再び5名に戻った。

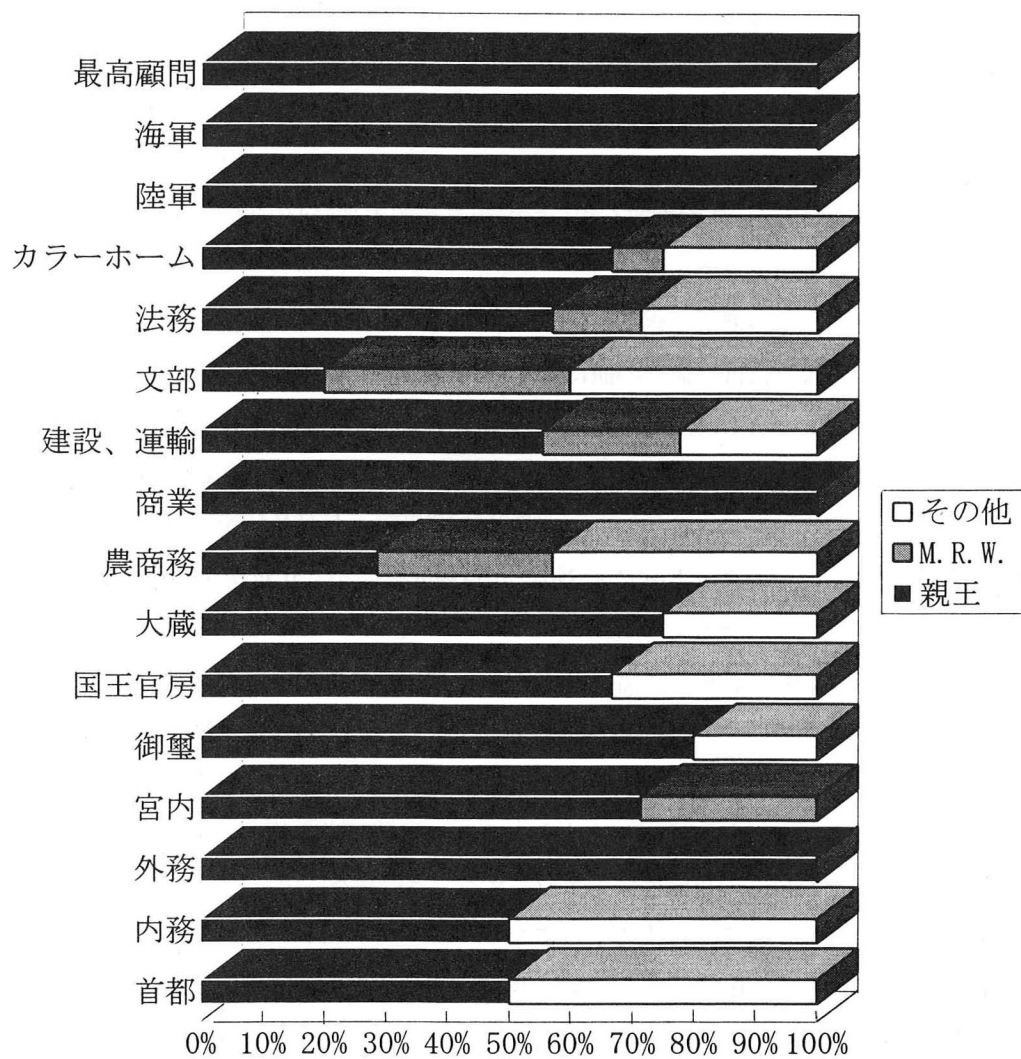
### 3. モンクット・ファミリー

#### 3-1. モンクット・ファミリーによる閣僚ポスト独占

1892年から1932年にかけての閣僚の顔ぶれを、1892年以前と比較すると、王族とりわけ親王が圧倒的に多いことが一目瞭然であろう。首都大臣2名中1名、内務大臣6名中3名、外務大臣2名中2名(うち1名はM.C.から上昇)、宮内大臣7名中5名(残る2名もM.R.W.)、御璽大臣5名中4名、国王官房長官3名中2名、大蔵大臣8名中6名(うち1名はM.C.から上昇)、農商務大臣・農務大臣7名中2名(残る5名中2名はM.R.W.)、商業大臣2名全員、建設大臣・運輸大臣9名中5名(残る4名中2名はM.R.W.)、商業・運輸大臣1名中1名、文部大臣5名中1名(この1名はM.C.から上昇、残る4名中2名はM.R.W.)、法務大臣7名中4名(うち1名はM.C.から上昇、残る3名中1名はM.R.W.)、カラーホーム大臣12名中8名(うち1名はM.C.から上昇、残る4名中1名はM.R.W.)、陸軍大臣(陸軍総司令官)4名全員、海軍大臣4名全員、さらに最高顧問延べ8名全員が親王である。親王が過半数に達しない省は農商務／農務省、法務省、文部省の3省のみである。M.R.W.までも王族に含めて考えるならば、王族が過半数に達しない省は皆無となる(図2参照)。

在任期間についてみるとどうであろうか。首都大臣は1892年4月1日から1922年8月1日までの30年4カ月のうちほぼ半分の15年8カ月が親王である。内務省は1892年4月1日から1932年6月29日までのほぼ40年4カ月の間に、親王は21年7カ月ほどと半分強を占めている。外務大臣は40年間あまりにわたって一貫して親王であった。宮内大臣は半分強の21年が親王であり、残りはM.R.W.位の王族であった。御璽大臣は16年9カ月ほどのうち3カ月弱を除くとすべて親王であった。国王官房長官は40年ほどの間に13年間を除くと残りは親王であった。大蔵大臣は40年3カ月のうち4年2カ月を除くと親王である。農商務大臣あるいは農務大臣は38年5カ月ほどのうち親王が9年間、M.R.W.が12年7カ月、それ以外が16年余りであった。商業大臣ないし商業・運輸大臣は12年足らずの全期間にわたって親王である。建設大臣ないし運輸大臣は33

図2 閣僚に占める親王の割合、1892～1932年(人数)



年間のうち親王は13年8カ月ほど、M.R.W.が18年5カ月ほどであり、それ以外は1年間ほどにすぎない。文部大臣は40年3カ月のうち親王は5年11カ月ほどにすぎず、M.R.W.が14年間、ナ・アユッタヤーという王家の遠縁が10年4カ月、それ以外は10年間である。法務大臣は40年3カ月のうち親王が20年3カ月弱と全体のほぼ半分、M.R.W.が13年10カ月ほど、それ以外は6年2カ月ほどである。軍隊を管轄するカラーホーム大臣は40年3カ月のうち親王が24年間ほど、M.R.W.が7年7カ月弱、それ以外は6年8カ月ほどである。大臣相当の陸軍総司令官は18年8カ月ほどの期間すべて、海軍大臣は11年11カ月の全期間が親王である。実質的な陸軍大臣という視点からみると、40年3カ月のうち大半が親王であり、M.R.W.が7年7カ月、それ以外はわずか4年11カ月である。最後に、最高顧問会議は5年7カ月の間の延べ8名全員が親王である。親王が半分以上を占める省が大半である。

これらの親王について特筆すべきは、いずれも4世王の息子や孫であったということである。この時期に存命中の親王には、彼らの他にも、3世王の王子、あるいは4世王や5世王の副王の王子が多数存在していた。にもかかわらず、大臣に任命された親王はいずれも4世王の系統だったのである<sup>23</sup>。ここでは4世王の子孫を「モンクット・ファミリー」と呼ぶことにしたい<sup>24</sup>。

なぜこれほどまでにモンクット・ファミリーが卓越したのか。3つの理由がすぐに思い浮かぶであろう。①有能であったから、②ファミリーの一員であったから、③ファミリー構成員数がとても多く、その中で比較的有能なもののみが登用されたから、というものである。①と③に関係する有能であったか否かの判断は容易ではない。もっとも手軽な判断基準は学歴を中心とした経歴であろう。その判断は王族についてよりも、むしろ王族以外の閣僚について重要となるので、次節で検討することとし、ここでは差し当たり、ファミリーの全容を概観しておきたい。それは③の可能性にも半分答えることになる。

チャクリー王朝の国王の系譜は次のようになる。2世王は1世王の王子、3世王と4世王は2世王の王子である。4世王が正室の王子であるのに対して、3世王は側室の王子である。3世王が先に即位したのは年齢が上であり、実務経験があり、しかも有力な貴族の支援を受けていたからであった。ただし、3世王は正室をおかなかつたため、3世王がなくなったとき、その王子には強い王位継承権を主張できるものがなく、かつては3世王を支持していた有力貴族が今

---

<sup>23</sup> 唯一の例外といえるかも知れないのは、1890年4月15日から1899年3月27日まで海軍総司令官を務めたブラーブポーラバック親王であろう。ただし、海軍総司令官は閣僚相当のポストではなかった。

<sup>24</sup> モンクットは4世王の本名である。

度は、3世王時代の27年間出家生活を過ごしていたモンクット親王を支持したため、彼が4世王として即位することになった。

### 3-2. 4世王の親王

まず、4世王の親王をタムロンサックの『チャクリー王家』に依拠して[Thamrongsak 1972]虱潰しに調べてみよう。流産や乳幼児死亡が少ないので、ここでは閣僚への就任可能性を考慮して、原則として20歳以上になるまで生きていた男子のみを生母別にあげる。名前は本名と最終的な位を記載し、クロムを与えられたものはその年を記載する。生没年、家族関係、学歴が主たる記事となる。名前の前の( )内の数字は何番目の子どもかを示している。たとえば、後の5世王は4世王の第9子ということである。

(9)チャオファー・チュラーロンコーン親王(5世王)(1853年9月20日～1910年10月23日)

(28)チャオファー・チャートウロンラッサミー親王(クロムプラ・チャクラパッディポン)(1857年1月13日～1900年)

(45)チャオファー・パーヌランシーサワーンウォン親王(クロムプラヤー・パーヌパンウォンウォーラデート)(1860年1月16日～1928年6月13日)

彼ら3名は4世王の正室(3世王の孫娘)の息子である。(9)は1861/2年にクロムムーン、(28)は75年にクロマルワン、(54)は71年にクロマルワン。(9)は5世王、(28)は大蔵大臣、(45)は陸軍大臣やカラーホーム大臣になる。

(24)テーワンウタイウォン親王(クロムプラヤー・テーワウォンワローパカーン)(1858/11/27-1923/06/28)

(75)サワットソーボン親王(クロムプラ・サワッディワッタナウィシット)(1865/12/22-1935/12/10)

彼ら2名は兄弟であり、母親はスッチャリットクン家出身である。彼らの同腹の姉妹3名が5世王の正室となっており、この意味で彼らは5世王の異母兄弟であるばかりか、義兄弟でもある。(24)は1881年、(75)は98年にクロムムーン。(28)は85年以来生涯にわたって外務大臣、その息子も外務大臣になる。(75)は5世王の兄弟の中で唯一留学しており、オックスフォード大学で法律学を学んで、1892年に初代法務大臣に就任した。

(62)チットチャルーン親王(チャオファー・クロムプラヤー・ナリッサラーヌワット)(1863年4月28日～1947年3月10日)

母親は、5世王の母親の異母妹であり、王族である。彼は5世王とは異母兄弟であるばかり

ではなく、母方の従兄弟にもなる。1885年にクロマクン、87年にチャオフアー位を授与されている。建設大臣、宮内大臣、大蔵大臣、カラーホーム大臣、陸軍大臣などを歴任した。

(1)ノッパウォン親王(クロマムーン・マヘートウォーラシウウィラート)(1823年3月6日～1867年)

(2)スプラディット親王(クロマムーン・ウィッサヌナートニパートーン)(1824年5月26日～1862年)

彼らは4世王が即位前に生まれた兄弟であり、5世王即位前に死亡していた。(1)は1853年、(2)は56年にクロマムーン。

(20)カッカナーンユコン(クロマルワン・ピチットプリーチャーコーン)(1855年10月29日～1910年3月11日)

(37)チュムポンソムポート親王(クロマルワン・サップシットプラソン)(1857年12月29日～1922年4月3日)

彼らはインタウィモン家出身の母親をもつ兄弟である。(20)は1876年、(37)は85年にクロマムーン。(20)は法務大臣、(37)は建設大臣、宮内大臣。

(23)スックサワット親王(クロマルワン・アディソーンウドムデート)(1856年3月14日～1925年4月16日)

(30)カセームシースッパヨーク親王(クロマムーン・ティワーコーラウォンプラワット)(1857年8月17日～1916年1月3日)

(23)は1876年、(30)は96年クロマムーン。(23)は陸軍次官や師団長になり、その息子M.C.アロンコットは7世王時代にカラーホーム副大臣になり、親王の位を授与される。他方、(30)はさして重要な官職に就かなかったものの、息子のM.C.ネーンは7世王時代に大蔵大臣となり、親王の位を授与される。

(24)タウィータワンラブ親王(クロマムーン・プータレートタムロンサック)(1856年3月15日～1897年12月8日)

(51)カーブカノックラット親王(1858年5月10日～1879年)

彼らはブンヤラッタパン家出身の母親をもつ兄弟であり、(24)は1876年クロマムーン、ムアン大臣になる。

(26)カセームサンソーパーク親王(クロマルワン・プロムワラーヌラック)(1856年8月16日～1925年1月4日)

(47)マヌッサヤナークマーノップ親王(クロムブラヤー・ワチラヤーンウォーロット)(1859年4

月12日～1921年8月2日)

彼らは4世王即位後最初の側室の子どもであり、(26)は高等裁判所長や最高裁判事になる。

他方、(47)は生まれながら目が不自由で、出家生活を送った後、1910年にはチャクリー王朝10代目のサンガ僧王に就任する。(26)は1883年、(47)は81年クロマムーン。

(27)クラートルーサン親王(クロマムーン・ラーチャサックサモーン)(1856年11月3日～1918年6月29日)

(54)チャイヤヌチット親王(クロマムーン・ボンサーディソーンマヒップ)(1861年8月27日～1936年1月28日)

彼らはローチャナディット家出身の母親をもつ兄弟である。(27)は1883年、(54)は98年クロマムーン。後者は博物館局長になる。

(17)クリッサダーピニハーン親王(クロムブラ・ナレートウォーラリット)(1855年5月7日～1925年8月10日)

母親はモーン系貴族コッチャセーニー家出身で、「王様と私」のアンナの生徒になりタイ人で初めて英文小説の翻訳を行ったと言われる人物である。一人息子の親王は駐英公使を務めた後、首都、建設、御璽の各大臣を歴任する。息子2名(チャルーンサックとボーウォーラデート)も大臣になる。1875年クロマムーン。

(33)シーシッティトンチャイ親王(クロマクン・シリタットサンカート)(1857年10月16日～1911年3月11日)

(63)ワッタナーヌウォン親王(クロマクン・マルポンシリパット)(1863年5月27日～1923年4月5日)

母親はナ・ナコーン家の出身。(33)は御璽大臣や大蔵大臣、(63)はパリ駐在公使やブラーチンブリー州総督になる。(33)は1883年、(63)は95年クロマムーン。

(25)トーンコーンコーンヤイ親王(クロマルワン・プラチャックシンラパーコム)(1856年4月5日～1925年1月25日)

(34)トーンテームタワンウォン親王(クロマルワン・サップサートスッパキット)(1857年10月17日～1919年4月16日)

母親はナ・ラーチャシーマー家の出身。(25)は1881年にクロマムーンとなり、カラーホーム大臣や海軍総司令官などを歴任。(34)はクロマムーンを授与されたのが1905年と遅く、重要な官職には就任していない。

(51)チャントーンタットチュダーターン親王(クロマムン・ウィウィッタワンナプリー

チャー)(1860年12月11日～1932年10月10日)

1896年にクロマムーンの位を授与され、病院局長に就任した。

(49)サワットプラワット親王(クロムプラ・ソムモットアモーンパン)(1860年9月7日～1915年4月21日)

1878年にクロマムーンの位を授与され、国王官房長官や王庫金局長となった。

(56)ワンナーコーン親王(クロムプラ・ナラーティッププラパンポン)(1861年11月20日～1931年10月11日)

1889年クロマムーン。92年大蔵大臣。息子に大臣や局長がいる。

(57)ディットウォーラクマーン親王(クロムプラヤー・ダムロンラーチャーヌパーブ親王)(1862年6月21日～1933年12月1日)

母親は(27)(54)の母親の同腹妹である。1886年にクロマムーン。教育局長、内務大臣、御璽大臣、最高顧問などを歴任。

(59)シーサオワパーン親王(1861年7月19日～1889年10月11日)

病院局長などに就任したものの、クロムを授与される前に死亡した。

(61)ソーナバンディット親王(クロマクン・ピッタヤーラーププルッティターダー)(1863年4月1日～1913年10月28日)

1891年クロマムーン。御璽大臣、建設大臣、宮内大臣などを歴任。息子のM.C.ターニーニワット(親王の位を授与)も大臣になった。

(76)チャイヤンモンコン親王(クロマムーン・マヒッソーンラーチャハルタイ)(1866年1月1日～1907年4月15日)

1895年クロマムーン。大蔵大臣。

### 3-3. 5世王の親王

次に5世王の王子たちについて見てみよう。

(20)ワチルンヒット(1878年6月27日～1895年1月5日)

(37)ソムマティウオンワロータイ(ソムデットチャオファー・クロマクン・シータムマラートタムロンリット)(1882年6月9日～1899年6月17日)

(69)マヒドンアドウンヤデート(ソムデットチャオファー・クロマルワン・ソクラーナカリン)(1892年1月1日～1935年3月25日)

母親はサワーンワッタナー皇后。(20)は1886年に、5世王の最初の皇太子に任じられた。



(37)は1891年、(69)は1903年クロム。(69)は1905年イギリスへ留学し、ハロー校入学。1907年ポツダムのプロシア軍学校(Royal Prussian Military College)に入り、後にフレンスブルクの海軍学校(Imperial German Naval College Flensburg)へ移って11/2年卒業。一度帰国した後、17年今度はアメリカに留学し、ハーヴァード大学で衛生学を学ぶ。24年には今度は医学を学ぶためにイギリスのエディンバラ大学に留学。体調を崩して帰国し、26/7年にハーヴァード大学医学部に留学して28年6月医学博士となった[ONCC 1991: 11-13]。教育省大学局長を務めた。(69)の王子が後に8世王と9世王になる。

(29)ワチラーウット(6世王)(1881年1月1日～1925年11月25日)

(40)チャクラポンブーワナート(ソムデットチャオファー・クロマルワン・ピッサヌロークプラチャーナート)(1883年3月3日～1920年6月14日)

(62)アッサダーンデーチャーウット(ソムデットチャオファー・クロマルワン・ナコーンラーチャシーマー)(1889年5月12日～1925年2月9日)

(72)チュダートウットタラーディロック(ソムデットチャオファー・クロマクン・ペッチャブーンインタラーチャイ)(1892年7月5日～1923年5月8日)

(76)プラチャーティボックサクディデート(7世王)(1893年11月8日～1941年5月30日)

母親はサオワパーポーンスー皇后。クロムを授与されたのは、(29)1888年、(40)91年、(62)98年、(72)1904年、(76)05年である。(29)は(20)の死後皇太子になり、5世王が亡くなると6世王に、(76)は続いて7世王になった。この(29)は1888/9年、(76)は1905/6年にイギリスに留学し、陸軍士官学校で学んだ。(40)は1897年イギリスに留学し、98年ロシアの士官学校に入学した。続いて1906年3月には軍大学を卒業して帰国し、09年陸軍参謀長、17年元帥[Senathikan 1970: n.p.; Udom 1994: 19-52]。(62)は98/9年イギリスに留学し、帰国後陸軍の師団長、1923年には海軍大臣になった。(72)は1904/5年イギリスに留学し、ケンブリッジ大学で学士号(B.A.)を取得して帰国し、チュラーロンコーン大学の教師や彫刻学校の校長になった。

(33)ボーリパットスクムパン(ソムデットチャオファー・クロムプラ・ナコーンサワンウォーラピニット)(1881年6月29日～1944年2月18日)

母親は5世王の異母妹スクマーンマーラーシー王妃、祖母はブンナーケー族出身。ドイツの陸軍士官学校を卒業し、少尉に任官された後帰国し、陸軍参謀長、海軍総司令官、海軍大臣、カラーホーム大臣、内務大臣、最高顧問などの要職を歴任した。1891年クロム。

(41)ユコンティカムポー(クロマルワン・ロップブリーラーメート)(1883年3月17日～1932年4

月8日)

3世王の孫M.C.サーイを母親とし、1888年にチャオファー位、91年にクロム[Hophrasamut 1925: 322, 331-3]。イギリスに留学して、ケンブリッジ大学で学士号を取得し、帰国後ナコーンシータムマラート州総督、南部管区長官を経て内務大臣、最高顧問を歴任。

(14)ラピーパッタナサック(クロマルワン・ラートブリーディレークリット)(1874年10月21日～1920年8月1日)

母親はケートタット家出身。イギリスに留学し、オックスフォード大学で学士号を取得。

1899年クロムを授与された。法務大臣と農務大臣を歴任。

(38)ペンパッタナボン(クロムムーン・ピチャイマヒンタロードム)(1882年9月10日～1909年11月11日)

母親はペンクン家出身。1908年クロム。イギリスに留学し、帰国後農務事務次官補佐や養蚕局長。

(12)キティヤーコーンウォーラック(クロムプラ・チャンタブリーナルナート)(1874年6月8日～1931年5月27日)

母親は当時もとても富裕な中国人商人プレー・ピソンソムバットボーリブーンの娘。

1902年にクロム。イギリスに留学。教育局長、主計局長、大蔵大臣、商業大臣、最高顧問などを歴任。

(15)プラウィットワッタノードム(クロマルワン・プレーチンキッティボーディー)(1875年5月27日～1919年12月9日)

母親はカンラヤーナミット家出身。1902年クロム。イギリスとフランスに留学。宮内大臣と国王官房長官を歴任。

(17)チラプラワットウォーラデート(クロマルワン・ナコーンチャイシースラデート)(1876年11月7日～1914年2月4日)

(42)ウッティチャイチャルームラブ(クロマルワン・シンハウィクロムクリエンクライ)(1883年12月5日～1947年10月18日)

母親はローチャナディット家出身で、ダムロン親王の生母の異母妹である。(17)は1900年、(42)は12年にクロム。(17)はデンマークの陸軍士官学校に学び、陸軍総司令官やカラーホーム大臣を務めた[Hophrasamut 1925: 381, 388-390]。(42)はイギリスの海軍に学び、海軍参謀長、海軍大臣、カラーホーム大臣を歴任。

(28)アーパーコーンキアティウォン(クロマルワン・チュムポンケートウドムサック)(1880年

12月19日～1923年5月19日)

(46)スリヨンプラユラパン(クロムムーン・チャイヤーシースリヨーパート)(1884年7月29日～1919年5月2日)

母親はモート・ブンナーク。(28)は1904年、(46)は1914年にクロム。(28)はイギリスで軍事学を学ぶ。海軍参謀長、海軍大臣。(46)もイギリスに留学し、造幣局長になった。

(35)ブラチャットチャイヤーコーン(クロムプラ・カムペーンペットアッカラヨーティン)(1882年1月23日～1936年9月14日)

1906年クロム。イギリスで軍事工学を学ぶ。工兵総監、鉄道局総裁を経て、商業・運輸大臣、最高顧問を歴任。

(52)ランシットプラユーンラサック(クロムプラヤー・チャイナートナレントーン)(1885年11月12日～1951年)

母親M.R.W.ヌアン・サニットウォンはサーイサニットウォン親王(M.Cから昇格)の娘。

1914年クロム。ドイツのハイデルベルク大学に留学。保健局長。

(44)ディロックノッパラット(クロムムーン・サワンカウイサイノーラボーディー)(1884年5月3日～1913年1月12日)

母親はチェンマイの王族。1912年クロム。ドイツのテュービンゲン大学理学博士。内務省に勤務。

### 3-4. その他のモンクット・ファミリー閣僚

モンクット・ファミリーで閣僚に就任したものは、4世王と5世王の王子の他に、4世王の孫つまり5世王の弟の息子たちもいた。彼らの経歴も簡単に見ておきたい。

(1)チャルーンサッククリッサダーコーン親王(M.C.チャルーンサックカルダーコーン・カルダーコーン)(1875年7月2日～1928年10月5日)

クロムプラ・ナレートウォーラリット親王の長男。1884/5年ナレート親王がロンドン駐在公使として赴任するとそれに同行した。87/8年帰国すると、イギリス人(Morant、後にワチルンヒット皇太子の家庭教師)を家庭教師に雇って学ぶ。89/90年国王の奨学金によりイギリスに留学し、ハロー校を経てケンブリッジ大学に入学。96/7年イギリスの法曹資格を取得した。1899/1900年帰国して外務省入省し、1900/1年内務省に移る。05/6年駐パリ公使代理、翌年には駐パリ全権公使となった。09年帰国して法務副大臣、続いて法務大臣。12/3年に再び駐パリ全権公使として赴任した[Damrongrachanuphap 1928: (1)-(5)]。

(2)ボーウォーラデート親王(M.C.ボーウォーラデート・カルダーコーン)<sup>25</sup>

クロムプラ・ナレートウォーラリット親王の次男。イギリスで軍事学を学んで帰国し、陸軍に勤務。ナコーンラーチャシーマー州陸軍司令官、砲兵総監などを歴任した後、兄の後を受けて駐パリ全権公使となった。1912年6月に帰国し、兵器局長、砲兵学校司令官、第3軍司令官を経て14年8月8日カラーホーム大臣補佐。地方行政の単位として州の上に管区が設置されると、パーヤップ管区長官に任命されるが、22年辞職して年金生活に入った。7世王時代に復職し、カラーホーム大臣補佐、陸軍参謀長を経て1928年カラーホーム大臣になった。29年11月親王の位を授与された[Butri & Phuchong 1992: 23; PKPS 42: 142-144]。1933年10月反乱を起こして亡命。

(3)スッパヨークカセーム親王(M.C.ネーン・カセームシー)(1876年8月29日～1933年1月6日)

父親は4世王の息子クロムムーン・ティワーコーラウォン親王。1894/5年スワンクラブ校を卒業し、大蔵省に三等事務員として入省。叩き上げで次第に出世し、主計局長補佐、1908年4月1日管財局(krom kep)長、10/1年事務次官代理、11年8月1日正式に事務次官[Supphayok 1933: 6-7]。21年親王の位を授与される。22年大蔵大臣代理、23年4月1日大蔵大臣。体調がすぐれず29年に辞職。32年4月大蔵大臣に復帰。

(4)アロンコット親王(M.C.アロンコット・スックサワット)(1880年10月24日～1952年12月19日)

父親は4世王の親王スックサワット(クロマルワン・アディソンウドムデート)。1892年から陸軍士官学校に学び、1899年少尉に任官されて第一近習歩兵連隊に配属される。当時5世王の親王で留学から戻ったものがまだ少なかったため、国王と親しく接して寵愛を受け、士官学校を卒業してからわずか11年で少将の階級に達したが、その後は地方勤務が多くなった[Thaniniwat 1953: 2]。28/9年陸軍参謀長。30年親王の位を授与される。31年カラーホーム大臣となるが、同年11月8日カラーホーム省と海軍省が合併すると、大臣格のまま副大臣に任命された。

(5)ターニーニワット親王(M.C.ターニーニワット・ソーナクン)(1885年11月7日～1974年9月8日)

父親は4世王の親王クロマクン・ピッタヤラーブプルッティターダー。サオワパーポーンシー王妃の命により、王宮内の王子向けの学校で5世王の親王たちと一緒に学ぶ[Thaniniwat 1974: 3-4]。その後国王から奨学金を給付されてイギリスに留学した[Ibid.: 10]。英語研修、初

<sup>25</sup> 生没年を確認する資料を見つけれなかった。

等教育を経て、1901年ラグビー校に入学[Ibid.: 16-17]。08/9年オックスフォード大学で東洋学の学士号を取得して帰国[Ibid.: (2)]。09/10年内務省に入省し、10年国王官房に移って5世王の皇后サオワパーの秘書官、13/4年外務担当国王秘書官補佐、18/9年国王官房長官補佐、19/20年外務担当国王秘書官を兼任[Ibid.: (3)]。18年9月1日チャオプラー・ヨマラート(パン・スクム)の娘と結婚。22年親王に昇格。26年8月3日文部大臣。

(6)トライトッサブラパン親王(M.C.トライトッサブラパン・テーワクン)(1883年8月11日～1943年2月5日)

クロムプラー・テーワウンワローパカーン親王の第5子で次男。叔母(父親の妹)サオワパーポーンシー皇后に預けられ、王宮に居住して5世王の王子たちと親しく交わる[Thaniniwat 1943: (1)]。1895/6年国王の奨学金によりイギリスへ留学して、まず小学校に通い、98/9年中等学校ハロー校に進学、1901/2年にはケンブリッジ大学トリニティ・カレッジに入学。03/4年に卒業。その後パリの公務員学校外交学科に学ぶ[Ibid.: (2)-(3)]。06年9月に帰国して外務省に入省。08年内務省に移り、10年9月再び外務省に戻った。13年12月駐ベルリン公使、第一次世界大戦中に駐デンマーク公使に転勤。18年9月帰国し、外務事務次官に就任[Ibid.: (4)-(5)]。1922年親王の位を授与される。彼は幼少時代に6世王と一緒に遊び学んだ間柄であり、イギリス留学時期が重なっており、しかも外国の外交官の謁見に同席する機会の多い外務次官でもあったため、6世王の寵愛を受けていた[Ibid.: (7)]。23年6月父親が死亡すると、外務大臣代行となり、24年4月1日には正式に外務大臣に就任した。29年にクロムムーン・テーワウンワロータイというクロムを授与され、31年には最高顧問会議のメンバーに任命された。

#### 4. 王族以外の閣僚

モンクット・ファミリーが閣僚に登用された理由が、血筋にあるのか、能力にあるのか、あるいはその両方なのかという疑問を解決する糸口になるのは、ファミリー以外の閣僚について閣僚登用の理由を考察してみることであろう。もし能力に基づいていなかったとすれば、ファミリーについても能力は二の次にされていた可能性が高くなるからである。そこで、ここでは親王以外の閣僚22名全員の経歴を生年月日順に、家柄、学歴、職歴に重点を置きながら概観してみたい<sup>26</sup>。

<sup>26</sup> この22名の中には、実質的には正式な大臣に相当する職務を担当した副大臣を2名含めている。1名はカラーホーム大臣が3年にもわたって地方出張をしていた間代理を務めたプラー・モントリースリヤウンである。もう1名は、前任の大臣辞職後後任の大臣が任命されるまでの5カ月ほど内務大臣を務め

(1)チャオプラヤー・ウィチットウォンウッティクライ(M.R.W.クリー・スタット)(1843/4年～1913年4月19日)

父親はM.C.チンダー。祖父は1世王の親王クロムムーン・クライソンウィチット(スタット)であり、その夫人はパットルン国主の家柄であり、4世王の皇后と親族の間柄にあった。このため、4世王はスタット家を親戚と見なしていた[Damrongrachanuphap 1914: (2)-(4)]。クリーの弟ロップは6世王時代の法務大臣チャオプラヤー・アパイラーチャーである。1864/5年4世王の近習となり、宗教部(krom thammakan)に勤務していた父親の補佐をするようになる。同部を管轄するクロムプラヤー・バムラーブポーラパック親王(4世王異母弟チャオーファー・マハーマーラー)に気に入られて重用され、88/9年宗教局長(athibodi krom sangkhakari)となる。89/90年文部省の初代事務次官。1902年4月19日チャオプラヤー・パーサコーラウォンが辞職すると代わって文部大臣に就任した。04年11月チャオプラヤー・ウィチットウォンウッティクライの欽賜名を授与される[Ibid.: (5)-(9)]。11年高齢のため文部大臣を辞任した[Ibid.: (12)]。

(2)プラヤー・モントリースリヤウォン(チューン・ブンナーク)(1846/7年～1915年6月27日)

父親はプラヤー・モントリースリヤウォン(チュム・ブンナーク)、祖父はディット・ブンナーク。プラヤー・スリヤーヌワット(クート)の異母兄。読み書き程度の勉強をした後、4世王の近習になった。父親の地方勤務に随行しながら行政の実務を学んだ。4世王が逝去すると、5世王の近習となった。1873/4年に胸の病気を患い、中国で8カ月間療養した。この間を利用して広東語を学び、74/5年に帰国した。75/6年ブーケット総督(kha luang yai)、80/1年半島部西海岸地域総督、84/5年パーヤップ州総督。1887/8年にバンコクに戻ると、今度はロンドン駐在公使に任命された。2年後に帰国し、カラーホーム副大臣に任命された。90/1年から92/3年にかけて3年あまりカラーホーム大臣チャオプラヤー・ラッタナーティベート(プム、まだチャオプラヤー・ポンラテープだった)がチェンマイへ出張していた時期には、カラーホーム大臣代理を務めた。94年にナリット親王がカラーホーム大臣に就任した後も副大臣にとどまったが、カラーホーム省が国防省に衣替えをし、彼自身の年齢も高くなってきたので、1902/3年に退職した[Damrongrachanuphap 1918: (17)-(37)]。

(3)チャオプラヤー・パーサコーラウォン(ポーン・ブンナーク)(1849/50年～1920年5月15日)

父親ソムデットチャオプラヤー・ボーロムマハーブラユーラウォン(ディット・ブンナー

---

たプラヤー・マハーアムマーターティボーディーである。

ク)を幼くして失ったため、異母兄で当時ブンナーク一族の当主であったソムデットチャオブラヤー・ボーロムマハーシースリヤウォン(チュワン・ブンナーク)に育てられた。15歳でイギリスに留学。しかし3年後の1866/7年にチュワンの息子チャオブラヤー・スラウォンワイヤワット(ウォーン・ブンナーク)がヨーロッパへ使節として派遣されたときに通訳を務め、そのまま一緒に帰国して4世王の外務担当秘書官に採用された。4世王の死後には、摂政チュワンをはばかりことなく、1870年代の5世王の初期改革の中心的推進者となり、5世王の厚い信頼を獲得した。79年ヨーロッパへ使節として派遣され、任務終了後もそのまま友好使節としてヨーロッパ各国を歴訪した。帰国後、近習部長(cangwang mahatlek)、プラ克蘭スワン局長、パーシー・ローイ・チャック・サーム(関税)局長、主計局長を経て、90/1年農業大臣。92年4月1日には新設の文部省の初代大臣に就任。96年3月29日チャオブラヤー・パーサコーラウォンの欽賜名を授与された。高齢で執務が難しくなってきたため、1902年文部大臣を辞職した [Damrongrachanuphap 1922a: kh-n]。

(4)チャオブラヤー・テーウェートウォンウィワット(M.R.W.ラーン・クンチョーン)(1852/3年～1923年1月1日)

父親はシンハナートラーチャドゥロン親王(M.C.から昇格)、祖父は2世王の親王。父親は叔父に当たる4世王の寵愛厚く、ラーンが元服式(kon cuk)をしたときには、4世王がわざわざ親王の御殿に出向いてまげ落としをしてやったほどであった。こうした榮譽に浴するものはまれであった [Damrongrachanuphap 1923: (7)]。元服式後4世王の近習となった。5世王とは幼少時代から親しく、その即位後の近習となり、1888年6月26日には近習部長となった。92/3年にはワチルンヒット皇太子の子守役(phraaphiban)となった [Thewetwongwiwat 1923: kh]。その後国事会議議長(sapha nayok ratthamontri)、初代スカーピバーン(衛生)局長を経て、98年建設大臣となり、翌年には農務大臣に就任した。1900年11月にチャオブラヤー。

(5)チャオブラヤー・タムマサックモントリー(チューム・セーンチュートー)(1852年3月28日～1931年7月1日)

父親ブラヤー・スラサックモントリー(セーン・セーンチュートー)は5世王の近習部長(cangwang mahatlek)。ソムデットチャオブラヤー・マハーピチャイヤート(タット・ブンナーク)が自宅に一族の子弟向けに開いた学校で学ぶ。父親が4世王の近習として出仕させた。1868年4世王が逝去すると、摂政チュワン・ブンナークに仕えた。70年5世王が警護部隊を設置すると、父親が国王警護近習兵部隊の初代司令官となったので、チュームは少尉として加わった。父親とともに5世王のシンガポールとジャワ、続いてインドへの旅行に同行した。

73/4年父親が死亡した後も引き続き近習として警護兵の任務にあたった[Thammasakmontri 1975: 3-11]。1880年代後半にホー族の反乱鎮圧で活躍し[Ibid.: 46-8]、90年4月25日陸軍総司令官に就任[Ibid.: 50-1]。92年4月1日から新設の農商務省の大臣に任命されたが[Ibid.: 65-6]、97年3月農商務大臣を辞任。辞職後、業務上横領の容疑で調査委員会を設置された[Ibid.: 81-2]。1903/4年にはパーヤップでギウの反乱が勃発すると鎮圧軍の司令官として出征、26年3月31日元帥[Ibid.: 91-2]。

(6)チャオプラヤー・ボーディントーンデーチャーヌチット(M.R.W.アルン・チャトラクン)(1856/7年～1921年7月25年)

父親はM.C.ニン、祖父は1世王の親王。幼少時には叔父M.C.スバンの自宅で読み書きを習い、5世王が近習兵部隊を設置するとそれに加わった。1878/9年砲兵部隊に移り、89/90年陸軍士官学校に転勤。1899/1900年クルンテープ州陸軍司令官。1900/1年陸軍ヨックラバット、01/2年陸軍次官、戦略局副総裁。10年カラーホーム大臣補佐(副大臣)、14年カラーホーム大臣代理、15年には正式にカラーホーム大臣に就任した。同年には元帥の階級を授与された[Damrongrachanuphap 1922b: c-s]。

(7)チャオプラヤー・アパイラーチャーマハーユッティタムマトーン(M.R.W.ロップ・スタット)(1858年2月24日～1938年11月12日)

父親はM.C.チンダー、M.R.W.クリー・スタッツの弟にあたる。僧侶から読み書きを習い、1875/6年5世王の近習となる。80年代半ばから首都省に勤務、1896/7年巡回局副局長(rongathibodi krom kongtrawen)、1902/3年には首都事務次官に就任。12年法務大臣となり、同年11月チャオプラヤー・アパイラーチャーマハーユッティタムマトーンの欽賜名を授与された[Aphairacha 1938: (1)-(3)]。

(8)プラヤー・スリヤーヌワット(クート・ブンナーク)(1862年4月10日～1936年9月30日)

父親はプラヤー・モンリースリヤウオン(チュム・ブンナーク)で、チューン(カラホーム副大臣)の異母弟。幼少時はチュワン・ブンナークの自宅で学び、1871/2年から5年間イギリス領のペナンとカルカットに留学。1876/7年帰国して5世王の近習。80/1年内務省入省、87/8年外務省に移って駐イギリス公使館勤務。89/90年いったん帰国した後、今度はドイツへ派遣される。95/6年フランスへ転勤、96/7年パリ駐在公使。1905年帰国して建設大臣に就任し、06年には大蔵大臣に転じた[Suriyanuwat 1937: 7-9]。

(9)チャオプラヤー・ヨムマラート(パン・スクム)(1862年7月15日～1938年12月30日)

スパンブリー県で庶民の子どもとして生まれる。幼少時から寺院で学んでそのまま出家し、



1883/4年教法試験のプラヨーク3段を受験した直後に還俗<sup>27</sup>。ダムロン親王に仕えて、スワンクラブ校のタイ語補助教員に採用された[Damrongrachanuphap 1939: (28)-(35)]。84/5年に5世王の親王5名の専属教師となり、うち4名が85/6年イギリスへ留学すると子守役として同行。ロンドン公使館書記官を兼務し、93年にはワチラーウット親王(後の6世王)の子守役も務めた。94年に帰国し、かねてから懇意であった内務大臣ダムロン親王の秘書官に任命された。96/7年ナコーンシータムマラート州初代総督[Ibid.: (72)-(73)]。1906/7年建設大臣、07/8年首都大臣[Ibid.: (99)-(100)]。08年チャオプラヤー・ヨムマラートの欽賜名。教え子ワチラーウット皇太子が即位すると、国王の信頼と寵愛をますます享受し、22年には内務大臣[Thaniniwat 1939: (116)]。さらに、行政官の最高の階級マハーアムマートナーヨックを授与された<sup>28</sup>。

(10)チャオプラヤー・ウォーラポンピパット(M.R.W.イェン・イッサラセナー)(1863年3月31日～1941年7月26日)

父親はM.C.サオワレート。王宮内部の学校に学び、1877/8年前方軍工兵部隊(krom thahan na chang)に勤務。宮廷に移って近習となり、1903/4年近習部長。6世王が逝去すると、26年3月5日近習局総裁に任命され、肥大した近習局の整理を担当。その功績により、26年7月4日宮内大臣代理、チャオプラヤー・ウォーラポンピパットの欽賜名、27年4月1日正式に宮内大臣に就任[Woraphongphiphat 1941: (1)-(2)]。

(11)チャオプラヤー・スラシーウィシッタサック(チューイ・カンラヤーナミット)(1863年4月24日～1942年2月9日)

父親はプラヤー・マハーアムマータヤーティボーディー(チューン)、祖父はチャオプラヤー・ニコーンボーディン(トー)。先祖は雲姓の中国人。チューイの異母姉は5世王の側室チェム(プラーチン親王の生母)[Thamrongsak 1972: 363-4]、さらにチューイの娘にはプラーチン親王の側室、5世王弟サップシット親王の息子の側室がいる。僧侶から読み書きや算術を5年間ほど習った後、1878/9年5世王の近習となる。地方行政官となり、94/5年ピッサヌローク州総督。97年5世王の第1回目のヨーロッパ旅行に同行。1902年4月1日パーヤップ州総督、10年1月26日チャオプラヤー・スラシーウィシッタサックの欽賜名。パーヤップが管区(phak)になるとその初代長官。16年内務大臣[Noi 1931: 140-145; Natthawut 1974: 15-19]。

(12)プラヤー・マハーアムマータヤーティボーディー(セン・ウィラヤシリ)(1865年5月30日～

<sup>27</sup> 当時の教法試験については、石井米雄[1975: 172-4]を参照。

<sup>28</sup> 軍人の元帥に相当する階級であり、それを授与されたのは彼と外務大臣テーワウォン親王の2名だけであった。6世王からの信頼の厚さを物語っている。

1956年1月14日)<sup>29</sup>

有力な中国人商人の家系で、父親クン・パーシーソムバット(アルン)は、5世王側室ウアム(チャントブリー親王生母)の父プレーヤー・ピソンソムバットボーリブーン(イム)の弟。王宮内部の学校、スワン・ナンタウタヤーン校、地図学校に学び、1882/3年英語の通訳として役人になる。地図部に勤務し、98/9年内務事務次官、1903/4年内務副大臣、04/5年郵便・電信局長、06/7年鉱山局総裁、13年内務副大臣、15年内務大臣代理[Mahaamattayathibodi 1959: 1-13]。

(13)チャオプレーヤー・ウォンサーヌプラパット(M.R.W.サターン・サニットウォン)(1866年6月21日～1940年10月21日)

父親はサーイサニットウォン親王(元来はM.C.)、祖父は2世王の親王。妹には5世王の側室ヌアンの他、5世王弟サワット親王に嫁いだサギアムがいる。王宮の学校(Rongrien Luang)入学し、1871年には近習兵舎(Rong thanan mahatlek)で英語を学ぶ。72年国王の命により、海軍のお雇い外国人リシュリュウ(後にタイ海軍総司令官)のついでデンマークへ留学。陸軍士官学校を卒業し、88年デンマークの陸軍少尉に任官。90年には参謀学校に入学し、2年後に卒業。この間91/2年から同じデンマークへ留学した5世王親王チラブラワットの面倒をみた[Wongsanupraphat 1941: 1-4]。93年帰国して戦略局(陸軍)に勤務。98年陸軍参謀長補佐、99年陸軍士官学校司令官、モム・チャートデートウドムの欽賜名を授与される[Ibid.: 5-6]。1904年3月陸軍参謀長[Ibid.: 7-8]。09年5月13日農務副大臣に転任、同年12月16日には正式に農務大臣に就任[Ibid.: 20-22]。11年11月11日チャオプレーヤーの位を授与される[Ibid.: 59]。12年4月1日に建設大臣へ転任した[Ibid.: 61]。

(14)チャオプレーヤー・プラサデット(M.R.W.ピア・マーラークン)(1867年4月16日～1917年2月14日)

父親は海軍総司令官(1890～1899)クロマムーン・プラーブポーラパック親王(M.C.から昇格)。祖父チャオファー・マハーマーラーはモンクット・ファミリー以外では4世王と5世王にもっとも信頼された2世王親王であり、マハータイ大臣(1878-1886)を務めた。ピアの1881年の元服式は5世王臨席のもとに行われた[赤木 1981: 255]。宮内大臣M.R.W.プムの兄。自宅で学んだ後、85年にスワンクラブ校に入学[Ibid.: 255-6]。87年から教育局に勤務。92年内務大臣秘書官。93年ワチラーウット親王(後の6世王)のイギリス留学にタイ語教師として随行。99年に帰国し、

<sup>29</sup> 彼の名前は、葬式本の表紙にはSaeng(セーン)、本文ではSeng(セン)と表記されている。いずれが正しいのか不明である。なお彼の一族は1942年7月21日以後苗字としてウィラヤシリ・マハーアムマーターヤーディボーディーを用いるようになった。

5世王近習学校(公務員養成学校)の校長。1902年文部省に移って教育局長、事務次官、副大臣、大臣代理を経て、12年文部大臣に就任。13年11月チャオブラヤー・プラサデットの欽賜名 [Ibid.: 256-61; Noi 1931: 122-7]。

(15)チャオブラヤー・ボーディントーンデーチャーヌチット(イエーム・ナ・ナコーン)(1867年4月21日～1961年3月1日)

父親はチャオブラヤー・スタムモントリー(プローム)。1889年3月陸軍士官学校入学。1903年8月陸軍次官、10年12月17日カラーホーム事務次官、21年8月26日カラーホーム大臣代理、22年4月1日正式にカラーホーム大臣。22年11月11日チャオブラヤー・ボーディントーンデーチャーヌチットの欽賜名 [Bodinthondechanuchit 1961: ch-th]。

(16)チャオブラヤー・マヒトーン(ラオー・クライルーク)(1874年7月2日～1956年5月8日)

先祖は林姓の中国人であり [泰國林氏宗親会 1986: 571]、父親はブラヤー・ペッチャラット(モーラー)。1886/7年スワンクラブ校に入学 [Wisut 1956: 36]、6年間学んで91年に卒業し、最高裁(直訴審理)局長シリタットサンカート親王に預けられた [Ibid.: 38-9]。92年シリタット親王が法務担当国王秘書官に転任し、ラオーも一緒に国王官房に移った [Ibid.: 41]。ラピー(ラートブリー)親王が帰国し、国王官房でタイの法律を勉強するようになると、同年齢の親王と意気投合し、親王の秘書官に登用された。ラピー親王が法務大臣に就任すると、97年4月1日から法務大臣秘書官 [Ibid.: 50]。96年判事養成のための法律学校が設置されると入学し、97年12月第1回法曹試験に合格し [Ibid.: 51-6]、98年4月1日刑事裁判所の判事となった。99年4月1日民事裁判所長、1901年4月1日法務事務次官。11年1月26日最高裁判事、続いて法務担当国王秘書官を兼任 [Ibid.: 81-82]。14年4月10日宮内省法務局(krom phranitsat)初代局長に転任 [RKA(K) 31: 52-6]。18年9月9日最高裁長官。19年12月11日国王官房長官に就任。22年チャオブラヤー。32年4月7日国王官房が御璽省と名称を変更した後も引き続き大臣にとどまった。

(17)チャオブラヤー・ピチャイヤート(ダン・ブンナーク)(1875年6月6日～1946年7月25日)

父親はブラヤー・パイブーンソムバット(デート)。祖父はタット・ブンナーク。スワンクラブ校で英語を学んだ後、法律学校を卒業し法曹資格を取得。1897/8年から法務省に勤務し、1901年4月民事裁判所長、07年9月最高裁判事、19年12月最高裁長官、24年11月チャオブラヤー・ピチャイヤートの欽賜名、26年5月法務大臣代理、27年4月法務大臣 [Phichaiyat 1946: k-d]。

(18)チャオブラヤー・ポンラテープ(チャルूम・コーマーラクン・ナ・ナコーン)(1877年～1946年11月23日)

父親はプラヤー・シーソーララーチャパックディー(ヌーレック)。祖父はチャオプラヤー・マハーシリタム。母方祖父はウォーン・ブンナーク。1896/7年パーヌランシー親王のヨーロッパ出張に同行し、イギリスに残って親王の私費により学び、翌年国王奨学生に切り替えてもらった。留学時期がワチラーウット皇太子と重なっていたため、たびたび拝謁し知遇を得た。1900/1年帰国して大蔵省主計局に入省し、11年8月1日管財局長[RKA 28: 874]、15年9月2日主計局長[RKA(K) 32: 193-4]。20年農業省に移って副大臣、さらに21年には大臣となった。21年11月チャオプラヤー・ポンラテープの欽賜名[Noi 1931: 153-7]。

(19)チャオプラヤー・タムマーティコーラナーティボーディー(M.R.W. プム・マーラークン)(1877年7月27日～1942年1月23日)

父親は海軍総司令官クロムムーン・プラープポーラパック親王(元来はM.C.)、祖父はチャオファー・マハーマラー親王。文部大臣M.R.W. ピア・マーラークンの異母弟。スワンクラープ校に学んで、出勤する父親に付き従って海軍や王宮に出入りし、5世王の近習になった。1896年から宮内省に勤務し、1911年2月3日宮内事務次官[RKA 27: 2755]、13年4月15日宮内大臣[KR6 Pho. So. 2456: 28]、同年9月16日チャオプラヤー・タムマーティコーラナーティボーディーの欽賜名を授与された[Thammathikoranathibodi 1942: k-s]。

(20)チャオプラヤー・タムマサックモントリー(サナン・テープハッサディン・ナ・アユッタヤー)(1878年1月1日～1943年2月1日)

父親はプラヤー・チャイヤスリントーン。スワンクラープ校、スナンターライ校などを経て、1892年開設の師範学校に第1期生として入学、94年首席で卒業し、師範学校の補助教員となる。文部省奨学金を得て、96年からイギリスに留学。教員資格を取得して、1898/9年帰国[Sucitra 1983: 2]。師範学校教員を経て、1911年6月4日文部事務次官代理[KR6 Ro. So. 130: 102-3]、12年4月6日文部事務次官[KR6 Ro. So. 131: 21-2]、16年3月28日文部大臣代理、同年6月19日文部大臣[PKPS Pho. So. 2459: 89-90]。1917年チャオプラヤー。

(21)チャオプラヤー・シータムマティベート(チット・ナ・ソクラー)(1885年10月30日～1976年9月25日)

ソクラー国主の一族に生まれる<sup>30</sup>。ソクラーからバンコクの母方の祖父母のもとに身を寄せて、1895/6年アッサムチャン(Asumption)校入学。7年間学んだ後、1903/4年法務省入省。05年法曹資格を取得。法務省の奨学金を得て07/8年イギリス留学、10/1年イギリスの法曹資格

<sup>30</sup> 黒田[1985]の研究に詳しいように、この一族は呉姓の中国系である。

を取得[Sithammathibet 1976: (1)-(7)]。11年7月判事、13年民事裁判所長、22/3年最高裁判事、26年5月6日最高裁長官代理[RKA(K) 43: 134]、翌年4月1日正式に最高裁長官。28年6月15日法務大臣代理を兼任(RKA(K) 45: 96-7)、同年12月15日最高裁長官を辞して法務大臣に正式に就任[RKA(K) 45: 231-2]。31年11月8日チャオプラヤー・シータムマティベートの欽賜名。

(22)プラヤー・コーマーラクンモンتری(チューン・コーマーラクン・ナ・ナコーン)(1891年8月16日～1961年1月31日)[Komarakunmontri 1961: k-th]

父親ナーイ・ポンパーイは5世王近習。農業大臣チャオプラヤー・ポンラテープ(チャルーム・コーマーラクン・ナ・ナコーン)は叔父にあたる。スクマーライ校とウドムウィッタヤーヨン校で学び、1904/5年から06/7年にかけて大蔵官僚の叔父(チャルーム)のもとで見習い。その後ラーチャウィッタヤーライ校入学。08/9年大蔵省主計局の見習いとなり、翌年事務員となる。10年5月大蔵省奨学金を得てイギリス留学。15年1月には法務省奨学生に切り替えて法学を学ぶようになり、17年イギリスの法曹資格を取得して帰国し、18年1月から法務省検察局に勤務。19年8月大蔵省主計局へ移り、24年1月16日商業登記局長、26年5月22日主計局長、28年4月15日造幣局長、29年10月27日大蔵大臣代理、30年4月1日正式に大蔵大臣。

## 5. 閣僚登用の理由

### 5-1. 能力重視か?

以上に親王と非親王にわけて、1892-1932年の閣僚全員のプロフィールを簡単に調べた。彼らが閣僚に登用された主たる理由はどこにあったのであろうか。想像される理由としては、能力、血筋、人脈(個人的な関係)があろう。何よりもまず指摘されねばならないのは、この時期の閣僚の圧倒的多数は親王であり、それ以外はM.R.W.以下の王族や、父・祖父などにプラヤーあるいはチャオプラヤーを出したことのある貴族であったという事実である。正真正銘の庶民階層出身者はパン・スクム(チャオプラヤー・ヨムマラート)ただ1人である。このことは、家柄や血筋そのものが重要な要因となっていた、あるいはそうした家柄が能力を左右していた、という2つの可能性を示唆しているように思われる。過去に遡って個々の閣僚の能力を判断するのは至難の業である。後世の人間が彼らの能力を判断しようとすれば、学歴が、必ずしも能力と直結するわけではないものの、客観的に比較可能な物差しとしてはもっとも有効であろう。

学歴については、タイ国内における教育制度とりわけ中等以上の教育機関の発展について、まず一言ふれておかねばならないであろう。タイで最初の大学チュラーロンコーン大学が設

置されるのは1917年3月26日のことである。1932年以前には、国内の大学の卒業生で閣僚に就任したものは皆無であった。大学創設以前の国内における最高学府には、陸軍士官学校(1887年創設)、海軍士官学校(1898年4月15日創設)、法律学校(1896年創設)、文官養成所(1899年創設)<sup>31</sup>などがあった。この時期の閣僚の中には陸軍士官学校や法律学校の卒業生が含まれているものの少数派にとどまっており、むしろヨーロッパへの留学経験者の方が多かった。

ダムロン親王は洋学の知識さらには留学経験が重要であったことを繰り返し強調している。たとえば、農務大臣や建設大臣を務めたチャオプラヤー・テーウェートウォンウィワット(M.R.W.ラーン・クンチョーン)の葬式本に寄せた文章の中で親王はこう述べている。「[チャオプラヤー・テーウェートは]私に次のように語ったことがあった。自分は新旧の教育方法の変動期に生まれてきた不幸な人間です。旧式の教育をきちんと受けるには若すぎましたし、学校に入って西洋語を学ぶといったような新しい学問をするには年齢をとりすぎていました。ちょうど中途半端な時期に生まれて、どちらの教育もきちんと受けられませんでした。近習部長になれたというのはできすぎで、これ以上は望むべくもありません」[Damrongrachanuphap 1923: (3)-(4)]。実際には大臣になり、チャオプラヤーにもなったのであるが、これは知性や能力を備えており、どんな職務も懸命に迅速に処理したからであり、このことが「チャオプラヤー・テーウェート自身が語っていた欠点を補う長所となっていたのである。チャオプラヤー・テーウェートは自らと同じ欠点に悩まなくてすむようにと、息子たちが成長すると厳しく教育を受けさせ、うち4名をプラヤーにした」[Ibid.: (5)-(6)]。カラーホーム大臣チャオプラヤー・ボーディントーンデーチャーヌチット(M.R.W.アルン・チャトラクン)の伝記ではこう述べている。「経歴を眺めてみると、チャオプラヤー・ボーディントーンデーチャーヌチットは後世の人間のように深い学識があるわけではなく、外国語を知っているわけでもなく、あるいは諸外国の風習を見聞したわけでもないのに、軍人としてたえず上首尾に勤務し、ついには元帥となり、カラーホーム大臣にまでなった・・・のであるが、これはいったいなぜであろうか。」彼をよく知る友人として思うには、「正直、誠実、勤勉という特質を備えていたからであると思われる」[Damrongrachanuphap 1922b: t]。さらに文部大臣チャオプラヤー・パーサコーラウォン(ポーン・ブンナーク)の伝記ではこう述べている。ポーンは幼くして父親をなくしたため、ブンナーク一族の総領であるチュワンに育てられた。

<sup>31</sup> この公務員養成学校は、1902年4月1日近習学校に改組され、1911年1月1日チュラーロンコーン王文官学校と改称され、ついに1917年に大学へ格上げされる[玉田 1994: 42]。

一族のほぼ同年齢の子どもたちと一緒にプラユーンラウオン寺の僧侶ケーオの学問所で学んだ。「しかし、当時の教育は文字の読み書きだけであり、後にもっと高度な学校が設立される時代のように詳しいことは教えなかった。なぜなら、王家以外の一族の父兄は、学問などというのは事務員のためのものであり、位階の高いものは深く学ぶ必要がないと考えていたからである。このため、チャオプラヤー・パーサコーラウオンと同じ学問所で学んだソムデットチャオプラヤー[チュワン]の子弟の中にはチャオプラヤー・パーサコーラウオンほどの学識を備えるものは出なかった」[Damrongrachanuphap 1922a: s]。

親王はさらにこうも述べている。4世王時代に国王の寵愛を受けたのは西洋語のできるものであった。その数は少なく、王族や貴族では5名だけであった。1人は5世王である。2人目は5世王の副王のウィチャイチャー親王である。3人目はワート・ブンナークであり、チュワン・ブンナークがアメリカの海軍兵士に預けてアメリカに留学させた。4人目はネートであり、シンガポールで英語を学んで帰国した。5人目はポン・ブンナーク(チャオプラヤー・パーサコーラウオン)であり、イギリスに留学して3年間英語を学んだ。4世王時代にヨーロッパに留学したものはこれ以外に3名いる。チャオプラヤー・スラウオンワイヤワットの息子トー・ブンナークとピン・ブンナーク、そしてチャオプラヤー・パーヌウオンの息子スットチャイ・ブンナークである。トーとスットチャイはイギリス、ピンはフランスに留学し、いずれも4世王逝去のときにはまだ留学中であり、5世王時代に帰国して国王に仕えた[Ibid.: 14]。4世王時代にアメリカ人宣教師から英語を学び、5世王時代に政府に出仕したものがこれ以外に6名いる。5世王時代になると、英語教育に一段と力が入られるようになり、近習兵部隊に学校を設置し、英語教師を招いて、5世王の弟たちに学ばせた。5世王時代に大臣に就任することになる王族のほぼ全員はこの学校で英語を学んでいた。それ以外に、M.C.やM.R.W.位の王族を選んでシンガポールへ留学させた。彼らの中からM.C.プリッサダーン(後に親王)、M.C.チェック、そしてM.R.W.テーワヌン・シリウオンの3名を最初のイギリス留学生として派遣した。その後西洋語や洋学の学習は非常に盛んになった[Damrongrachanuphap 1928: 12-6]。

ダムロン親王の記述にもあるように、5世王は1872年に最初の英語学校を開設したのに続いて[Wyatt 1969: 70-8]、1881年には近習兵部隊に学校を設置した。後者は1882年にスワンクラブ御殿に移転され[Ibid.: 104-7]、タイで最初の本格的な中等学校となる。官僚の登竜門となったこのスワンクラブ校設置の目的について、5世王は1885年3月27日に同校生徒のM.C.やM.R.W.に向けてこう語っている。これからは官僚になるものは学問がなければならない。スワンクラブ校を設置したのは、膨大な数にのぼるM.C.やM.R.W.に教育を通じて官職登用の

機会を与えるためである。というのも、貴族と違って、彼らには父兄のもとでの実務研修という官僚養成教育の機会がなく、官職に就任できなかったからである。「余はこれが自分自身のためでもあることを認めなければならない。余には子どもが多く、孫や曾孫の数が多くなるに違いないからだ。…余はこの学校が、余の子孫が従来の王族のように消え去っていくのを阻止する手段にしたいと思っている」[So. Phlainoi 1992: 102-3; Wyatt 1969: 105-6]。5世王は近代的教育を受けさせることにより、王族に官職を提供しようとしたのである<sup>32</sup>。

近代的教育という点で、西洋留学にまさるものはなかった。息子のほぼ全員を留学させた5世王はその留学の狙いについて、1885年に4名の親王を送り出すにあたってこう語り聞かせている。「従来は、王族が公務につくことは貴族の子どもよりも難しかった。なぜなら前世からの宿善の大きなもの、つまり身分の高いものが、…駆け出しの一番下っ端の官職につくことはできないからである。身分にふさわしい高い官職に任命しようとしても、その官職を担うに足りるだけの学識や能力がなければ、かなわない。王族が名声のある公務につくには、自らの学識や勤勉によるほかないのである。それゆえ、自らの祖国や現世の役に立つような仕事をするには、一生懸命勉強しなければならない」[Cunlacomkiao 1973: 20]。留学の費用についてはこう語っている。「学費や生活費はすべて王庫金(ngoen phrakhleng khangthi)のお金つまりお父さんが自由にできるお金を使う。国費は使わない。このお金は銀行に預金しており、前半の5年間は毎年320ポンドずつの合計1,600ポンド、後半の5年間は毎年400ポンドずつの合計2,000ポンドを支出するよう国使[公使]に命じてある。遅くとも10年以内に学業を終えるという予定にしている。…これまでは王族や貴族の息子を留学させるのに国費を使ったのに、[親王については]王庫金のお金を使うことにしたのは、子どもたちの数が多いからである。留学の機会を与え、その費用を捻出するには、他の資金を使うよりも光栄ある遺産を使った方が、身近においておくことができ、紛失してしまう恐れがないのでいい。賢いものも賢くないものも、子どもたち全員に可能な限りの留学の機会を与えるのは、子ども全員に平等に遺産を分割するようなものである。もし国費を使って賢いものを留学させても、帰国してその国費の支出に見合うだけの公務につかなければ、一部の連中から、子どもの数が多すぎて国費から多額の学費を支出しなければならなかったとそしりを受けるだろう。さ

---

<sup>32</sup> この点に関しては、5世王が1880年代から行政組織の再編成に着手して全く新しい官職を次々と作り出したことも重要である。そうした官職への就任には、伝統的な父から子への世襲的な教育ではなく、近代的教育を受けることが必要になったからである。行政制度の改革と近代的教育がセットになって、父親が官職についていなかった王族にも官職登用の道が開かれたのである。



らには、公務につけるだけの賢さを備えたものだけを選ばず、頭の悪いものも留学させるのは無駄遣いだとそしられるだろう。子どもたち全員を公平に留学させたいという願いについてそしりを招くような余地をなくすために、お父さんは子どもたちの留学費用として国費を使わないのである。・・・王庫金も国費の一部であるが、お父さんが個人的に使えるよう配分されたものだ」[Ibid.: 19-20]。

親王たちの留学は長期間に及ぶ本格的なものであった。つまりまず幼少時には王宮に外国人教師を招いて英語を学んだ後、中等教育段階でイギリスに留学してパブリック・スクールに入学した。その後本人や5世王の意向に応じて、イギリスあるいはその他のヨーロッパ諸国の大学や士官学校へ進学したのである。留学期間は10年前後に及んでいる。このように1880年代から相次いで留学した5世王の息子、さらに1860年代から王宮において英米人から英語を学んだ5世王の弟が、それぞれの世代においては近代的教育をもっとも多く享受した人々であったことは間違いない。

しかしながら、モンクット・ファミリーは学歴とりわけ留学によって測られる能力が最高だったから閣僚に就任したのであると即断することは禁物である。閣僚就任のもっとも重要な要件が学歴であったと結論を下すには、親王たちの同世代は学歴で親王に劣っていたのか、親王以外の閣僚も学歴が高かったのか、留学経験が官僚としての立身出世に本当に有利だったのか、などといった点についてさらに調べてみる必要がある。

5世王の親王が留学したのは、5世王自身が認めているように、有能だからではなく、留学資金があったからにすぎないということをまず最初に確認しておきたい。10年間にも及ぶ西洋留学には多額の費用が必要であった。国王が親王の留学に使った王庫金は国王のポケットマネーであり、その出所は政府予算である。1890年の法律により政府歳入の15%が配分されることになっており、1890年代には政府歳出の1割以上をしめていた[玉田 1989: 167]。国王とは違って、貴族ましてや庶民はたとえ子弟を留学させたくても費用を容易には負担しかねた。

ターニーニワット親王は親王向けの国王奨学金についてこう述べている。「5世王陛下は教育費として多額の出費をされた。陛下の親王については全員に留学の費用を給付された。それに加えて陛下の弟君の子どもたちについては、各親王につき1名分ずつを支給された。どの子どもを留学させるかは、父親である親王たちが決めるものとされていた。この留学の期間については制限がなかったものの、担当職員と親王の間で、留学するモムチャーオ(M.C.)たちは真剣に学ばねばならず、西洋の貴族のように王族という地位をひけらかすだけで何も学ばないということであってはならないと合意されていた」[Thaniniwat 1974: 10]。5世王は甥

(M.C.)のみならず、王子についても、遊学ではなく、真剣に学ぶことを期待していたものと思われる。親王の中で勤勉なもの、あるいは優秀なものは5世王の希望通り大学や士官学校を卒業している。しかしながら、5世王の懸念通りに学位の取得には至らないまま帰国している親王も少なくない。中には病弱のために十分に勉強できなかったものもいたであろうと想像されるものの、当人の能力にも問題があったのではないかとの疑いを払拭しきれない。

次に、親王以外で閣僚に就任した22名の学歴をみてみたい。留学経験のあるものは7名おり、うち5名(M.R.W.サターン・サニットウォン、チャルーム・コーマーラクン、サナン・テープハッサディン、チット・ナ・ソクラー、チューン・コーマーラクン)は国王あるいは政府奨学金による留学生であった(残る2名はポーン・ブンナークとクート・ブンナーク)。この7名以外でヨーロッパ勤務経験のあるものが3名(チューン・ブンナーク、パン・スクム、M.R.W.ピア・マーラークン)いる。残る12名は留学も在外勤務も経験していない。この12名のうち法律学校、陸軍士官学校、スワンクラブ校、地図学校、近習兵学校などの近代的な初等あるいは中等教育を受けたものは7名(M.R.W.アルン・チャトラクン、M.R.W.イエーン・イッサラセーナー、セン・ウィラヤシリ、イエーム・ナ・ナコーン、ラオー・クライルーク、ダン・ブンナーク、M.R.W.プム・マーラークン)である。残る5名(M.R.W.クリー・スタット、M.R.W.ラーン・クンチョーン、チューム・セーンチュートー、M.R.W.ロップ・スタット、チューイ・カンラヤーナミット)は僧侶から読み書きを習うという程度の教育を受けたにとどまっていた。しかも上記の在外勤務経験者3名のうち2名はやはりフォーマルな近代的教育を受けたことがなかった。この意味では伝統的な教育しか受けていないものは7名ということになる。留学や在外勤務経験のあるものが10名で全体の半数にも満たないという事実は、留学に代表される高学歴者の絶対数が少なかった、あるいは学歴が閣僚就任の決定的な要件にはなっていなかった、という2つのうちのいずれかを意味していよう。

留学経験者は5世王治世当初にはまだ少なかったものの、年を追って増加していった。ダムロン親王が4世王時代からすでに留学などにより英語ができたとする14名(5世王を除けば13名)のうち閣僚に就任したのはポーン1人だけである。貴族の中でもっとも有力なブンナーク一族は、近代的学問に無関心であったという先のダムロン親王の記述とは裏腹に、王家に先駆けて4世王時代からすでに子弟を欧米に留学させていた。5世王はブンナーク一族を範として息子を留学させたのではないかと思われるほどなのである。しかしながら、ブンナーク一族の留学経験者で閣僚に登用されたのはポーンとクートの2名にとどまっていた。タイ人としてはもっとも早い時期にイギリスへ本格的に留学したトー・ブンナーク(1852年6月25日～1909年

10月8日)の事例を見てみよう。カラーホーム大臣ウォーンの次男で祖父チュワンの寵愛を受けて、アメリカ人女性から英語を学び[Surawongwatthanasak n.d.: 2]、4世王の近習となった。1866年、当時すでに留学していたポーンに預けられてイギリスで英語を学んだ[Ibid.: 3]。5世王が即位して近習兵部隊を設置すると、摂政チュワンは新国王が軍事に執心と判断し、トーを軍の学校へ転校させた。1870年に一度帰国して5世王に謁見し、引き続き軍事学を学ぶ勅許を得て、国費留学生3名を引率してイギリスに戻り、さらに2年5カ月学んだ。この間にイギリス陸軍少尉に任官され、砲兵学を修めた[Ibid.: 4-5]。帰国して1874年砲兵連隊長に任命され、砲兵部隊の整備にあたった[Ibid.: 5]。70年代には中国人労働者の暴動、80年代にはホー族反乱の鎮圧に活躍した[Ibid.: 9-10]。陸軍士官学校司令官、陸軍次官を経て、1899年国王警護連隊(krom ratchaongkharak)が設置されると、初代連隊長に任命された[Ibid.: 13]。1900年にチャオプラヤー・スラウォンワッタナサックの欽賜名を授与された。トーは5世王とほぼ同年齢であり、当時のタイでは英語、軍事知識とも一級であったことは疑いない。確かに高い階級や官職を与えられてはいるものの、親王はおろか、チューム・セーンチュートー、M.R.W.アルン、M.R.W.サターンらの軍人と比べると、その出世は決して早いとはいえない<sup>33</sup>。

もう少し視野を広げて5世王時代の国費集団留学生について見てみよう。1871年から72年にかけて5世王がシンガポールへ留学させた34名のうち氏名が判明する28名[Laothong 1979: 67]、1871年にヨーロッパへ派遣された最初の国費留学生3名、1877年の第2回ヨーロッパ派遣国費留学生10名の中には、後年閣僚に就任したものやチャオプラヤーの位階勲等を授けられたものは皆無である。1891年に派遣された第3回国費留学生団19名についても、大臣はおろか、位階勲等がプラヤーに達したもののすら4名にすぎない。他方、5世王時代に海軍から海外留学に派遣された将校16名についてみると、大将3名、閣僚2名が出ているものの、閣僚と大将のそれぞれ2名は5世王の親王であり、王族以外では大将1人を数えるにすぎない。この海軍留学生の留学年数は親王が2名とも10年を越えているのに対して、それ以外の14名も5～8年と決して短期間ではない[Nairua 1970: n.p.]。それにもかかわらず、出世には大きな違いが見られるので

<sup>33</sup> 彼は、ある人物を窃盗犯と信じて家来に命じてその人物を死に至らしめたという傷害致死の容疑で1892年6月20日に被害者の妻から刑事告発されるという事件を起こしている。彼自身は故意がなかったということで罰金刑となったものの、実行犯は懲役刑となった[Thian 1983b: 19-30]。おそらく当時のタイ社会では、トーのような高官が、この程度の事件で刑事責任を問われることは稀であったと思われる。この事件は出世を妨げた一因というよりも、むしろ出世に限界のある人物だったからこそ穏便ながら責任を問われたのであると理解するべきであろう。そして、彼の栄達を妨げた最大の理由は、5世王が目の敵にしたブンナーケー族の一員という点にあったことには疑いの余地がない[Battye 1974: 278参照]。

ある。

これは留学経験が官界での立身出世に直結しなかったことを示唆しているのではなかろうか。枚挙にいとまのない事例の中から興味深い2名をあげておこう。1人はプレーン・ウェーパーラ(クンルワンプラヤー・クライシー)(1862年10月27日～1901年4月29日)である。父親は4世王の近習、祖父はチャオプラヤー・ポンラテープ(チム)という家柄である。15歳でピチット親王のもとで法律や行政実務を学ぶようになり、1878年から3年間英語も学んだ。81年に裁判所の事務員として働くようになり、82年国王奨学金を得てイギリスに留学した。88年7月にはタイ人として初めてイギリスの法曹資格を取得し、5世王から褒美を与えられた。88年9月に帰国して外務省に入省し、92年には新設の法務省に移り、93年に検察局が設置されるとその初代局長に就任した。ラートブリー親王が法務大臣に就任すると、97年3月21日刑事裁判所長に転勤となり、在任中の1901年に没した[Thian 1983a: (1)-(5)]<sup>34</sup>。彼の部下でもあったチャオプラヤー・マヒトーン(ラオー・クライルーク)の伝記にはこう記されている。「国王陛下以下誰もが彼[プレーン]に畏敬の念を抱いていた。伝えられるところによれば、クンルワンプラヤー・クライシー[プレーン]が陛下に謁見するときには、5世王陛下自身いつも特別な敬意を払わなければならなかった」[Wisut 1959: 57-8]。これは5世王自身が彼の能力を高く評価していた表れに他ならない。彼が刑事裁判所長に転じた後、検察局はイギリス国籍のスリランカ人を長に迎え、しかも部(krom chan caokrom)へ格下げされたというのも、彼のすぐれた能力の証拠の1つとして指摘できよう。にもかかわらず、彼が活躍した時期の法務大臣は3名とも親王であった。サワット親王とラートブリー親王はイギリスに留学していたものの、前者は法律学の学位や法曹資格を取得していたわけではなく、後者はヨーロッパの法律の知識しかなかった。他方、ピチット親王は国内での法律実務経験を有するにとどまっていた。能力の点では、タイと西洋の両方の法律に通じたプレーンの方が勝っていたことは想像に難くない。言い換えるならば、能力では王族を明らかに凌いでいたと思われるにもかかわらず、出世では親王に比肩しえなかったのである。

もう1人はM.R.W.サターン・サニットウォン(チャオプラヤー・ウォンサーヌブラパット)である。5世王の親王に先駆けてデンマークに留学して、1893年に帰国し戦略局(陸軍)に勤務した。エリートコースを歩み、1904年には陸軍参謀長になっている。しかし、1909年5月13日に

---

<sup>34</sup> 当時タイで一般の知識人であった彼の活動や思想の一端については村嶋の研究[1987: 124]を参照されたい。

はこのポストを5世王の親王ピッサヌロークに譲って、農務副大臣に転出しなければならなかった。大臣就任とはいえ全く畑違いであり、尋常な人事異動ではなかった。それは、5月11日に5世王がサターンに親書を送ってこう伝えていることに示されている。「クラーン(サターンの通称)、余に何か言いたいことがあれば、こっそりと伝えてくれ。明日の夕暮れ時にきてくれ。パーティーのある日だから誰もいないだろう。中に呼び寄せて話をする。誰にも知られないようにしろよ」[Wonsanupraphat 1941: 20]。1906年にロシア留学から帰国し、陸軍士官学校司令官に就任していたピッサヌローク親王は当時弱冠26歳であった。5世王はこの親王のためにサターンを追い出したのであり、それゆえ心中の不満を察してこうした親書を送ったのである。

## 5-2. モンクット・ファミリー重視

以上のことから留学経験が閣僚就任の決定的な要因とはなっていないことが分かり、さらに5世王の親王に参謀長ポストを譲らされたM.R.W.サターンの事例は、人事異動においては能力にも増して親王という国王との血縁関係が優先されたことを示唆している。既に述べたように、モンクット・ファミリーが多数の大臣を出した理由としては、学歴・能力の他に、2つの要因を想定することが可能であった。①ファミリーの構成員の数が多く、その一部だけが登用された、②ファミリーのメンバーであるがゆえに登用された、という2つである。まず、構成員の数を再確認しておこう。4世王の親王のうち1892年以後まで存命し、それゆえ閣僚就任の可能性があったものは26名である(5世王は除外している)。他方、5世王の親王については、寿命が20年を越えたものが17名(6世王と7世王を除外)であった。そのうち閣僚になったものは4世王の親王は16名(1892年以前就任の1名を含む)、5世王の親王は10名であった。いずれも過半数を超えており、多数のうち一部の優秀なもののみが登用されたとはとても言いがたいことは明白であろう。さらに、閣僚にはならなかったものの、次官や局長に任命されたものの数をみると4世王の親王は次官1名、局長3名、州総督1名、高等裁判所長1名である。5世王の親王は局長4名、陸軍参謀長1名となっている。こうした局長クラスのポストまで含めて考えるならば、4世王や5世王の親王はほぼ全員が重要なポストに登用されたということが判明するのである。有能なものだけが登用されたと言いうるのは、ファミリーの中でも国王から見れば親王よりも少し距離が大きくなるM.C.クラスのもの、つまり4世王の孫・5世王の甥についてのみである。従って、ファミリーのメンバーが多く、その中で有能なものだけが登用されたという仮説は否定されざるをえない。

それでは、ファミリーのメンバーであることが重要だったのだろうか。この点を調べる手がかりとして、大臣への就任年齢を比較してみよう。4世王の親王の閣僚就任時の年齢は1892年4月1日以後について見た場合には、26歳1名、28歳1名、29歳2名、31歳3名、32歳1名、34歳1名、35歳2名、36歳1名、37歳1名、38歳1名、42歳1名である。実際にはこの中には1892年以前から閣僚に就任していたものも数名おり、さらに王弟で最初に大臣に就任したプーターレート親王は就任時20歳にすぎなかった。5世王の親王の閣僚就任時の年齢は22歳2名、29歳1名、33歳1名、34歳2名、41歳2名、42歳1名、43歳1名である。また、M.C.のモンクット・ファミリー6名のうち生没年不詳の1名を除く5名の閣僚就任年齢は34歳1名、40歳2名、46歳1名、49歳1名である。他方、モンクット・ファミリー以外の22名の閣僚就任年齢は35歳1名、38歳2名、40歳1名、43歳5名、44歳2名、45歳1名、46歳2名、50歳1名、51歳1名、52歳1名、54歳2名、59歳2名、63歳1名である。平均年齢を調べてみると、4世王の親王(プーターレート親王を除く)15名は32.9歳、5世王の親王10名は34.1歳、M.C.5名は41.8歳、非親王22名は47.0歳である。5世王の弟と息子25名の平均は33.4歳であり、それにM.C.を加えたモンクット・ファミリー全体の平均では34.8歳である。これらの数字からモンクット・ファミリーの親王たちは非親王よりも閣僚就任年齢が平均で12歳も若かったことが分かる。この大きな差は能力よりもモンクット・ファミリーのメンバーであるかどうかによって由来していたと考えるのが自然であろう。

たとえば、20歳代で実務経験の乏しい親王が大臣として十分な能力を備えていたとは到底思われない。また、およそプロフェッショナリズムとは相反する典型的な事例はナリット親王であろう。親王は1892年4月から93年3月まで建設大臣、1893年3月から94年12月まで大蔵大臣、94年12月から97年3月までカラーホーム大臣、97年3月から1900年4月まで陸軍総司令官、1900年4月から9月までカラーホーム大臣、1900年9月から1905年11月まで建設大臣、1907年6月から10年まで宮内大臣を務めた。1892年4月1日にはまだ28歳であった親王が畑違いの各省の職務に精通していたとは到底思われない。さらに頻繁な異動は習熟の機会すら奪うものであったと思われる。親王が次々といろいろな省の大臣に任命されたのは、チャオファー位の王弟に他ならないからであろう。同様な適性を無視した閣僚人事として有名なのは、1892年4月の文部大臣と農商務大臣である。農商務大臣には農業大臣ポーン・ブンナークが就任する予定になっていた。しかし、5世王即位当初からの忠臣である陸軍総司令官チューム・セーンチュートーが予算問題で抗議辞職したため、農商務大臣ポストが受け皿として提供されることになり、その余波でポーンは文部大臣となった[Wyatt 1969: 96-7]。結果として、両省とも素人の大臣を戴くことになった。こうした適性を無視した人事は親王の場合にも行われていた

ものと想像される。

この点について、5世王時代の事情に詳しいプリッサダーン親王が興味深いメモを残している<sup>35</sup>。彼によると、5世王が改革・近代化に熱意を燃やしていたのは、5世王即位当初に大きな権力を握っていたチュワン・ブンナーク(摂政1868-73年)や副王ウィチャイチャー<sup>36</sup>から権力を奪って王権を揺るぎないものとする1880年代半ばまでであり、それ以後は改革の意欲を大きく低下させて単なる独裁者に成り下がり、国家よりも家族の利益を優先するようになった[Pritsdang 1892: 70, 77-9]。この見解は1886年に5世王の弟がイギリスの外交官アーネスト・サトーに語った「国王はかつてのような改革の意欲を示していない」という言葉に支持されている[Brailey 1989: 21]。ブレイリーの表現を借りるなら、「[5世王]治世の最初の25年間の最大の成果と思われるのは・・・国王への権威の集中であった[Ibid.: 36-7]。しかも5世王はそうした「専制的権威を明らかに生来の権利と考えていた」のである[Ibid.: 17]。

国王がこのように絶対的な権威を獲得し、改革への熱意を失うとそれは閣僚のあり方にも反映されることになった。閣僚の大部分を占める王弟は「口論ばかりしており、さる筋によると、摂政のあり方をめぐって喧嘩をしているくせに、病身で猜疑心の強い国王の前に出てその許可を求めることは怖くてできなかった」という[Ibid.: 37]。当時ワチルンヒット皇太子の家庭教師を解雇されたばかりのイギリス人は、5世王治世初期に政府を掌握していた貴族たちの「大部分は知性や人格にすぐれ、とても公平無私であった」のに対して、1890年代前半の閣僚の大半は「無能できわめて嫉妬深い」と述べている[Morant 1894: 37, 94]。

プリッサダーンによれば、「1890年代初めの閣僚は洋学を学んでおり英語が読めるという優越感と、国王の弟あるいは寵臣であるという安心感のゆえにとっても傲慢であった」[Pritsdang 1892: 52]。王弟の中でもとりわけ重用されたのは実弟チャートゥロンやパーヌパンであり、王妃の兄テーワウォンであった。彼らが1880年代から政府の中でもっとも重要な大蔵省、陸軍、外務省の大臣にそれぞれ任命されていたというのはきわめて象徴的である。その王弟でさえ国王の不興を買うことがあり、とにかく重要なのは、国王自身あるいは国王

<sup>35</sup> プリッサダーンは1852年2月23日生まれと5世王とほぼ同年齢のM.C.であり、1871年に5世王がヨーロッパへ派遣した最初の国費留学生3名のうちの1名である。イギリスのノーク大学工学部を卒業し、76年に帰国した。翌年再びイギリスに渡って土木会社で3年間の研修をした。その優れた能力のゆえに親王の位を授与された。しかし、85年に5世王に国政改革の提言を行って逆鱗に触れた。86年に帰国して郵便・電報局長に任命されるものの、90年には失踪して、96年から1911年までスリランカで出家しながら亡命生活を送った[Pritsdang 1970: 44-81]。

<sup>36</sup> ウィチャイチャー<sup>36</sup>親王(1838年9月6日～1885年)は4世王の副王(4世王の実弟)の息子であり、5世王即位時に摂政チュワンが副王に指名した。

お気に入りの側室の機嫌をとることであった[Ibid.: 57-63, 75-7]。たとえば、1885年の国政改革提言に加わって5世王の不興を買ったナレート親王は、チャオブラヤー河沿いの一等地を国王の幼児のために調達することにより寵愛を回復したという[Ibid.: 62-3]。

それに加えて興味深いことに、王子と並ぶ王位継承権者である5世王の実弟が次第に冷ややかな扱いを受けるようになり[Ibid.: 63-4参照]、また王子が次第に成長してくると1905年以後王弟に代えて閣僚に任命するようになった[Brailey 1989: 9-10]。王弟よりも王子の方が血縁が一層濃いからである。こうしたことは、5世王による閣僚人事がきわめてネポティズムの色合いの濃いものであったことを示しているといえよう<sup>37</sup>。従って、5世王が弟や息子を次々と大臣に任命したのは、彼らが有能であるからというよりも、非王族よりも忠誠心の点で信頼のおけるファミリーの一員であり、その登用が王権の強化につながるからであったと結論を下さざるをえないであろう。

王権強化への意欲を裏付けるもう1つの顕著な事例は近親結婚である。ラッタナコーシン朝では、国王が王族を正室あるいは側室に迎えた事例は2世王に始まる。1人は皇后となり、後の4世王を産むブンロートである。彼女は2世王の叔母、つまり父1世王の姉ケーオの娘であった。彼女が妃になったのは1800～1年頃のことであったと推定されている[Thamrongsak 1972: 93]<sup>38</sup>。ブンロートの母親である2世王の叔母はこれに激怒したと伝えられている。チャクリー王朝は1782年に始まるにすぎず、その血筋はアユッタヤー時代の貴族の家柄とはいえ、王族ではなかった。このエピソードは従兄弟姉妹間の結婚があまり普通ではなかったことを示唆しているのだろう。いずれにしても、ブンロートは2世王の皇后となり、その息子は後に4世王とその副王に就任することになる。2世王は、さらに、異母妹1名も側室に迎えている。ヴィエンチャン王の王女で1世王の側室となったトーンスックの娘チャオファー・クントンティッパヤワディーである。

<sup>37</sup> ワイヤットはファミリーの登用がネポティズムではあっても、次のような理由で自然なことであったと説明している。①官職の世襲という伝統があった。②王朝創設以来の王族や貴族の数が一夫多妻制のため増加しており、官職が不足していた。王族用の官職は数が少なく、魅力も乏しかった。③王弟は近代的な教育を受けており「著しく有能」であった。④王弟は気心が知れていた。⑤王族以外には改革意欲に燃える革新的な貴族が少なかった[Wyatt 1969: 87-9]。しかしながら、このうち①と②は理由にならない。王族は重要な官職とりわけ大臣には就任しないというのが伝統であり、ファミリー登用は伝統に反していたからである。③については、ファミリーが無能ではなかったとしても、格別有能であったかどうかとなると、本稿で考察したように、いささか疑問といわざるをえない。⑤の改革意欲については、王権強化を除けば、ファミリーが格別高い改革意欲を持っていたという証拠は存在しない。従って、十分な説得力があるのは④だけということになる。

<sup>38</sup> 時期を特定できないのは、国王が結婚式を行うようになるのは6世王以後のことだからである。



次の事例は4世王である。彼の最初の皇后M.C.ソーマナットは異母兄3世王の孫、つまり甥の娘である。彼女が若くして亡くなると、次に皇后になったのはやはり3世王の孫M.C.ラムプーイ・シリウォンであった。さらに、その異母妹M.C.パンナラーイ・シリウォンも準正妻になっている。4世王は3世王の孫娘を合計3名妃に迎えていたことになる<sup>39</sup>。ちなみにこの2名の父親シリウォン親王の実妹ラモーム内親王は後の5世王の乳母である[Thamrongsak 1972: 173]。

5世王は1878年4月27日にラッタナコーシン朝の王族を説明する際に、「内親王が夫君を持つとすれば、兄弟同士で位階が同等以上でなければならない。このため、内親王は母親が皇后であると否とを問わず、夫君を持つことはほとんどないというのが慣習となってきた。もし夫君を持つとすれば、国王の正妻になるしかなかった」[Cunlacomklaocaoyuhua 1994: 13]と書き記している。彼はこう書いているときすでに4名の内親王つまり異母妹を妃に迎えていた。この4名のうち1名はすでに第1子を産んでおり、残る3名も懐妊中であった。この3名は4世王とスッチャリットクン家出身の側室ピアムとの間に生まれた姉妹である。長女スナンターは1880年に船の転覆で死亡した。姉の死を受けて、次女サワーンワッタナーが1880年に正室となり、5世王との間に合計8名の子どもをなした。うち男子は4名いた。サオワパーポーシーは5世王との間に14名もの子をなした。すでに出産していた残る1名は、4世王の第52子スクマーンマーラシー内親王である<sup>40</sup>。彼女は5世王との間に2名の子どもをもうけた。

異母妹を娶るといのは、チャクリー王家においても決して普通のことではなく、ましてや1870年代にタイにたくさん居住していた西洋人の目には異様に映ったに違いない。にもかかわらず、5世王があえて妹を4名も妃に迎えた理由はどこにあったのか<sup>41</sup>。この謎を解く手がかりは、5世王の正室・側室合計76名の中にブンナーク家の娘が16名もおりながら、そのうち12名には子どもがなく(cf.76名中子どもがないのはちょうど半数の38名)、男子を残したのは

<sup>39</sup> 4世王は即位の年齢が高く、このため子孫を残せる妹を娶る可能性はきわめて低かった。もし即位がもっと早ければ、4世王も妹を娶っていた可能性があったかも知れない。仮にそうであるとすれば、5世王の近親結婚は父4世王の影響を受けていたという可能性もある。

<sup>40</sup> 5世王はこれらの異母妹の他に、叔父に当たる3世王の孫娘M.C.サーイ、M.C.ピウ、M.C.ブアの3姉妹(ラダーワン家)を妃に迎えている。サーイは1男3女、ピウとブアはそれぞれ1女をなした。

<sup>41</sup> なお、モンクット・ファミリーにおいて従兄弟姉妹間の結婚の事例はきわめて多い。6世王の側室1名、7世王の正室は従姉妹である。この他にたとえば、5世王の弟デーワウォン親王の子どものうち娘4名が従兄弟に嫁ぎ、息子6名が従姉妹を配偶者に迎えている。同じく5世王の弟ダムロン親王の子どもたちは、娘6名が従兄弟、息子1名が従姉妹を娶っている。5世王の王子では、ボーリパット親王は従姉妹1名を娶っており、子どもたちの配偶者には従兄弟姉妹同士が1名、親王自身の従兄弟姉妹が3名いる[Sirirattanabutsabong 1981: 94-95]。しかし、筆者が調べた限りでは、異母妹を娶った例は5世王以外にはM.C.ボーウォーラデート [Butri & Phuchong 1992: 26]しか見出せなかった。

ただ1名に過ぎなかったという事実にありそうである。

一般的には、妃への国王の寵愛度は子どもの数で測ることが可能である(寵愛を受けていてもたまたま子どもができない場合を除外すれば、正比例すると述べても過言ではないだろう)。ブンナークの女性に子どもが少ないのは、それだけ国王から遠ざけられていたことを意味している。唯一男児(アーパーコーン親王とスリヨン親王)をもうけたモート・ブンナーク(チュワンの孫)でさえ、子どもの数は女兒1名とあわせてわずか3名にすぎない。これはサワーンワッタナーの8名、サオワパーの14名と比べるとはるかに少ない。モートという唯一の例外はあるにしても、5世王はブンナーク家出身者との間に子どもをもうけるのを避けていたと考えるのが妥当であろう。

表 5世王が1886年以前に4異母妹との間にもうけた子ども

スナンター	サワーンワッタナー	サオワパーポーンシー	スクマーンマーラシー
			1877年9月14日女
	1878年6月27日男		
1878年8月12日女			
		1878年12月19日女	
	1879年9月4日男		
		1880年1月31日流産	
		1881年1月1日男	
	1881年4月21日女		
			1881年6月29日男
		1882年2月4日男	
	1882年6月9日男		
		1883年3月3日男	
	1884年4月16日女		
		1885年11月27日男	

注 二重線で囲ったものは1886年に存命の男子

出所 Thamrongsak[1972: 307-23]より作成

次に、4名の異母妹のうち、1877年9月14日に最初に子どもを産んだのはスクマーンマーラシーである。これは彼女が異母妹のうちで最初に妃になったことを推定させる。親王の序列は通常母親の序列で決まるため、彼女が男子を産むことになれば、彼が自ずと王位継承の最有力者ということになる。ところが、彼女は父親こそ4世王であっても、母親サムリーはタッ

ト・ブンナークの娘であり、チュワンの従姉妹である。ブンナーク一族から権力を奪い取ろうとする5世王にとってこれは甚だ不都合であった。5世王はそこで別の異母妹3名を立て続けに娶ったのであろう。この4名のうち最初の男子ワチルンヒットを1878年6月27日に産んだのはサワーンワッタナーである。続いて、サオワパーが1881年1月1日に2番目の男子ワチラーウットを産んだ。スクマーンの第2子で唯一の男子ボーリパットが生まれるのは長子出産から4年近くも後の1881年6月29日のことであった。5世王が1886年にタイの歴史上初めて皇太子を任命したときには、妹たちには7名の男児がおり(表参照)、このうちもっとも年長のワチルンヒットを選んだ。ワチルンヒットが1895年1月5日に死亡すると、後任の皇太子に選ばれたのは次兄のワチラーウット(後の6世王)であった。これにより、王位の継承ラインはブンナーク勢力の手から離れることになった。

つまり、異母妹をせっせと娶ったのは、王権がブンナークなどの貴族へと拡散するのを防止するためであったと想像される。しかもそうした近親結婚が異例なことであったとすれば、王権をチャクリー王家にとどめようとする意欲にはまったく並々ならぬものがあつたと言わなければならない。それゆえ、5世王が弟や息子を優先的に大臣に登用したのはごく自然なことだったのである。

こうした血縁関係は国王との距離という点でもっとも近いものである。では、親王以外の閣僚の場合にはどうであろうか。親王以外の閣僚22名は国王と何か特別な関係を持っていたのであろうか。血縁関係でいえば7名がM.R.W.、1名がナ・アユッタヤーで王族の端くれである。また、モンクット・ファミリーとの関係では、娘に5世王の側室を出したものが1名(ポーン・ブンナーク)、姉妹に5世王の側室を出したものが3名(チューム・セーンチュートー、M.R.W.サターン・サニットウォン、チュエイ・カンラヤーナミット)、従姉妹に5世王側室を出したものの1名(セン・ウィラヤシリ)、妻が5世王側室と姉妹のものが2名(チューム・セーンチュートー、チャルーム・コーマーラクン)いることが分かる。また、血縁や姻戚関係以外に、5世王から親戚扱いされていたものの2名(M.R.W.クリー、M.R.W.ロップのスタット兄弟)、4世王や5世王が元服式に臨席したものの2名(M.R.W.ラーン・クンチョーン、M.R.W.ピア・マーラークン)、5世王の親王の家庭教師2名(パン・スクム、M.R.W.ピア・マーラークン)といった具合になる。

もっと詳しく、5世王時代後半(1892～1910年)に閣僚に任命されたものについて見るならば、非親王はパン・スクム、クート・ブンナーク、チューム・セーンチュートー、M.R.W.ラーン・クンチョーン、M.R.W.サターン・サニットウォン、ポーン・ブンナーク、M.R.W.ク

リー・スタット、チューン・ブンナークの8名である。その大半は治世初期から5世王を支持し信頼を得ていた人物であった。チューム、ラーン、ポーン、クリーは側近であり、チューンは1870年代半ばから南部や北部で総督、サターンは1870年代に留学した人物である。パンは1880年代半ばから5世王の親王の家庭教師になった。5世王が後年彼らを閣僚に任命するのは、若い頃から彼らを熟知し信頼していたからに他ならないであろう。彼らを任命することは王権の強化に資することはあっても、弱体化につながることはなかった。こうした範疇から外れるのは、フランス公使在任中の功績により抜擢されたクートのみである<sup>42</sup>。

しかしながら、王権の強化・維持のための閣僚人選は、5世王時代の特色であって、6世王以後には当てはまらないのではないかという疑問もあろう。1892年から1932年にかけての時期の各年度初め(4月1日)における閣僚中の親王と非親王の人数の移り変わりを調べると、全体としては親王以外の大臣の割合が増える傾向がみられた(図参照)。その一因はモンクット・ファミリーの親王の人数の減少にある。4世王と5世王の親王は年々死亡によって頭数が減少していったからである。6世王即位時には4世王の親王は21名、5世王の親王は17名(6世王を除く)が存命であったものの、7世王即位時になると4世王の親王は7名、5世王の親王はわずか7名(7世王を除く)が存命していたにすぎない。さらに6世王と7世王にはともに男子がなかった。6世王治世以後親王に格上げされるM.C.が増えるのは、この不足を補うためであった。

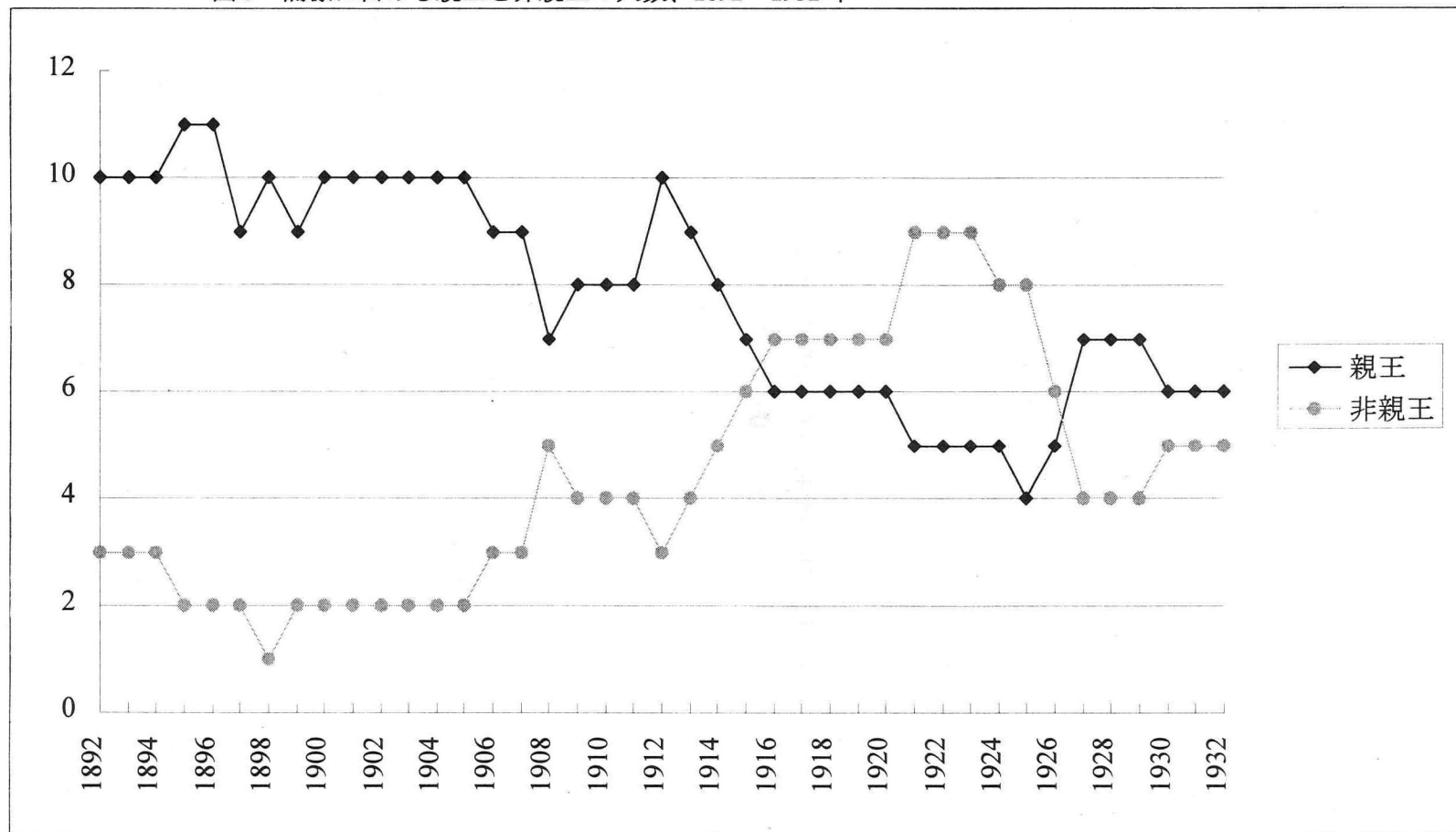
この点を考慮に入れてもなお、6世王時代の非親王の大臣の増加には顕著なものがあつた。1916年には親王と非親王の割合が逆転し、1920年には閣僚14名中親王は5名、非親王が9名となる。このように非親王の閣僚が増えたのは、政治権力がモンクット・ファミリーから外へと拡散した、つまり王権が弱体化したことを意味するのであろうか。

6世王は1912年7月7日に、宮内事務次官の名称を変更する布告でこう述べている。「宮内省は宮廷内部の職務をこなすという点で、他の省庁とは異なっている。文字通り国王陛下の職務を担当しているのであり、国家(phaendin)行政と呼ばれる職務を担当しているわけではない。・・・この宮内省に次官をおくというのは適切ではない。というのも今日では次官というのは、国家行政の一部を担当する高級官僚と理解されるのが普通だからである。ましてや英語で *undersecretary of state* などと訳すならば、次官は国事を担当する国家の官僚以外の何者でもなくなり、宮廷官僚の呼び名としてはますます不都合である。諸外国を見回してみても、

---

<sup>42</sup> 彼は鉄道建設費用の調達交渉を上首尾にまとめ上げて帰国した。この手柄により、5世王から40,000バーツの報奨金を下賜され、建設大臣に任命された[Brown 1992: 85-8]。

図3 閣僚に占める親王と非親王の人数、1892～1932年



宮内省に次官をおいているところはない。それゆえ宮内次官という官職を廃止し、宮内省で大臣に次ぐ高官のポストを新設することとし、その名称を宮廷長(samuhaphraratchamonthon)とする」[PKPS R. S. 130: 93-4]。宮内省や宮廷は国家の行政組織とは別個独立な私的なものであり、自由に管理すると宣言しているのである。彼は以後近習局を中心として宮廷官僚組織を異常に肥大化させてゆくことになる<sup>43</sup>。6世王が宮廷だけに閉じこもり、権力には無頓着であったかといえば決してそうではない。1915年11月10日の管区長官(upperat phak)と州総督(samuhathesaphiban)の階級に関する布告で、6世王は管区長官と州総督は国王が選り任命する官職であるから、「どちらも国王直属の官職であるべきである。ところが一般には管区長官も州総督も内務省官僚であり、内務大臣直属であると誤解されている。国王の意思に反するこの誤解を解くために、管区長官と州総督の階級を」宮廷官僚流に改めると述べている[PKPS 28: 331]<sup>44</sup>。これは地方行政に対する監督権を内務大臣から剥奪して6世王自らが直接掌握したことに伴う措置であった。全国の地方行政を国王の直轄下においたわけであり、明らかに王権を強化する措置であった。

このように国王への権力集中に関心を抱く6世王がなぜ非王族の官僚を多く閣僚に登用したのであろうか。5世王の場合には親王を閣僚に登用しても、彼らが弟や息子であったため十分に統制が可能であった。しかし、6世王にとっては叔父はもちろん異母兄弟にすら彼よりも年長者が多く、そうした年長の親王たちを閣僚に登用しては自由に統治が行いにくかった<sup>45</sup>。

<sup>43</sup> 近習局は内部に複数の局を抱える巨大な組織に膨れ上がってゆく。この関連では、1911年5月2日に陸軍省(カラーホーム省)から独立した宮内省所轄の宮廷警護連隊を設置したことも忘れてはならない[RKA 30: 2510]。6世王は自分の言いなりになる軍隊を望んだのである。有名な疑似軍隊組織スア・パーも同様な文脈で理解されるべきであり、それは国王の私設応援団であった。こうした国王自身のための組織の拡充は国家財政に大きな負担を強いるものであった。

<sup>44</sup> 当時の行政官僚は軍人と同様な階級を授与されていた。尉官クラスはローンアムマート(rong ammat)、佐官クラスはアムマート(ammatt)、将官クラスはマハーアムマート(maha ammat)である(1912年7月1日規定)。行政官僚のうち近習局官僚と宮廷官僚はそれぞれ別個の階級が規定されていた。宮廷官僚の場合には佐官に相当するのがサウェーク(sawek)、将官がマハーサウェーク(maha sawek)であった。各クラスとも軍人の大・中・少と同様に3つに分かれていた。

<sup>45</sup> ターニーニワット親王は5世王と6世王を比較して次のように叙述している。5世王は「ただ単に国王にとどまらず、宰相つまり首相の任務をも果たされていた。なぜなら、大臣会議の議長を務め、大臣に政策の指針を与え、さらにその指針通りに政策が執行されるよう監督もされていたからである。治世が変わると、国王の性格に応じて、国王と大臣の関係も変化した。」6世王は5世王とは「随分と性格が異なっていた。5世王治世の中期と後期には、大臣の大半は陛下が低い官職から育て上げてこられたものたちであった。陛下は大臣たちを熟知しておられ、文字通り“弟子”と呼ぶにふさわしく自ら訓練してこられた。6世王治世の初期には、大臣のほぼ全員が陛下より一世代ほど年齢が上であった。それゆえ、周知のように礼儀正しい穏和な性格の陛下は大臣たちに遠慮された。国王と大臣の関係が5世王時代とは異なった大きな理由はここにあった。その結果、陛下は行政を大臣に5世王時代よりも委ねられるこ

それゆえ国王の言いなりになりやすい親王以外のものを閣僚に登用したにすぎない。6世王時代には留学経験者が5世王時代よりもずっと増えていたにもかかわらず、6世王が自ら任命した閣僚中非親王はセン・ウィラヤシリ、チューイ・カンラヤーナミット、パン・スクム、M.R.W. プム・マーラークン、ラオー・クライルーク、チャルム・コーマーラクン、M.R.W. ピア・マーラークン、サナン・テープハッサディン、M.R.W. ロップ・スタット、M.R.W. アルン・チャトラクン、イェーム・ナ・ナコーンの12名であり、このうち留学経験をもつのはサナンとチャルムの2名だけにとどまっていた。これは6世王治世においても、閣僚人事が必ずしも行政能力に基づいて行われたわけではないことを意味している。6世王が、総じて、媚びへつらう追従者を重用したことは有名である。当時の宮中をよく知るターニーニワット親王は、7世王「プラチャーティボック親王は即位式を終えられると、大臣を一新する準備に取りかかれた。大臣の多くが辞任したいと漏らしており、[新国王陛下自身が]一部の大臣については罷免したいと考えておられたからである」と記している [Thaniniwat 1974: 86]。実際のところ、6世王の死亡時に在職していた7名の非親王閣僚のうち5名はその後1年以内に辞職したのである。

また、6世王の海軍大臣人事は専門性を軽視したものであったことを示している。彼の治世に任命された海軍大臣は4名とも留学経験のある5世王の親王である。1910年12月に任命された初代の大臣はドイツの陸軍で学んだ異母弟ナコーンサワン親王であった。ナコーンサワン親王よりも少し年長で、イギリスの海軍で学んでいたチュムポーン親王は副大臣に任命されたにすぎず、翌年4月には辞職に追い込まれた。チュムポーン親王は1922年10月にやっと海軍大臣になるものの、翌年5月には死亡した。後任の大臣には、1883年12月生まれでイギリスの海軍に学んでいたシンハウィクロム親王を差し置いて、1889年5月生まれでイギリスの陸軍に学び第1歩兵師団長となっていた6世王の実弟ナコーンラーチャシーマー親王が任命された。5世王の親王中、海軍で学んだのはチュムポーンとシンハウィクロムの両親王の2名だけであり、海軍大臣としては彼らをもっとも適任であったはずである。しかし、実際には、海軍に関しては素人であり、年齢も下の別の親王が先に任命されたのであった。

5世王と6世王の閣僚人事を鳥瞰的に比較するならば、5世王はまず貴族に対抗するために王弟を使い、続いて王弟よりも言いなりになる王子を使い、6世王はさらに言いなりになる非親

---

とが多かった。つまり、政策の指針はお示しになるものの、その遂行の監督は5世王のように厳格にはされなかった」 [Thaniniwat 1939: (114)-(115)]。

王を登用したということである。それは7世王時代になると一変する。7世王は父や兄のように独裁的な支配者になろうという意欲がなく、絶対王制を守るために親王の中からもっとも有能なものを閣僚や最高顧問に登用したのであった。とりわけ大臣よりも大きな権力を付与された最高顧問会議は全員が親王であった。これは国王個人の権力の弱体化を意味するものの、モンクット・ファミリー全体の権力を強化するものであった。5世王によって確立され、6世王や7世王へと継承された親王支配体制においては、国王が占める地位は治世によって差異が見られ、さらに親王同士の間一枚岩の結束があったわけでもない。しかしながら、モンクット・ファミリーは、1880年代から1932年まで一貫して、血縁という越えがたい壁によって防御された権力集団に他ならなかったのである。

## 5. 親王支配体制と近代国家形成

以上に見たような王権強化に向けた努力は5世王時代に突然始まったわけではなかったようである。歴史学者ニティによると、4世王時代に王制の神聖化や王族の特別階級化が図られるようになっていた。4世王は歴史上初めて私費と公費を区別し、制度としての王制の重要性を高めた。国王に接するときの礼儀作法をやたらと詳しく規定し、今日使われるような複雑な王語(国王に話しかけるときに用いる特別な言葉)を発明し、治世何日目というある種の「元号」を使わせるようにし、国王の身体的特徴を形容することを禁止するなどして王制の神聖化を図った。同時に、モムチャーオ(M.C.)以上を王族と定めて王族が非王族と結婚することを禁止するなどして王族に独自の階級意識を植えつけた。そこには、王族にはノーブレス・オブリージとして統治を担当する責務があるという意識も含まれていた[Nithi 1980: 69-71]。ニティは別の著作でもこう述べている。ラッタナコーシン朝の初期には王権は有力貴族の間に埋没していた。しかし、4世王の時代になると西洋との接触により変化が生まれた。まず支配階層は「英語の読み書きができてこそ、国王や大臣になるにふさわしいと考えるようになった。」同時に「王族の間に、王族と庶民[王族以外のもの]は違うのであるという意識が芽生えてきた。」その際にアユッタヤー時代風の神王思想への回帰には無理があったため、戦士・防衛者としての国王という考え方を強調するようになった。王族の自己イメージが権利の重視から義務の重視へと変化したのであり、王族はそうした義務を負っているからこそ統治を担当するのであると説明されるようになった。「それと並んで、最高の知識であるとお墨付きを与えられた西洋からの知識の独占者となったことにより、“出自”が権力保持の重要な条件となった。王制に国家の行政や政治における絶対的な権力を獲得させ、中央貴族、地



方貴族、属国支配者、僧侶組織が古代から享受してきた権力を打破することを目的とした[5世王による]統治改革は、“出自”重視の考え方をなおいっそう重要で顕著なものにした。仏暦25世紀の前半[1857-1916年]に、タイは歴史上初めてその表現の完全な意味において絶対君主制の時代へと突入したのである」[Nithi 1982: 202-3]([ ]内は引用者による補足、下線は引用者がつけた)。ニティがここでいみじくも指摘しているように、本稿で考察の対象とした王権の強化は、改革の手段ではなく、目的しかも最大の目的であったと考えられるべきであろう。

モンクット・ファミリーへの政治権力の集中を企業経営にたとえて表現するならこうなる。ラッタナコーシン朝はアユッタヤー時代以来の貴族による共同経営として始まり、彼らの中でたまたま相対的にもっとも有力であったチャクリー家のものが王位に就任した。共同経営を続けるうちに次第に重役ポストの多くを掌中にした貴族ブンナーク家の勢力が社長である王家を凌ぐほどになった。4世王は名目だけの社長職に不満を覚えるようになった。しかし、4世王は貴族への挑戦にはまだ着手せず、それに着手し、経営権を王家に集中して独占するようになるのは5世王であった。パートナーシップによる共同経営が崩壊し、チャクリー王家が社長だけではなく、重役ポストも独占するようになった。これは4世王時代までの「門閥政治(family politics)」[Wyatt 1994; Wilson 1970]の延長である。違いは、モンクット・ファミリーが貴族に代わって主導権を握るようになったということである。チャクリー改革期の変化とは門閥政治の主役の交代にすぎないのである。

最後に、こうした親王支配体制が近代国家形成にどんな影響を与えていたのかを簡単にみておきたい。近代国家は明確に画定された国境の内側において一元的画一的な支配が行き渡ること、つまり領域支配を大きな特色としている。タイではそれは19世紀末以降に確立された。19世紀後半には、タイの西と南ではイギリスが、東ではフランスが植民地領域支配の確立を急いでいた。5世王は1880年代に西洋人を雇って地図の作製に着手する一方、英仏の支配がまだ浸透していない地域の囲い込みに乗り出した。この囲い込み競争が1893年にフランスとの武力衝突(パークナム危機)を招いてメコン河左岸地域を失うと、5世王は残された領土に対する領域支配確立の努力を1894年から始めるのである。それは近隣の植民地の行政制度をまねたもので[Thongchai 1994: 103]、テーサーピバーン(thesaphiban)制と呼ばれ、全国を州、県、郡、区、村という行政単位に区分し、郡以上の単位には首都から官僚を直接派遣した。州はそれまでタイに存在しなかった単位であり、1894年から10年あまりをかけて全国に設置され、各州には植民地の理事官(resident)に相当する州総督がおかれた。ブレイリーが「真のチャクリー改革」や「実際のチャクリー改革」が始まるのは1894年以後であると述べているのはこ

のことを意味している[Brailley 1989: 39-41]。それはすでに首都において果たされていたモンクット・ファミリーへの権力集中状況を温存したまま、地方に対する中央の支配を強化するものであった。

こうしたテーサーピバーン体制の確立は近代国家の体裁を整えるものではあっても、国民国家<sup>46</sup>の成立を意味するわけではなかった<sup>47</sup>。それは多くの地域では領域支配が植民地支配の確立であったことを思い起こせば明らかである<sup>48</sup>。世界の歴史を眺めるならば、国民国家の成立とは、王家・貴族の国家あるいは植民地国家が国民共同体の国家へと変貌することであった。植民地では独立運動の過程において、宗主国が作り上げた近代国家の枠組みを基本的にはそのまま維持しながら、その所有者が宗主国からそれぞれの国民共同体へと交代することで国民国家が成立した。西洋諸国の多くは隣国との軍事・経済競争に勝ち残るために、人的・物的資源の育成や動員増が必要となって、課税や徴兵が強化され、それに伴って代議制が発展することにより<sup>49</sup>、結果として国民国家化が進んでいった。他方、日本のように19世紀に独立を維持した周辺国は列強に対抗するため、同様な資源の最大育成・動員を可能とすべく国民国家が形成されていった。独立国の場合にはいずれも国際社会で勝ち残り生き残るために、文字通り「国民一丸となった」「国民の総力を挙げての」努力が求められ、その結果として国民国家が成立したわけである[Hall 1995; Mann 1995参照]。

タイは日本と同様な周辺独立国であり、植民地化を免れ、国際社会で一人前と見なされるようになるために、近代化に邁進したと考えられがちである。チャクリー改革はそうした目的を達成するための包括的な近代化であったと理解されることが多い。しかし、永井[1994]が明らかにしているように、タイは1855年の不平等条約締結を国家存亡の危機などとはまったく考えておらず、むしろその締結を自ら積極的に求めていた。イギリスやフランスが19世紀後半に近隣地域を相次いで植民地化してゆくと、5世王は前述のように囲い込み競争に参加した。北部ラーンナー地方などの併合には成功するものの、その結末は1893年のフランスとの衝突であり、手痛い敗北であった。これは少なくとも1893年までは5世王は独立の維持に関してさほど強い危機意識を抱いていなかったことを示唆している。この事件後のテーサーピ

<sup>46</sup> 厳密には国民的国家national stateであり、国民国家nation-stateではない。

<sup>47</sup> タイ研究者の中には、テーサーピバーン体制の確立を国民国家の成立と考えるものが少なくない。

<sup>48</sup> ただし、フィリピンのように植民地期に領域支配が十分には確立されなかった事例もある。

<sup>49</sup> これには、国王が上から参政権の範囲を徐々に拡大してゆく場合と、革命などにより下から一挙に拡大される場合の両方がある。

バーン体制導入を危機意識の芽生えの反映と理解できないこともない。しかしながら、領域支配は5世王治世当時、独立国と植民地とを問わず世界の常識として要請されていたことである。その確立を格別の偉業と捉えて、そこに強い危機意識を読みとろうとすることには慎重であるべきだろう。

実際のところ、テーサーピバーン体制以外の面での努力には見るべきものが少ないのである。近代的な軍隊の整備は5世王治世初期に貴族との権力闘争の手段として始まった。5世王が1880年代にこの闘争に勝利を収め、1893年にフランスに敗北すると、軍隊の整備は軽視されるようになった。整備が再び始まるのは1903年に地方で反乱が勃発し、その鎮圧に手間取った後のことであった<sup>50</sup>。言い換えるならば、軍隊は列強ではなく、国内の敵に対処するために整備されたのである。国作りに不可欠な人材の育成に関しては、5世王時代には教育予算はほぼ一貫して国家予算の2%以下にとどまっており、初等義務教育が導入されるのは1921年にすぎない。その1921年当時には近代的な初等教育を行える小学校が設置されていたのは全国の区の半数にも満たなかった[Wyatt 1969: 373, 389]。このため、1939年の調査では10歳以上人口のうち実に68.8%は読み書きができないという有様であった。

改革の重要な成果の1つである官僚制の整備についても、最初の公務員法の施行は1929年4月1日を待たねばならなかった。それまでは、官僚の採用、昇進、給与などについては統一的な規則がなく、省ごとにばらばらに行われていたのである。7世王は、公務員法制定を提言したダムロン親王宛に送った1926年10月28日付けの返書でこう述べている。「今では教育が非常に発展してきた。それゆえ、公務員に採用するものはすぐれた知識を持つものだけに限るべきだ。おまけに今や公務員ポストは充足されてしまっており、公務員希望者の数に足りなくなっている。だから、中立かつ公平に公務員を選ぶ方法を考案しなければならず、熱心に勉強しすぐれた知識を備えたものたちに機会を与えなければならない。また、各省の内部における管理については全省に共通する規則がない。公務員全体に共通する確たる規則を定めるべきである。これは公務員が公平に処遇され、等しく平等に権利や義務を負うようにする

---

<sup>50</sup> 5世王は、1880年代末にもはや貴族からの脅威を感じなくなるまでは、王権を強化し、王権を守るために軍隊の整備に力をいれていた。しかし王権が安泰になると、そうした軍隊への関心は薄らぐ。そうした時期に生じたのが1893年のパークナム事件であった。この事件以後も軍隊強化への関心は強まらなかった。再び関心が強まるのは、1903年に地方で中央集権化に反対する反乱が相次いだ後であった。つまり、5世王時代における軍隊の整備は2つの時期に分けて考えることができるのである。最初は王権を強化し、王権を守るための護衛部隊としての軍隊であった。そして第2期は、中央集権体制を守るために軍隊が整備される。それはちょうど徴兵制が施行される時期であった。そして、5世王時代には軍隊の中核となる陸軍の総司令官は一貫して親王であった。

ためである」[CSC 1993: 21-22]。この法律制定に向けての1927年1月5日の閣議でダムロン親王はこう発言している。「大臣の中には家柄の安定を重視するものがある。もし大臣が家柄のいいものを採用すれば、知識の乏しい官僚が生まれることになる。誰にも一定の学歴を要求するという原則を採用すれば知識の水準に線引きをすることができる」[Ibid.: 151]。これは能力よりも出自を優先した官僚人事が行われていたことを示している。

常識に照らすと、官僚制においては、縁故による登用が5世王、6世王、7世王と時代が下るにつれて減っていったのではないかと想像される。しかしながら、7世王時代にも縁故人事と思われる事例がいくつも見られる。たとえば、1930年5月19日大蔵次官に国税局副局長M.C. チットポーカタウィー・カセームシーが任命された[RKA 47: 645-6]<sup>51</sup>。1893年10月10日生まれの彼は当時弱冠36歳であり、6年制の中等学校ラーチャウィッターヤーライ校の4年を修了したにすぎなかった[Phunsikasem 1949: k]。当時の大蔵官僚の間では学歴や年齢が特に高かったわけではない。続いて1931年2月9日には、M.R.W.カチット・カセームシーが大蔵次官補佐に抜擢された。彼はケンブリッジ大学卒業という高学歴ながら、28/9年に帰国して大蔵相に入省したばかりの弱冠26歳であった。彼らの抜擢は、前者が前大蔵大臣M.C.ネーン・カセームシー(スッパヨーク親王)の異母弟、後者が実子という点を考慮に入れて初めて合点がゆくのである[Khacit 1970: k-s; Supphawat 1974: 101-3]。1929年6月11日に発表された文部省の人事異動も同様な縁故人事を窺わせる[RKA 46: 923-4]。事務次官補佐兼チューラーロンコーン大学学長(phu banchakan)のサンタットの病気を理由とする同年6月1日付の辞職を承認し、6月11日付けで同大学政治学部長兼工学部長のシリを事務次官補佐兼同大学政治学部長に任命するという異動である。既に同年5月1日付けで文部次官が内務次官に転出して不在であったため、次官補佐のシリは次官代行を務め、同年12月10日には次官代理[Ibid.: 3350]、30年6月12日には次官に任命されることになる[RKA 47: 1099]。サンタットとシリはプラーヤー・チャイヤスリンの28子と32子であり、そして彼らの兄(18子)は1926年まで文部大臣を務めていたサナン(チャオブラーヤー・タムマサックモントリー)であった。なお一層顕著なのは外務省人事である。初代大臣のテーワウォン親王が1923年6月28日に死亡した後大臣に就任したのは、1918年10月23日に弱冠35歳で外務次官に就任していた次男M.C.トライトッサプラパンであった。そればかりではなく、彼のもとで弟たちも出世を遂げてゆく。4男のダムラットダムロン(1892年6月2日～

---

<sup>51</sup> これは次官代理への任命であり、正式には1931年1月10日に就任した[RKA 47: 2462]。彼は32年2月18日に物品税局長へ転任する[RKA 48: 4656-7]。

1941年7月24日)は25年6月17日駐ドイツ公使となり[RKA(K) 63]、30年11月29日に駐イギリス公使に転じると、11男のプリーディテープボン(1893年8月3日～1970年5月11日)が後任の駐ドイツ公使となった[PKPS 43: 213]。さらに15男のニコーンテーワン(1898年1月15日～1976年8月3日)も29年7月1日に外務省政治局長に任命された[RKA 46: 787-8]<sup>52</sup>。これは「何ゆえに閣僚になったのか」という問いかけに対して、「国王の親族だから」「国王の幼なじみだから」「国王の家庭教師だから」といった説明が十分な説得力をもつ時代であった<sup>53</sup>。大臣の人事が出自やコネ優先で行われていたのであるから、次官以下の官僚の人事でも同様なことが罷り通るのは避けがたかったということであろう。

では、国力の重要な要素である経済についてはどうであろうか。木村教授は経済発展には1つのパターンがあるとして、次のように指摘しておられる。「それは国家を後楯とし、国民のナショナリズムを直接の支えとする経済発展の図式に他ならない。そこでは政府が推進する富国強兵と殖産興業、ならびにそれらに対する国民の熱狂的な支持が、経済発展をもたらす上で、決定的な役割を演じている。そしてそれは先進国よりも後進国、あるいは先発資本主義国よりも後発資本主義国に、より妥当する発展方式であったといえよう」[木村 1993: 90]。日本の例を引き合いに出すまでもなく、そうした殖産興業で重要なものの1つは国営企業や官営工場である。ところが驚くべきことに、1932年以前のタイには殖産興業を狙った国営企業はほぼ皆無であった<sup>54</sup>。この時期にその穴を埋めるかのように目を引くのは、国王の王庫金である。王庫金は不動産と並んで株式にも投資を行い、その副次的効果として殖産興業にある程度寄与した[Suehiro 1989: 90-4]。しかし王庫金は国家からは独立した国王の私有財産であ

<sup>52</sup> この時代の縁故人事が、1932年以後に外務省でテークン一族(テークン親王の子孫)、文部省でテークンハッサディン一族やマーラーン一族が局長、次官、大臣などの高官を出す重要な基盤となったものと思われる。

<sup>53</sup> この点に関して、今日の問題として興味深いのは、1993年10月にM.R.W.シリボン・トーンヤイ(4世王の曾孫)が複数の候補者の中から選ばれて空軍総司令官に就任したとき、大方のタイ人が、王室の遠縁という毛並みのよさを理由として、この人選を当然と思ったという事実である。確かに、多くの行政官庁では1932年の立憲革命以後も王族が庶民階層出身者に混じって局長や次官といった要職に抜擢されてきた。しかし、軍隊においては、M.R.W.シリボンは1932年以後では陸・海・空の3軍の総司令官に就任した最初の王族なのである。これはM.C.やM.R.W.位の王族に軍人がいなかったからではない。王族であっても、重要なポストには任命されなかったのである。それにもかかわらず、彼の任命に違和感が感じられないのは、タイ社会が再び1932年以前のように王族が特権階層と見なされる状況へと少しばかり戻りつつあるからであろう。

<sup>54</sup> 国営企業がまったくなかったわけではない。非経済的な事情を優先して創設された鉄道局や、第1次世界大戦中にドイツの会社を接収して設立されすぐに破産した海運会社などがあった。しかし、それは殖産興業を狙ったものではなかった。

り、殖産興業ではなく、ひたすら王家の家産を増やすために運営されていたことを忘れてはならない。また、主力産業である稲作の振興についても、政府の寄与は乏しかった[Feeny 1982]。このように政府が殖産興業に熱心に取り組まなかったため、工業はほとんど興ることなく、タイは植民地風の経済発展の道をたどることになった[アンダーソン 1987: 168参照]。

チャクリー改革は、タイで「統治改革(kanpatirup kanpokkhong)」と呼ばれていることに示されるように、王権の強化、中央省庁の再編成、領域支配の確立にとどまっていた。それは包括的な近代化ではなく、経済・軍隊・社会などの改革にまではさほど踏み込んでいなかったのである。近隣の植民地との際だった違いは、西洋人ではなく、親王が支配していたということのみではないかと思われるほどである。なぜ国際社会で生き残り、地位を向上させるためのさらなる近代化の努力が十分には払われなかったのか。その理由は国王や親王を中心とする支配階層が現状に満足しており、そうした必要性を感じていなかったということに尽きるであろう。それをよく示しているのは、5世王が20世紀初頭に不平等条約の部分改正(領事裁判権の一部撤廃)のための決め手としたのが、司法制度の整備ではなく、フランス(1907年)とイギリス(1909年)への領土の割譲であったという事実である[Wyatt 1984: 206-7]。これは王朝国家ならではの対処法といえよう。

親王体制下においてモンクット・ファミリーがなぜ中途半端な近代化に満足していたのか。この権力集団はまず国内では国王親政体制下で政治権力を独占的に享受していた。次に、対外的には、英仏が東南アジア大陸部において安定した国際環境を作り上げていた。19世紀前半までタイと戦争を繰り返してきた敵国ビルマとヴェトナムは植民地となって牙を抜かれ脅威ではなくなっていた。英仏はさらに19世紀末には密かにタイの独立を維持することを約してもいたのである<sup>55</sup>。モンクット・ファミリーはこうした状況に満足を覚えており、権力の縮小につながりかねない改革には消極的であった。王権を強化し、地方への支配を確立すればそれで十分だったのである。憲法の制定や国会の開設などもつてのほかであった<sup>56</sup>。英仏

<sup>55</sup> イギリスとフランスは1896年にチャオブラヤー流域(タイの全土ではないが、主要部分はすべて含まれる)の独立を維持することに両国間で合意した。タイはこの条約の当事国ではないものの、遅くとも6世王時代には東南アジア大陸部ではさらなる植民地化の脅威がうせていたことは明らかである。

<sup>56</sup> 今日のタイの教科書では、5世王、6世王、7世王とも「民主的な国王」であったと説明されている。しかし、5世王が憲法制定や国会開設に強く反対したのは有名である。6世王は模擬国会を演じてみて、まともな討論ができなかったからタイには議会政治は適さないと判断を下した。しかし、2大政党制で模擬討論を行い、国王が1つの政党の党首を務めていれば、誰も国王を批判できないため、まともな討論が不可能なのは自明のことであった。否定するための模擬国会であったと述べても過言ではない。7世王は憲法制定の意思を持っていたが、顧問らの反対を受けて断念した。指導力の弱い7世王といえど、

と競おうとしたり、背伸びをして国際社会で一級国となろうとしたりすれば、資源の動員を増やす必要があり<sup>57</sup>、せっかく築き上げた「国王の財産としての国家(rat ratchasombat)」[Nithi 1985: 22]が動揺を来しかねない。つまり、彼らには王朝国家を国民国家へと変質させてゆく契機が稀薄だったのである。

国家の発展や近代化を蔑ろにする王朝国家への反発は早くも1912年に青年将校のクーデタ計画となって表面化した[玉田 1989]。このクーデタは未然に発覚して失敗に終わるものの、6世王時代以後一部の知識人の間では国王よりもチャート(chat, 英語のnationの訳語であり、国民・民族・国家の意味がある)の方が重要であるという立場から絶対王制を批判する勢力が芽生えてきた。これに対して、6世王は体制維持のために国王への絶対的忠誠を臣民に説いた。モンクット・ファミリーの私的利害を、チャートの公的利害よりも優先する上からのナショナリズムの試みであった。在野のナショナリズムと国王のナショナリズムの競合状況が生まれたわけである。

前者の在野のナショナリズムに呼応して、1932年6月24日に立憲革命により親王支配体制を打倒したのが人民党であった。総勢わずか99名の人民党の中心メンバーは軍将校や行政官であった。彼らが決起した一因は、身分や職業の流動性や平等を大きな特徴とする近代社会の原理とは裏腹に、能力よりも出自や有力者との個人的なコネを重視して行われる人事への不満であった。政治権力を握った人民党は、親王支配体制がやり残した近代化作業に着手する。それは国営企業を通じた殖産興業、軍事力整備、教育の普及、社会的経済的弱者の救済、そして国民文化の創出であった。タイで国民国家が形成されるのはこの人民党の時代であった

<sup>58</sup>。

## 引用文献一覧

赤木攻. 1981. 「チャオプラヤー・プラサデット: タイ近代教育の案内者」阿部洋編『現代に生きる教育思想8アジア』ぎょうせい、251-284頁。

ベネディクト・アンダーソン著／白石隆・白石さや訳. 1987. 『想像の共同体』リプロポート。

---

最終的な決定権は国王にあったのであり、もし彼が断固として憲法制定を主張すれば、立憲革命前に制定できたはずである。彼にはそうした決意がなかったのである。

<sup>57</sup> ただし、徴兵制の導入は遅まきながら、逡巡の後に1905年に着手された。

<sup>58</sup> 人民党政権期のナショナリズムについては、近々『東南アジア研究』掲載予定の拙稿を参照されたい[玉田 1996]。

- Aphairacha, Caophraya. 1938. "Prawat Caophraya Aphairacha" in *Cotmai het phraratchakit raiwan nai phrabatsomdetphra Cunlacomklaao caoyuhua phak 16* (Phim pen thi raluk nai ngan phraratchathan phloengsop Caophraya Aphairachamahayutithammathon). Bangkok: Rongphim Sophonphiphat-thanakon, pp. (1)-(13).
- Batson, Benjamin A. 1984. *The End of Absolute Monarchy in Siam*. Singapore: Oxford University Press.
- Battye, Noel Alfred. 1974. "The Military, Government and Society in Siam, 1968-1910", Ph. D. thesis, Cornell University.
- Bodinthondechanuchit, Caophraya. 1961. "Samnao prawat khong phonek Caophraya Bodinthon-dechanuchit", in *Ruam ruang muang Nakhonsithammarat* (Phim pen anuson nai ngan phraratchathan phloengsop phonek Caophraya Bodinthondechanuchit (Yaem na Nakhon)), Bangkok: Rongphim Rungruangrat, pp. ch-th.
- Bradley, D.. 1971. *Dictionary of the Siamese Language*. (Reprint, originally published in 1873), Bangkok: Rongphim Khurusapaha Latphrao.
- Brailey, Nigel. 1989. *Two Views of Siam on the Eve of the Chakri Reformation*. Singapore: Kiscadale.
- Brown, Ian. 1992. *The Creation of the Modern Ministry of Finance in Siam, 1885-1910*, London: Macmillan.
- Butri Wirawathaya, M.R.W. & Phuchong Cunnawat (eds), 1992. *Nangsu thiraluk kanpoet phraamusawari phracaoborommawongthoe phraongcao Krisadaphinihan Kromphra Naretworarit*. Bangkok: Rongphim Krungthep (1984).
- Caonathimonthonthahanbok thi 6 Khai Sapsitprasong, 1980. *Phraphrawat lae phrakaraniyakit phontri phracaoborommawongthoe Krommaluang Sapsitprasong* (Anuson nai ngan phraratchathan phloeng-sop momcao ying Bunciathon (Chumphon)), Bangkok: Congcaroen Kanphim.
- Charnvit Kasetsiri. 1976. "Each Generation of Elites in Thai History", *Journal of Social Science Review*, 1(1): 189-226.
- CSC(Civil Service Commission = Khanakammakan kharatchakan phonlaruan). 1993. *Phrabatsomdetphra Pokklaao caoyuhua kap rabop kharatchakan phonlaruan*. Bangkok: Prachachon.
- Cunlacomklaocaoyuhua, Somdetphrabat. 1973. *Phraborommarachawat nai ratchakan thi 5 phraratchathan dae phracaolukyathoe*, in Anuson nai ngan chapanakitsop nang Citra Tawanchai, Bangkok: n.p., pp. 1-24.
- . 1994. "Thamniam ratchatrakun nai krung sayam", In *Thamniam ratchatrakun nai krung sayam lae phrabatsomdetphra Comklaocao krung sayam* (Nangsu anuson nai ngan phrarathathan phloengsop



- phraworawongthoe phraongcao Cakraphanphensiri), Bangkok: Rongphim Krungthep (1984), pp. 1-38.
- Damrongrachanuphap, Kromphra. 1917. "Prawat Caophraya Wichitwongwutthikrai", in *Tamnan phraaram lae thamniap somnasak*. (Phim caek nai ngansop Caophraya Wichitwongwutthikrai (M.R.W. Khli Suthat)), Bangkok: Rongphim Thai, pp. (2)-(15).
- . 1918. "Khamnam", in *Cotmai het lae nirat london khong mom Rachothai* (Phim caek nai ngan sop Phraya Montrisuriyawong Chun Bunnak), Bangkok: Rongphim Thai, pp. (1)-(37).
- . 1922a. "Ruang prawat khong Caophraya Phatsakorawong", in *Khamklon khong Caophraya Phatsakorawong (Phon Bunnak)*. (Phim nai ngan phraratchathan phloengsop Caophraya Phatsakorawong). Rongphim Sophonphiphatthanakon, pp. kh - n.
- . 1922b. "Ruang prawat Caophraya Bodinthondechanuchit", in *Prachum phongsawadan phakthi 24 cotmai het ruang prap ho* (Phim nai ngan phraratchathan phloengsop comphon Caophraya Bodinthondechanuchit (M.R.W. Arun Chatrakun na Krungthep), Bangkok: Sophonphiphatthanakon, pp. k-th.
- . 1923. "Khamnam", in *Thetsana chalong ayu Caophraya Thewetwongwiwat 15 kan* (Phim nai ngan phraratchathan phloengsop Caophraya Thewetwongwiwat), Bangkok: Rongphim Phisanbannaniti, pp. (1)-(8).
- . 1928. "Phraprawat mahaammatek phraworawongthoe phraongcao Carunsakkarudakon", in *Nibat chadok lem 16* (Phim nai ngan bancu phraatthi mahaammatek phraongcao Carunsakkarudakon), Bangkok: Rongphim Sophonphiphatthanakon, pp. (3)-(8).
- (Somdetkromphraya). 1939. "Ruang prawat Caophraya Yommarat" phak thi 1, in *Samnao phraratcha-hahatthalekha suan phraong phrabatsomdetphra Cunlacom klaocaoyuhua thung Caophraya Yommarat (Pan Sukhum) kap prawat Caophraya Yommarat* (Phimcaek nai ngan phraratchathan phloengsop Caophraya Yommarat), Bangkok: Rongphim Bamrungham, pp. 22-112.
- (Somdetkromphraya). 1940. "Prawat Phraya Montrisuriyawong" in *Thiraluk nai ngan phraratchathan phloengsop Phraya Montrisuriyawong (Wichien Bunnak)*, Bangkok: Sophonphiphatthanakon, pp. 1-19.
- . 1983. *Phraratchaphongsawadan krung rattanakosin ratchakan thi 2 lem 1*. Bangkok: Rongphim Khurusapha Latphlao. (7th printing. Originally published in 1919).
- Feeny, David. 1982. *The Political Economy of Productivity: Thai Agricultural Development 1880-1975*, Vancouver: University of British Columbia Press.
- Hall, John A. 1995. "Nationalism, Classified and Explained", in *Notions of Nationalism*, edited by Sukumar Periwal, Budapest: Central European University Press, pp. 8-33.

- Hophrasamut Wachirayan. 1925. *Cotmai het ruang songtang phraborom mawongsanu wong krung rattanakosin chabap phim khrang thi 2* (Phim nai ngan phrasop somdetphracanon ngan thoe caofa Malininop darasiriniphaphannawadi Krommakhun Sisatchanalaisurakanya). Bangkok: Rongphim Sophonphiphatthanakon.
- 石井米雄. 1975. 『上座部仏教の政治社会学』 創文社.
- Kalahom, Krasuang. 1953. *Thiraluk wan sathapana krasuang kalahom 8 mesayon 2430 thung 8 mesayon 2496.*, Bangkok: Rongphim Aksonprasoet.
- Khanakammakan catphim ekasan thang prawatisat samnak nayokratthamonti. 1973. *Cotmai het phraratchakitraiwan nai ratchakan thi 5 pi marong pho. so. 2411 - pi raka B.E. 2416.* Bangkok: Rongphim Samnakthamniapnayokratthamonti.
- Khacit Kasemsi. 1970. "Prawat", in *Thanakhan haeng prathet thai phim pen anuson nai kanphraratchathan 2474/phloengsop Mom Kasemsisupphawong (M.R.W. Khacit Kasemsi)*, Bangkok: Mitnarakanphim, pp. k-s.
- 木村雅昭. 1993. 『国家と文明システム』 ミネルヴァ書房.
- Komarakunmontri, Phraya. 1961. "Prawat", in *Pramuan wohan khong Phraya Komarakunmontri* (Phim nuang nai ngan phraratchathan phloengsop mahaammatek Phraya Komarakunmontri (Chun Komarakun na Nakhon)), Bangkok: Rongphim Bamrungnukunkit, pp. k-th.
- KR5 = *Kotmai Ratchakan Thi 5* (R.S.は小暦を指す), Bangkok: Rongphim Bamrungnukunkit.
- KR6 = *Kotmai Ratchakan Thi 6*, Bangkok: Rongphim Bamrungnukunkit.
- KR7 = *Kotmai Ratchakan Thi 7*, Bangkok: Rongphim Bamrungnukunkit.
- 黒田景子. 1985. 「華僑地方国ソクラーの成立」 『南方文化』 12: 71-92.
- Laothong Amarinrat. 1979. "Kansong nakrien pai suksa tang prathet tangtae B. E. 2411-2475", M. A. thesis, Chulalongkorn University.
- Mahaammattayathibodi, Phraya. 1959. "Prawat Phraya Mahaammattayathibodi", in *Ruang kamnoet krom phaen thi* (Phim caek nai kan phraratchathan phloengsop mahaamattho Phraya Mahaammattayathibodi (Saeng Wirayasiri)), Bangkok: Rongphim Borisat S. Phayungphong, pp. 1-13.
- Mahatthai, Krasuang. 1992. *100 pi mahatthai*. Bangkok: Rongphim Siriwatthanakanphim.
- Maninitrithip Buri. 1989. *Lamdap ratchasakun Thewakun - Ditsakun*. (Thiraluk nai ngan phraratchathan phloengsop M.R.W. Maninitrithip Buri), Bangkok: Rongphim Sayamrat.
- Mann, Michael. 1995. "A Political Theory of Nationalism and Its Excesses", in *Notions of Nationalism*,

- edited by Sukumar Periwal, Budapest: Central European University Press, pp. 44-64.
- Morant, R. L. 1894. "Memorandum on the Present Political Situation in Siam", in *Two Views of Siam*, edited by Nigel Brailey, 1989, Singapore: Kiscadale, pp. 85-105.
- 村嶋英治. 1987. 「現代タイにおける公的国家イデオロギーの形成: 民族的共同体(チャート)と仏教的王制」 日本国際政治学会編『国際政治84 アジアの民族と国家: 東南アジアを中心として』118-135頁.
- 永井史男. 1994. 「外圧なき開国: 19世紀シヤムにおける近代化の開始に関する一考察(1)(2・完)」『法学論叢』135(2): 49-71, 136(1): 50-80.
- . 1995. 「欧米における19世紀タイ史研究に関する動向(1)(2・完)」『政治経済史學』352: 43-61, 354: 17-34.
- Nairua, Rongrien. 1970. *Sam samoe 2513*. Bangkok: Rongphim Khurusapha Latphlao.
- Natthawut Sutthisongkhram, 1974. *Chiwaprawat Caophraya krung rattanakosin*. Bangkok: Samnakphim Bandansan.
- Natthawut Sutthisongkhram & Bancoet Intthucan. 1980. *Phracaborommawongthoe Krommaluang Phracaksinlapakhom phu thawai chiwit raksa phaendin isan*. Bangkok: Watcharin Kanphim.
- Nithi Iosiwong. 1980. *Prawatisat rattanakosin nai phraratchaphongsawadan ayutthaya* (Ekkasan wichakan mailek 14, Sathaban Thaikhadisuksa, Thammasat University). Bangkok: Samnakphim Bannakit.
- . 1982. *Watthanatham kradumphi kap wannnakham ton rattanakosin*. (Ekkasan wichakan mailek 20) (2nd printing) Bangkok: Sathaban Thaikhadisuksa, Thammasat University.
- . 1984. *Kanmuang thai nai samai phra narai*. Bangkok: Thammasat University Press.
- . 1985. "Phasa thai mattrathan kap kanmuang", *Phasa lae nangsu*, 17(2) (October 1984 - March 1985): 11-37.
- . 1986. *Kanmuang thai samai phracao krung thonburi*. Bangkok: Samanakphim Sinlapawatthanatham.
- Nitisat. 1931.
- Noi Paorohit, 1931. *Ruang tang Caophraya krung rattanakosin* (Phim nai ngan phraratchathan phloengsop than Noi Paorohit), Bangkok: Rongphim Lahuthot.
- ONCC(Office of the National Cultural Commission, Ministry of Education). 1991. *100 pi somdetphramahitalathibeson Adunyadetwikrom phraborommaratchanok*. Bangkok: ONCC.
- Phichaiyat, Caophraya. 1946. "Prawat yo", in Damrongrachanuphap, Kromphraya, *Ruang thio muang phama* (Phim nai ngan phraratchathan phloengsop Caophraya Phichaiyat (Dan Bunnak)), Bangkok: n.

p., pp. k-p.

Phunphitsamai Ditsakun. 1955. “Prawat Caophraya Surabodinthonsurinthonruchai (Phon Carucinda)”, in Somdetcaofakromphraya Naritsaranuwat lae Somdetkromphraya Damrongrachanuphap, *Sansomdet* (phak 19), (Phim pen anuson nai ngan phrarachathan phloengsop Caophraya Surabodinthonsurinthonruchai), Bangkok: Rongphim Phakdipradit, pp. ng-n.

Phunsikasem Kasemsi. 1949. Prawat thi raluk momcao Citphokkhathawi Kasemsi, in *Winyan haeng manut* (Anuson nai ngan phraratchathan phloengsop mahaammattri M. C. Citphokkhathawi Kasemsi), Bangkok: Rongphim Sophon, pp. k-ch.

PKPS = *Prachum Kotmai Pracam Sok*, composed by Sathien Lailak, et . al., Bangkok: Rongphim Daily Mail, 1934-1935.

Pritsadang, Phraongcao (Pritsdang, Prince). 1892. “Notes on Siamese Administration”, in *Two Views of Siam*, edited by Nigel Brailey, 1989, Singapore: Kiscadale, pp. 49-79

----. 1970. *Prawat yo naiphanekephiset phraworawongthoe phraongcao Pritsadang tae prasut B.E. 2392 thung B.E. 2472* lem 1. (reprint. Anuson nai ngan phraratchathan phloengsop Luang Anekniyawathi (M.R.W. Nat Chumsai)), Bangkok: Niyomwitthaya.

Ratchalekhathikan, Samnak. 1988. *Prawat samnak ratchalekhathikan* (2nd printing). Bangkok: Samnak Ratchalekhathikan.

RKA = *Ratchakitamubeksa*

RKA(K) = *Ratchakitamubeksa Chabap Kritsadika*

Sinlapakon, Krom. 1983. *Akkharamukrom prawatisat thai akson k.* lem 1. Bangkok: Sahaprachaphanit.

Sirirattanabutsabong, Phraongcao. 1981. *Phraprawat somdetphracaoborommawongthoe caofa Boriphatsukhumphan Kromphra Nakhonsawanworaphinit.* (Phim nai okat chalong roi pi wan prasut), Bangkok: Canwanit.

Sithammathibet, Caophraya. 1976. “Prawat sangkhep Caophraya Sithammathibet”, in *Anuson nai ngan phraratchathan phloengsop mahaammatek Caophraya Sithammathibet (Cit na Songkhla)*, Bangkok: Rongphim Chuanphim, pp. (1)-(20).

So. Phlainoi. 1992. *Suankulap: Tamnan kansuksa samai mai nai krung sayam*. Bangkok: Matichon.

Sucitra Sutdiokrai. 1983. “Bot samruat chiwit lae phonngan khong khru thep”, in *Khru thep* edited by Chonthira Sattayawatthana, Bangkok: Samnakphim Thaiwatthanaphanit, pp.1-22.

Suehiro Akira. 1989. *Capital Accumulation in Thailand 1855-1985*. Tokyo: The Centre for East Asian

Cultural Studies.

Supphawat Kasemsi. 1974. "Phraprawat phracaoborommawongthoe Krommamun Thiwakorawongprawat", in *Anuson ngan phraratchathan phloengsop Momcao Watthayakon Kasemsi*, Bangkok: Chaicaroenkanphim, pp. 1-107.

Suket Apichatbut. 1978. *Krasuang kankhlang khroprop 100 pi 14 mesayon 2518* (Anuson nuang nai ngan phraratchathan phloengsop nai Suket Aphichatbut), Bangkok.

Supphayok, Praongcao. 1933. *Phraong Supphayok*. (Phim caek nai ngan phraratchathan phloengsop phraworawongthoe phraongcao Supphayokkasem), Bangkok: Rongphim Sophiphatthanakon.

Suratphan Dunlayacinda (comp.). 1974. *Pramuan khokhiithen bang prakan khong phonek Krit Siwara*. Bangkok: Rongphim Yanhi.

Surawongwatthanasak, Caophraya. n.d.(1912?). *Prawat naiphontho Caophraya Surawongwatthanasak (To)*. n.p.

Suriyanuwat, Phraya. 1937. "Prawat" in *Phraborommarachowat lae phraratchahathalekha somdetphramathibodi sisintharamaha Culalongkon phracunlacom klaocaoyuhua song mi phraratchathan dae mahaammatek Phraya Suriyanuwat* (Phim nai ngan phraratchathan phloengsop mahaammatek Phraya Suriyanuwat). Bangkok: Rongphim Sikrung, pp. 7-10.

Sutcarit Thawonsuk, 1989. *Phraprawat lae ngan khong somdetphracaoborommawongthe Kromphra Sawatwattanawisit* (Nangsu anuson nai ngan phraratchathan phloengsop phonakatcattawan M. C. Wisitsawatdirak Sawatdiwat).

泰國林氏宗親會[編]. 1986. 『泰國西河林氏族譜』 Bangkok: Ruangnam Kanphim.

玉田芳史. 1989. 「タイにおける1912年反乱計画」 『愛媛法学会雑誌』 15(3・4): 149-84.

---. 1994. 「タイの政治学教育」 『政治学の研究教育の国際化に関する基礎的研究』 京都大学法学部、pp. 41-55.

---. 1996. 「タイのナショナリズムと国民形成」 『東南アジア研究』 掲載予定.

Thammasakmontri, Caophraya (Coem Saengchuto). 1975. "Phathomhap chiwaprawat", in *Thammabannakan* (Anuson nai phithi poet anusawari comphon lae mahaammatek Caophraya Thammasakmontri), Bangkok: Kanphim Phranakhon, pp. 1-99.

Thammathikkoranathibodim, Caophraya. 1942. "Prawat Caophraya Thammathikkoranathibodi", in *Phraratchahathalekha thung Caophraya Thammathikkoranathibodi (M.R.W. Pum Malakun)* (Phim nai ngan phraratchathan phloengsop Caophraya Thammathikkoranathibodi), Bangkok: Rongphim Thaikhasem,

pp. k-d.

- Thamrongsak Ayuwatthana. 1972. *Ratchasakun cakriwong lae ratchasakun somdetphracao Taksin maharat chabap sombun (phak ton)*. (2nd printing). Bangkok: Bannakit Trading.
- Thaniniwat, Phraongcao. 1939. "Ruang prawat Caophraya Yommarat" phak thi 2, in *Samnao phraratchahat-thalekha suan phraong phrabatsomdetphra Cunlacom klaocaoyuhua thung Caophraya Yommarat (Pan Sukhum) kap prawat Caophraya Yommarat* (Phimcaek nai ngan phraratchathan phloengsop Caophraya Yommarat), Bangkok: Rongphim Bamrungtham, pp. 113-154.
- . 1943. "Phraprawat phraworawongthoe Krommamun Thewawongwarothai", in *Cotmaihef fobang* (Phim caek nai ngan phraratchathan phloengsop phraworawongthoe Krommamun Thewawongwarothai), Bangkok: Sophonphiphatthanakon, pp. (1)-(35).
- . 1953. "Phraprawat phraworawongthoe Krommamun Adisonudomsak", in *Khlong ramakian phak 2* (comphon P. Phibunsongkhram lae thanphuying Laiat Phibunsongkhram phim caek nai ngan phraratchathan phloengsop phonek phraworawongthoe Krommamun Adisonudomsak), Bangkok: Rongphim Phracan, pp. 1-7.
- .(Phitthayalapphrutthiyakon, Krommamun). 1974. *Attachiwaprawat phraworawongthoe Krommamun Phitthayalapphrutthiyakon*. (Phim nai ngan phraratchathan phloengsop phraworawongthoe Krommamun Phitthayalapphrutthiyakon), Bangkok: Rongphim Tiranasan.
- Thian Caroenwatthana. 1983a. "Prawat Khunluangphraya Kraisi (Pleng Wephara)", in *Anuson nai ngan phraratchathan phloengsop Khunluangphraya Kraisi (Pleng Wephara)*, Bangkok: Rongphim Rung-ruangtham, pp. (1)-(11).
- . 1983b. "Prawat lae phonngan khong Khunluangphraya Kraisi (Pleng Wephara)", in *Anuson nai ngan phraratchathan phloengsop Khunluangphraya Kraisi (Pleng Wephara)*, Bangkok: Rongphim Rung-ruangtham, pp.1-80.
- Udom Citraphakdi. 1994. "Phraratchachiwaprawat comphon somdetphraanuchathirat caofa Cakraphong-phuwanat Krommaluang Phitsanulokprachanat", in *Thiraluk phithi peot phraanusawari comphon somdetphracaborommawongthoe caofa Cakraphongphuwanat Krommaluang Phitsanulokprachanat*, Bangkok: Rongphim Dao, pp. 19-52.
- Wilson, Constance M. 1970. "State and Society in the Reign of Mongkut, 1851-1868", Ph. D. thesis, Cornell University.
- Wisut Krairoek. 1956. *Ruang khong Caophraya Mahithon* (Thiraluk nai ngan phraratchathan phloengsop

- Caophraya Mahithon (Lao Krairoek)), Bangkok: Rongphim Tironnasan.
- Wongsanupraphat, Caophraya. 1941. *Prawat naiphonek Caoaphraya Wongsanupraphat (M.R.W.Sathan Sanitwong)* (Kharatchakan nai kromrotfailuang lae kongthang kromyothathetsaban phimcaek pen thiraluk nai ngan phraratchathan phloengsop naiphonek Caophraya Wongsanupraphat (M.R.W.Sathan Sanitwong). Bangkok: Rongphim Kromrotfai.
- Woraphongphiphat, Caophraya. 1941. "Prawat yo", in *Suwannaphumnithanwacanalangkan* lem 2 (Nangsu anuson nai ngan phraratchathan phloengsop Caoaphraya Woraphongphiphat (M.R.W. Yen Itsarasena)). Bangkok: Rongphim Sophonphiphatthanakon, pp. (1)-(2).
- Wyatt, David K., 1969. *The Politics of Reform in Thailand: Education in the Reign of King Chulalongkorn*. New Haven: Yale University Press.
- . 1984. *Thailand: A Short History*. New Haven: Yale University Press.
- . 1994. "Family Politics in Nineteenth Century Thailand", In *Studies in Thai History*. Chiangmai: Silkworm Books, pp.107-130 (Originally published in 1968).
- Yommarat, Caophraya. 1939. "Khao ratchakan" in *Akkharamukrom phumisat 3 cangwat khu Suphanburi Kancanaburi Nakhonpathom*. (Phim nai ngan phraratchathan phloengsop mahaammattayok Caophraya Yommarat). Bangkok: Rongphim Sophonphiphatthanakon, pp. (1)-(14).